人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要

第 5 号　2014 年度

MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

人と自然
Human and Nature

Contents

Vol.5 2014

特集

特集１　第２回ロングトレイルシンポジウム

挨拶		安藤宏基	4
		阿部守一	6
		節田重節	8
特別講演	御嶽山の噴火から学ぶもの	荒牧重雄	10
講演１	フットパスに見る英国のロングトレイル	節田紫乃	14
講演２	海外と日本のロングトレイルの歩き方	ルーカス B.B.	24
報告１	「山の日」の制定とトレイル	磯野剛太	28
報告２	オープンする白山白川郷トレイルについて	山田俊行	30
報告３	新幹線開通とロングトレイル	木村　宏	32
日本ロングトレイル協議会報告		前川正彦	35

解説　中村達　／　進行　村田浩道

特集２　第５回環境思想シンポジウム
——日本における環境思想をどのように展開するか

挨拶		岡島成行	38
		結城正美	40
講演１	環境人文学について	ウルズラ・ハイザ	43
講演２	デジタル環境人文学	ジョン・クリステンセン	45
質疑＆応答、ディスカッション、まとめ			50

進行　結城正美　／　まとめ　野田研一

特別インタビュー【第４回】

アメリカ文学が織りなす自然　——ゲーリー・スナイダーとの対話から
名桜大学学長　山里勝己　58

小諸 Tree House Project

66

研究・調査

論考　日本における自然学校の意義　岡島成行　68
調査報告　米・国立公園局における職員研修システムについて　関　智子　74

事業報告

第 4 回浅間大学院生セミナー
活動レポート　84
学生発表要旨　88
アメリカインターン報告 1　辻　梨花　100
アメリカインターン報告 2　松岡宏明　104

第 15 期自然学校指導者養成講座　108
自然学校新入職員研修会　123
自然学校運営者合同研修会　132
CONE トレーナー養成会・認定会　135
自然ガイドのための安全管理技術研修会（6 月、12 月）　137
自然体験活動指導者制度の枠組みを検討する研究会　142
トレッキング講座（6 月、1 月）　147

安藤財団の自然体験活動の取り組みについて　151

巻末資料

安藤百福センター運営組織　154
2014 年度主催等事業･講座　155
2014 年度上級指導者研修会利用状況　156
2014 年度利用状況　159

投稿論文規程　162

あとがき　163

特集1　第2回ロングトレイルシンポジウム

期日　2015 年 2 月 21 日(土)
主催　日本ロングトレイル協議会
共催　公益財団法人　安藤スポーツ・食文化振興財団
　　安藤百福記念　自然体験活動指導者養成センター
解説　中村　達(日本ロングトレイル協議会)
進行　村田浩道(日本ロングトレイル協議会)

挨拶

安藤　宏基（公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団　理事長）

安藤スポーツ・食文化振興財団の理事長を務めています安藤です。私は今後、ロングトレイル普及のためにこの安藤百福センターとしてどのようなことができるかということをお話しします。

まず、その前に当財団について少しだけ説明させていただきます。このパンフレットにありますように、安藤百福が 1983 年にこの財団を創設し、もう 32 年目になりました。この財団は、安藤百福が青少年の心身育成のために食とスポーツを支えたいと願って創設した財団でございます。現在は公益財団法人として活動しており、安藤百福が寄付しました日清食品の株式をベースに運営を行っています。活動は、大きく分けて 4 つあります。スポーツ関係では、小学生陸上関係の活動があり、2 番目のこの「自然って面白い」というところが今回のロングトレイルの部分になっています。自然体験の分野では「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」を行っています。また、この小諸の地で安藤百福センターを、ちょうど安藤百福が生誕 100 年の時に作らせていただきまして、ここを拠点に自然体験活動を行っています。この中にロングトレイルと書いてありますけれども、今後、財団が一番力を入れて行こうとしている分野でございます。上級者の指導者育成を、ここで毎年行っており、10 年間で 3,000 人以上の上級指導者を育てていこうということで、今、岡島成行先生（青森山田学園理事長）や、節田先生、中村達先生（株式会社ネーチャーインテリジェンス代表取締役）を中心とした委員会で進めてもらっています。それ以外に小諸ツリーハウスプロジェクトがあり、6 つのツリーハウスを作っています。こちらは一般の方に来ていただき、楽しい場所になっています。

その他には、「食創会」という会を運営しており、新しい食品の創造と開発を進めるということを行っています。

また、インスタントラーメン発明記念館、そして愛称カップヌードルミュージアムと呼ばれていますけれども、大阪の池田市と横浜にこのような記念館を作りました。ここでは小麦粉からチキンラーメンの手作りを、小学生に体験してもらうということで進めています。現在、この 2 つの記念館を合わせ、年間 160 万人の子どもたち、ファミリーの方にお越しいただいています。

今申し上げました財団の活動の中で、これからロングトレイルをバックアップさせていただきたいと考えています。まず明日、協議会から NPO 法人に移行するということで、この委員の方々で設立していただく訳ですけど、このロングトレイルも 15 団体の方々に協力をいただき、現在、距離にして約 1,500km になるということだそうです。これから日本のトレイルの数も増えてくるでしょうし、2020 年には 3,000km くらいまでにしたいというお考えも聞いています。英国では 22 万 5,000km の距離があるそうですけれども、そういう点では、まだまだ日本では始まったばかりということだと認識しています。

これから高齢者、若い山ガール、山ボーイも含めて、ロングトレイルをどのように楽しんでいただけるか、また、どういうことをしなければならないかということを、財団としても考えております。まずは“日本のへそ”と言われているこの長野県小諸の安藤百福センターで情報の受発信をさせていただきます。そして、どういった研修が必要だろうかということも含めて、サポートを進めていきたいと思っています。包括的な問題も外国人のトレイル利用も含め、今後考えなければならないということでしょうし、そのような中で、道標ももっと補修や整備して作っていかなければいけないでしょう。またトイレの問題もあるでしょうし、あるいは山小屋なども必要になってくると思うんです。これらはすべてケースによって違うと思うのですが、そういう中で 1 つの美しいコースとして、また歴史的・文化的なものも同時に味わっていただき、「これが日本だ」ということを感じていただければ良いと思っています。

まだまだこれからですが、行政の方々にもご理解いただかなければいけないこともたくさんあると思うんです。安全性の高い、楽しめるコースに仕上がれば最高だな、と思っている訳です。

今回のシンポジウムは共催ということで、財団としてサポートさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

阿部　守一（長野県知事）

皆さん、こんにちは。長野県知事の阿部守一でございます。今日は長野県小諸市、安藤百福センターにお越しいただきまして、ありがとうございます。皆さま方のご来県、ご来場を心から歓迎申し上げたいと思います。

昨年の9月、まさに秋の絶好の行楽日和のちょうどお昼時に、御嶽山で残念な噴火災害が起きてしまいました。57名の方がお亡くなりになり、依然6名の方が行方不明という現状であります。お亡くなりになられた方のご冥福を改めて心からお祈りするとともに、本格的な警戒レベル、残雪等の状況をしっかり見極めた上で、今後の捜索活動を継続していきたいと思っております。

今回の噴火災害に、われわれ長野県としても多くの教訓を得ました。まず登山安全条例、これをぜひ本年度中には長野県として設定していきたいと思っております。県によっては入山届を出せというエリアを決めている条例を作っていますけれども、私どもはそうしたことよりは、むしろ山全体、登山者全体に対して、山に入る時はどういうことを考えてもらいたいか、あるいは私ども行政をはじめとする関係者がどんなことに取り組まなければいけないか、などを考えていきたいと思っています。そうしたことをしっかり定める、日本では今まで作られたことがない総合的な山岳安全条例をぜひ作っていきたいと思っています。これは規制をかけるということよりは、むしろわれわれ行政がしっかりと責任を持って山に取り組むという方法で検討を進めているところであります。来年度予算についても、災害対策の関連予算を様々に盛り込ませてあります。特に火山災害に対しては、火口周辺にシェルターを設置したり、補助の設備を充実させていきたいと思っています。いずれにしても、火山に限らず登山というものは、ある意味では危険と背中合わせの部分がございます。当然自己責任、ご自分の主体的な判断で取り組んでいただくこともありますけれども、われわれ行政が責任を持って取り組むことをさらに改めて再度点検し直し、しっかりと責任のある対応をして、そして、大勢の山を愛する皆さん、長野県の自然を愛する皆さんをお迎えしたいと思っています。

そうした一環に、このロングトレイルがあります。長野県は、この協議会に参加しているロングトレイルの数が半分を占めているわけであります。やはり長野県の持つ価値というのは、この雄大な自然景観、自然環境だと思っています。この自然をさらに生かして大勢の皆さま方に楽しんでもらう、将来世代に日本の持つ、そして長野県の持つ、素晴らしい環境をしっかりと守っていきたいと思っています。

長野県は、自然環境保全、そして山岳高原観光、さらにはロングトレイルをはじめとするアウトドア、こうしたものの先進県でありたいと思っています。

ぜひ、今日のこのシンポジウムを契機に、ロングトレイルを巡る様々な取り組みがさら

に一層進んでいくことを心から期待をしておりますし、私ども長野県は、今日ご来場の皆さま方と一緒になって、私も先頭に立って、取り組みを進めていきたいと思っています。

最後にひと言、長野県の宣伝と日清食品の宣伝を兼ねて、この信州味噌ラーメン、ご関心がある方にはぜひ食べていただきたい。これは日清食品の皆さんに作っていただいたわけですが、長野県といえば味噌でありまして、長野県の味噌を使った味噌ラーメンになります。このおいしい信州味噌ラーメンを味わっていただきながら、信州の自然を満喫していただければと思っております。

このシンポジウムを契機に、ロングトレイル協議会がNPO法人化されるということですが、ぜひこの安藤百福センターを拠点に、日本全体、そして世界を巻き込んで、ロングトレイルの動きが活発になることを心から期待申し上げまして、私の歓迎のご挨拶とさせていただきたいと思います。本日はおめでとうございます。

節田　重節（日本ロングトレイル協議会　会長）

皆さん、こんにちは。こんな素晴らしい天気の日に室内に長時間閉じ込めることになりまして申し訳ございません。この一番寒い時期に信州小諸にお集まりいただきまして、厚く御礼申し上げます。とりわけ日清食品ホールディングスの安藤宏基CEOには大変お忙しい中おいでいただきまして、誠にありがとうございます。また、長野県の阿部守一知事にもお越しいただきました。ありがとうございます。本シンポジウムは安藤財団およびこの施設であります、安藤百福センターのバックアップを得ております。合わせて御礼申し上げます。そして、本日基調講演をしていただきます、日本の火山学の第一人者である荒牧先生、お忙しい中、本当にありがとうございます。

あの御嶽山の噴火事故から間もなく半年になります。実は私の友人である山のカメラマンも2人、あのすぐ近くにおりました。幸い九死に一生を得て生還しておりますが、他人ごとではありませんので、じっくり聞かせていただきたいと思っております。

さて、私どもロングトレイル協議会には、既存の10の団体の正会員がございます。それに加えて、昨年の秋から今年にかけて5つの準会員が加わっております。合計15の団体になっておりますが、新しく加わりましたのは長野県松本市の美ヶ原トレイルです。さらに後ほどご報告いただきます、岐阜県の白山白川郷トレイル。現在ほぼ構想がまとまっておりまして、間もなく整備が始まります広島湾岸トレイル。千葉県の南房総のトレイル。そしてもう1つが山梨県の南アルプス市を中心とした南アルプスフロントトレイル。この5つが加わり、15の団体になっております。これだけの数が集まりましたので、新たにNPO法人として申請する方向で進めて参りたいと考えておりまして、明日午前中に設立総会を開く予定です。

ところで、インバウンド（inbound：一般に訪日外国人旅行を指す）のお客さんが1,300万人を超えました。東京オリンピックの2020年には2,000万人を達成したいという構想だそうですが、おそらく2020年以前、前倒しで2,000万人という大台に到達できるのではないかと考えております。

たくさんお見えになるツーリストの皆さんの中では、特にヨーロッパ系の方が多いと思いますが、彼らは必ずその土地の自然や歴史や文化を歩いてじっくり味わいたいと、そのような旅を好む傾向にあるかと思います。分かりやすく申し上げますと、日本人的な名所旧跡を巡るだけの点だけの旅から、それらを線で結び、さらに面として認識して、その国をしっかり味わって行こうという旅のスタイルではないかと思います。オリンピックの前後、当然これらの方々が日本の山やトレイルをたくさん歩かれることになるのではないかと思っております。

長野県の中山道、木曽十一宿という 11 の古い宿場町が残っているのですが、中でも長野県の妻籠宿と岐阜県の馬籠宿が人気です。2013 年のデータですが、この 2 つの宿場町を歩いた方が 35,000 人、そのうちの 4 人に 1 人、約 10,000 人近い人たちは外国人の方々だったということです。この傾向というのはおそらく大きく高まっていくのではないかと考えております。

一方で、アウトバウンド（outbound：自分の国から外国へ旅行をする）を見ますと、日本から海外へ行って単なる海外の有名な都市を歩くのではなく、ネパールのヒマラヤ・トレッキング、あるいはニュージーランドのミルフォード・トラックなどが人気です。世界一美しい散歩道と言われておりますミルフォード・トラックやルートバーン・トラック。ヨーロッパ・アルプスですと、モンブラン山群を一周するツール・ド・モンブランなどは 1 週間から 10 日くらいの日程で皆さん楽しんでいらっしゃいます。また、スペインのピレネー山脈を越えてサンティアゴ・デ・コンポステーラまで行くルート、これは 1 ヶ月近い巡礼の旅です。あるいは、アメリカの有名なジョン・ミューア・トレイル、南米へ行きますと、ゴールがマチュピチュの遺跡となるインカ・トレイルというものもあります。これらは非常に有名なロングトレイルです。これらに向かって日本の方々もたくさんお出かけになっており、専門のツアー会社にとっては人気商品になっています。

お隣の韓国、済州島には「オルレ」というトレイルがあるそうです。26 のコースがありまして、総延長 350km、国内外から年間約 120 万人のお客さんが訪れているということです。このオルレという考え方は、韓国からお客さんがたくさん来る九州にも伝わっておりまして、現在、13 の九州オルレが展開されていると聞いております。

このように近年、内外ともにロングトレイルで盛り上がっておりますが、私ども日本ロングトレイル協議会といたしましても、いずれにしても、このようなグローバルな考え方、意識を持って今後取り組んで行かなければならないと考えておりまして、今回のようなシンポジウムを企画させていただきました。本日はどうもありがとうございました。

特別講演

御嶽山の噴火から学ぶもの

荒牧　重雄（東京大学名誉教授）

皆さま、こんにちは。荒牧でございます。特別講演なんて、面はゆくて非常に申し訳ない。私はいわゆる学者バカでありまして、世の中を知らないうちにじいさんになってしまいました。差し障りがあるようなことを言うんじゃないかと気にはしているんですけど、もう 84 歳になったので、しょうがないと思ってごめんいただきたい。

御嶽山の噴火に対しての私の反応を申し上げますと、「しまった！」と、そのひと言ですね。日本の火山学というのは結構進んでいて、これは学問の上では一応進んでいると自分で思い込んでいます。それ以外にも、社会的にいわゆる安全管理というものも結構良いんじゃないかと思っていたんだけど、余り良くないということがわかった。これが「しまった」ということです。

では、どうして改善したらいいかというと、実は危機管理の問題はいろいろあって、誤解を恐れずに言いますと、日本は世界の先進国の一つで、素晴らしい国です。特にインフラが良く整備されているので、小さい災害は起こらない。しかし、一番私が気にしているのは大規模災害です。大規模というのは、例えば 3.11（2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災）というのは「想定外」と言われている。想定外の大きな噴火が御嶽山の場合です。実はこの山は 1979 年、史上初めて噴火しています。その時、日曜日の朝で、私は寝ていたら電話でたたき起こされて、御嶽山が噴いたという。私は、それは間違いでしょうと答えた。私は御嶽山の噴火の記録がないということを知っているからです。そしたら、なんでもいいからヘリコプターに乗れと言われて、乗ってみたら、噴いている。そのくらい活火山としては見過ごされていた。それでその後静かになって、今回というわけですから、活火山の中ではそんなに有名ではなかった。

ご覧のように、今回とこの前の噴火というのは非常に似ている。同じ場所で、しかも噴火の形式が同じなんです。水蒸気噴火と言われている。これが「しまった」の中の一つですが、なぜ同じことを繰り返すのにちゃんと準備をしていなかったか。

ある人が、「どうも噴火らしい」という調子で、デジタルカメラで写真を撮った。これは非常にまずかったんですね。要するにその時に脱出、脱兎のごとく走って山小屋に逃げ込むべきだった。ご覧なさい、山小屋の上に穴がいっぱい空いています。しかし、その山小

屋の中に逃げ込んだ人たちで石に直撃されて亡くなった人というのは、私が聞いている限り 1 人です。言いたいことは、外で被害を受けた皆さんが、たくさん逃げ遅れたということです。逃げるべきということが、あらかじめ分からなかったという問題です。

噴火の時に飛び出した火山灰と石のかけらの重さの総量は、41 万 t から 103 万 t。100 万 t というとびっくりするかもしれませんが、火山学的な噴火で言うと、これは小の大くらいです。でも、1km 以内にいる人は、逆に言うと石のかけらにあたる可能性があったということ。1km というのは相当近いんです。

一方、シェルターの話ですが、何十億円というお金がシェルターにかかると新聞に出ているので、私はカチンと来て、シェルターだけじゃないだろう、と言いたくなる。私の結論はハードにぽんぽんお金を出すのはやめて、ソフトに力を入れるべきだということです。対策をどうするか、そっちの方を真面目にやるべきではなかろうかと言いたい。シェルターは必要です。しかし、山小屋や避難小屋でいい。あの山小屋に逃げ込んだ人は、ほとんど助かっています。その山小屋をちょっと補強すればいい。

昔ね、浅間山にシェルターを造ったんです。ヘリコプターを使って何千万円だかを掛けてシェルターを造ったんですが、次の噴火でそこに直撃弾が当たって、ぺしゃんこにつぶれたの。立派で、ものすごく硬い鋼鉄の屋根を作ったけど、むき出しで置いておいた。昔の防空壕というのは、穴を掘って上に木を渡して、上に必ず土をたっぷり乗せていた。ところが、浅間のシェルターは鉄板がむき出しでした。石や土を積んでおりますとね、物理学的にインパクトがものすごく吸収される。

ところで噴火の話ですが、世の中には爆発的でない噴火もある。ハワイなんかへ行くと爆発的ではないものもある。今回はもちろん日本の例だから爆発的だった。ところで爆発的噴火は 2 種類あって、マグマ噴火と水蒸気噴火がある。両方一緒に起こることがあるので、マグマ水蒸気噴火という場合があります。マグマが下から上がってきますと、地下水というのがあって、マグマの熱が伝わると加熱される。そうしますとまずいことが起こる。地上では 100℃で沸騰しますけど、地下は石の重さで圧力が掛かっているから 100℃でも沸騰しないんです。どのくらいまでかというと、200℃、下手をすると 300℃くらいまででやっと沸騰するんです。ということは、何かの理由で地下の圧力が取り除かれると、すごい圧力が掛かる。5,000 気圧くらい、と言っても分からないでしょうけども、ものすごい圧力です。それが爆発する。もう一つは、マグマ自ら爆発する。普通はこれをマグマ噴火と呼びます。

ところが、専門家を含めて水蒸気噴火は小さいと思っている。今回も 100 万 t。100 万 t と聞いたら、皆さんはびっくりすると思いますけど、天明 3 年の浅間山は 8 億 t。富士山の宝永噴火は 12 億 t。それに比べて 100 万 t は小さいですよね。

私が言いたいのは、火山災害はそんなに大きくないということです。横綱は気象災害。そして地震災害。伊勢湾台風（1959 年）というのがあったんです。これが大きかった。6,000 人近く亡くなった。それに次いで阪神・淡路大震災（1995 年）と東日本大震災。地

震災害は大変だけど頻度が違う。1,000 年に 1 回、数百年に 1 回だけど、気象災害というのは毎年起こる。実は火山災害で何人亡くなったかというと、戦後 200 人もいない。これに対し、火山のおかげで観光産業がどのくらいもうけたかというと、20 兆円くらい。これは今、倍増している。もっと増えている。波及効果を含めると 50 兆、100 兆円となる。災害としての火山災害というのは、一応被害総額が 1 兆円と言われているけどとんでもない、はるかに低いのです。というわけで、火山は恩恵の方がはるかに大きいと言いたい。

ところで、浅間の現状はどうだというと、半径 4km 以内がレベル 3 という警戒の流れで、4km までは入ってはいけません、住んではいけませんということなんです。しかし、三宅島というのは半径が 4km ですから、4km よりも入ってはいけないと言うと、島から出て行けということになってしまう。有珠山には洞爺湖温泉というすごく立派な温泉郷がある。半径 4km となると、洞爺湖温泉自体が全部出て行けということになるんですね。

浅間山の入口に何かが書いてあって、登山する皆様へと、いろいろ書いてあるわけです。その一部に「登山は自己責任」と書いてある。自然現象というのは自己責任である程度対応しないといけないんです。

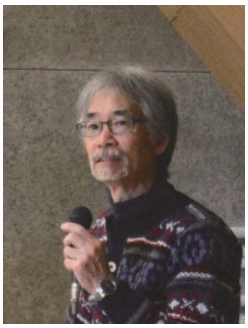
それでちょっと脱線。ドイツにロマンチック街道というのがあって、僕も行ったんだけど素晴らしい。ネルトリンゲンという場所があるんですが、中世のお城があって、立派な教会がある。ところが、その教会を造った石を見ると、特別な岩石なの。どう特別かというと、2,000 年前に大隕石が落っこちて、そうすると大爆発が起こって火山の何倍というからすごい。その熱でくっついてできた石というのが、大谷石みたいなものなんです。その石で中世の素晴らしい教会を造っている。

そういう意味で、ロングトレイルに火山もぜひ入れていただきたい。そうすると、面白くなっていいんじゃないですか、と言いたいわけです。日本の自然インタープリテーションというのは、ややもすると感性的に過ぎるようです。自然に浸っていい気持ちになって、素晴らしいはいいんですけども、私が言いたいのは、自然を学ぶ喜びというのをもう少し強調してもいいんじゃないか。素晴らしい森林浴とか、いいんですよ、感性が鋭くて。そういう意味でもいいんだけど、もう少し学ぶ喜びというのが入っていてほしい。その中の一部として火山というものを、私は売り込みたいわけです。しかし、こういうのは残念ながら日本は徹底的に遅れていますから、なんとかやらなくてはいけないと思います。浅間山は素晴らしい。ぜひロングトレイルの一部に入れていただきたい。本当はこの噴火口のへりに行ってのぞき込んでもらいたいんだけど、危ない、駄目と言ってる。それをなんとかならないかと私は思っているんですね。皆さん、どう思いますか？　だって、地球の中をのぞける。地球の息吹というか、エネルギーを体感できるんですよ。特に子どもたちをここに引っ張ってきて見せたい。今は偉そうな専門家の審議会では駄目だと言うから困っています。僕はもう少しそれを運動しようと思っていた矢先に御嶽山が噴いちゃったので、本当に困っています。

どうもバラバラで変な話をしましたけど、ご清聴ありがとうございました。

講演

村田：続きまして「フットパスに見る英国のロングトレイル」と題しまして、節田紫乃さんにご講演をお願いします。ここで日本ロングトレイル協議会・中村達代表委員より解説をしていただきます。



中村：日本ロングトレイル協議会の代表委員の中村でございます。私たちが接している情報というのは、アパラチアン・トレイル、ジョン・ミューア・トレイル、パシフィック・クレスト・トレイルなどアメリカの、とてつもなく長大なロングトレイルの情報が多かったように思います。

一方、ヨーロッパにはアルプスの山麓に数多くのロングトレイルがあります。また、ピレネーを越えるサンティアゴ・デ・コンポステーラという世界的にも有名な、1,000 年の歴史をもつロングトレイルがある。

そして英国には 300 年の歴史があり、国民の歩く権利として認められた全長 22 万 5,000km に及ぶフットパス（footpath：歩くための小道）があります。

よくよく考えてみると、日本の近代登山というのはヨーロッパ、中でもイギリスから伝わりました。ロングトレイルを歩くというのは、日本の地勢から必然的に山歩き、山登りの要素が多くなります。そのような背景から、英国の方とフットパスは国内のロングトレイルを考察するのには、大変参考になるのではと思います。

そこで、今回、英国のフットパスのお話を聞きたいと考え、エセックス州に在住の節田紫乃さんをお呼びしました。実は節田紫乃さんは日本ロングトレイル協議会会長のお嬢さんで、英国人のバイオリンのマイスターと結婚されています。彼女はイギリスに 10 年在住し、フットパスを日常的に歩いておられ、英国の歩く文化にも大変造詣の深い方です。今や日本ではイギリスのフットパスの権威になりつつあるんじゃないかと思います。節田紫乃さんです。よろしくお願いします。

1　フットパスに見る英国のロングトレイル

節田　紫乃（英国ファルマス大学大学院広告学科卒、フットパス研究家）

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました節田紫乃と申します。10年前にイギリス人男性と結婚しましてイギリスに渡り、今はエセックス州にある小さな村に住んでいます。普段は地元の人々のためにガーデニングの仕事をしながら、のんびり田舎暮らしをしています。歩く旅や自然の中で遊ぶことは好きなんですが、アウトドアやツーリズムに関しては全く知識はなく、素人です。ですので、今回はイギリス在住の日本人主婦として、イギリスのウォーキング文化はどういうものなのか、そして彼らはどのような環境づくりをしているのか、私が見聞きしたこと、学んだこと、そして感じたことをお話ししたいと思います。

日本語もしばらく話していないので、そしてまた、このような形で講義をするのも生まれて初めてですので、大変お聞き苦しい点が多々あると思いますが、その辺は大目に見ていただければありがたいです。よろしくお願いします。

今回、お話しすることは3つありまして、1つ目はイギリス独特の歩く文化。イギリスは他の国にはない、独特の歩く文化を発展させてきました。フットパスというユニークなシステムがイギリスにはあります。

2つ目はフットパスとライフスタイル。イギリスではフットパスを歩くことがライフスタイルの一部となっています。その延長線上にある彼らの歩く旅、英国のロングトレイルでの様子もお伝えします。

3つ目は、イギリスの歩く文化の継承です。彼らは独自の歩く文化をどう守り、どう継承しようとしているのか、現場で活躍する人々のお話をご報告したいと思います。

でははじめに、イギリスという国、そして、イギリスのウォーキングについて簡単に説明させていただきます。イギリスの正式名称はグレートブリテンおよび北アイルランド連合王国。この連合王国というのがポイントで、いくつかの王国が合わさってイギリスという国ができているということになります。まず首都ロンドンがあるイングランド、そしてウェールズ、北アイルランド、さらに去年の夏に独立を問う住民投票を行ったスコットランドです。この4つの地域は、それぞれ自治権がある関係で、分けて話をすることがあります。逆に国全体を表す場合はUK、イギリス、もしくは英国という言葉を使っていきたいと思います。

総人口約6,410万人。日本の半分くらいです。総面積が243,610㎢。日本の3分の2ということになります。気候は北国にしては温暖で、かなり過ごしやすい国だと私は思っています。可住地はなんと国土の90%。日本の倍近くあります。そして、逆に森林率はたっ

たの 11%です。日本は国土の面積の 7 割近くが森林で、世界森林率ランキングでも 15 位。しかし、イギリスは 136 位と、かなりの差があります。

次に、イギリスのウォーキングに関するデータを少しお見せしたいと思います。こちらはランブラーズ協会、ウォーキングする人々で作られたチャリティー団体で、団体については後ほど詳しく説明しますが、そのランブラーズ協会が毎週、30 分以上、3km 以上歩いている人がどれくらいいるのかを調べました。その結果、イングランドが人口の 22%、1,118 万人で、スコットランドが人口の 33%、155 万人、ウェールズも大体人口の 3 割で 94 万人、合計 1,367 万人が頻繁に歩いているという結果になりました。そして、経済効果ですが、ランブラーズ協会のデータによりますと、イングランドは年間 61 億 4,000 万ポンド、日本円で約 8,000 億円。スコットランドが年間 28 億ポンド、日本円換算で大体 3,600 億円。ウェールズは年間 5 億 5,000 万ポンド、日本円で 715 億円、総額 1 兆 2,315 億円になります。イギリスの地方経済にとって多大なる貢献をしていることがおわかりいただけるかと思います。

では、なぜそんなに歩くことが盛んなのか。ここで 1 つ目のポイント、フットパスです。通行権のある歩道を指していまして、イギリス国内どこに行っても必ずあります。この通行権という言葉、英語では“Public Right of Way”と言いますが、余り日本にはなじみのない言葉だと思います。簡単に説明しますと、そもそもこのフットパスというのは、庶民がまだ歩くことでしか移動できなかった時代に使われていた通路でした。日本でも同じような道があったと思います。それが近年になり、車、鉄道などへ交通手段がシフトしていき、レクリエーション目的、例えば散歩などで使われるようになっていきました。

ただ、レクリエーションで使えるようになるまでには、かなり長い年月がかかってしまいました。100 年、200 年の話です。ウォーキングを楽しみたい人々と土地所有者の間でもめにもめ、そして話し合いを重ね、ついに 1949 年にこの通行権という「歩く権利」が法律上保障されるようになりました。イングランドとウェールズにある全フットパスを合わせると約 22 万 5,000km。スコットランドはまだ登録作業中です。今のところ約 1 万 6,600km まで登録が完了しています。合計すると地球を軽く 6 周できるくらいの距離になります。結構な距離ではないでしょうか。

そして、このフットパスをつなぎ合わせて 1 本の線、もしくはぐるっと円を描くように 1 周するような長距離ルートをレクリエーショナル・トレイルと言います。これがまさに英国のロングトレイルになります。全国に約 1,400 本あります。ミレニアムを記念したルートや著名な人の功績を称えるためのルートが作られています。例えば、劇作家シェイクスピアの生まれ故郷ストラトフォード・アポン・エイヴォンという村があるんですけど、そこからシェイクスピア劇専門の劇場・グローブ座があるロンドンまでの道のりを楽しめる 235km のコースがあります。これがシェイクスピアズ・ウェイ。もう 1 つ例を挙げますと、ジョン・ミューア・ウェイ 215km。アメリカの大自然を守り続けた、まさにあのジョン・ミューアです。実はジョン・ミューアはもともとスコットランド人で、生まれてか

ら 11 歳までダンバーという港町で過ごしています。去年、2014 年、没後 100 周年記念として、スコットランドの方々がダンバーを拠点にロングトレイルを作りました。

さらにこのレクリエーショナル・トレイルの中でも最上級クラス、イギリスを代表するようなロングトレイルを、イングランドとウェールズではナショナル・トレイル、そして、スコットランドではスコットランド・グレート・トレイルと言います。どちらも政府公認で、国立公園と同じように政府機関が直接管理に関与しています。ナショナル・トレイルは全部で 15 本あり、毎年約 1,200 万人が訪れるそうです。どんぐりマークが目印です。スコットランド・グレート・トレイルは全部で 26 本。シンボルマークはスコットランドの国花、アザミの花になります。スコットランドは観光に力を入れていて、これ以外にもスコットランドを縦断するコースで皆さんが日頃お世話になっているゴアテックス（Gore-Tex : アメリカの WL ゴア&アソシエイツ社が製造販売する防水透湿性素材の商標名）が命名権を取得したゴアテックス・スコティッシュ・ナショナル・トレイル、864km など新しいロングトレイルが登場しております。

次に、なぜ英国人はフットパスを残し続けようとしているのか、なぜ歩くことにこだわるのか、その点をもう少し、彼らの歩く文化を探ってみたいと思います。私が感じたイギリスの人々にとっての歩く目的は、大体 4 つの傾向に分けられるように思います。第一にスポーツと文化、ここで言うスポーツはアウトドア・スポーツです。そして、同じ歩きでももっと文化的要素を持つもの、自分の内面と向き合う瞑想や哲学的な歩き、または散歩の文化です。次に郷土愛。歴史的建造物や昔ながらの美しい田園風景などを見て回り、自分たちのふるさと、地域、国を感じるために歩く。3 つ目に自然観察。四季折々の自然を感じ、そこに生息する動植物を観察するウォーキング。例えば、バード・ウォッチングなど大人気です。そして 4 つ目は健康維持、ダイエットのための歩き。大きく 4 つの流れなのではないかと、いろんな人たちと歩いてきて感じました。

これらの 4 つの目的は、あることがきっかけで誕生しました。それが 19 世紀頃に起こった産業革命です。この産業革命により人々の生活は一変しました。工業都市に人口が集中し、都市部の労働環境と住宅事情が悪化、公害問題もあり、人々の健康が損なわれていきました。それと同時に、労働で賃金を得た人々は休みを利用して、健康改善や気分転換のために、自然のある行楽地へ出かけることが一大ブームとなりました。

そして、貴族の遊びであった山登り、ハンティングなどのアウトドア・スポーツが庶民に広がる。乗馬やサイクリングなどもこの流れの上にあります。庶民が、鉄道などの新しい交通手段の発展により、旅行するようになる。ツーリズムという言葉が定着し始めます。そして、産業革命という新しい風が吹く中、伝統的なものが失われ、資源確保のために自然を破壊していった。それを憂いて自然保護、景観保護を訴える人々が現れ始めます。

一方で、レクリエーションのためのウォーキングという考え方も登場します。第 2 次世界大戦終結直後の 1949 年に通行権が認められ、国立公園、国定公園、自然保護区、さらにナショナル・トレイルのようなロングトレイルが登場します。また、同じ時期に英国国

民保健サービスが発足し、健康のために歩くよう、啓蒙活動を重視していくようになります。それがウォーキング・ヘルス・キャンペーンで、健康のために歩くことが推進されます。

それらに付随して、多くのチャリティー団体が 19 世紀から登場します。古い建物などを保護して景観を守ろうという活動をしているナショナル・トラスト、RSPB（Royal Society for the Protection of Birds：王立鳥類保護協会）や、The Wildlife Trust（野生生物トラスト協会）などの自然保護活動を目的とした団体も次々に誕生します。また、仲間と一緒にレクリエーション目的のウォーキングをしようと集まってできたランブラーズ協会。この協会はフットパス、ロングトレイルの環境整備に大きな影響力を持っていて、通行権を国に認めさせた立て役者です。ちなみにランブリングとは、目的なくぶらぶら歩く、散策するという意味を持っています。そして、アウトドア・スポーツでは BMC（The British Mountaineering Council：イギリス山岳協議会）や LDWA（The Long Distance Walkers Association）など、もっともっとマッチョな歩き方を好む団体もあります。さらにチャレンジ精神を持って挑む、ロングトレイルなどで開催されるチャリティー・ウォーキング大会、チャリティー・チャレンジ。毎年夏をピークに全国各地で盛り上がっています。そしてこれらを支えようとしているのが行政、地域、ボランティアの三本柱です。特にボランティアによるサポートはとても大きく、彼らの手助けなしでは、ここにあるシステムを保つのは不可能です。

次に 2 つ目のポイント、フットパスとライフスタイルということをお話しします。イギリスでは、フットパスを歩くことが、ライフスタイルの一部となっています。

エセックス州は、ロンドンから見て東隣にあります。ロンドンに通勤している人たちが多く住んでいる、いわゆるベッドタウンです。そこの住人たちが利用しているフットパスを地図上でお見せしますと、このとおりです。まるで毛細血管のようにあちらこちらに存在しています。まずウォーキングをする前にルート情報をどう得るのか、主に 4 つの方法を簡単に説明します。

まずはガイドブックからの情報です。本屋や図書館に行くと、もちろんウォーキング・ガイド本がたくさんあります。中にはカードになっていて、クリアファイルの中に入れて持ち運びが便利なタイプもあります。次に観光案内所、もしくは環境保護団体のビジター・センターも利用できます。スタッフに直接ルートの相談ができるので便利です。また、ここ数年はスマートフォンのアプリも頑張っています。ナビゲーター機能や、地図だけを専門に提供するものもありますが、ロングトレイルを管理運営している側が出しているアプリも好評です。ナビゲーションだけでなく、美術館にあるような音声ガイド、テキスト・ガイドの機能があり、行った先々で歴史や自然などの説明をしてくれるのでとても便利です。

さて、ルートが決まったら今度は地図です。ほとんどの人は OS（Ordnance Survey：英国陸地測量部）マップという英国陸地測量部が出している地図を使います。このエクス

プローラー・シリーズはウォーキングやサイクリングなどのレジャー用に作られたもので、全国をカバーしており、全部で 403 枚あります。地図上にはフットパス、レクリエーショナル・トレイル、ナショナル・トレイル、およびスコットランド・グレート・トレイルがきちんと表記されています。

最後に野外や自然を楽しむための全国共通ルールをご紹介します。イングランドとウェールズではカントリーサイド・コード、スコットランドではスコティッシュ・アウトドア・アクセス・コードと言います。残すものは足跡、持ち帰るものは写真（思い出）のみという考えの下、フットパスやロングトレイルを利用する上での基本的なルールが書かれています。フットパスを利用する者、そして、フットパスを管理する者。両方が最低限のマナーとルールを守ることで初めてレクリエーションのためのフットパスを存続できるのだと思います。

では、歩いている方々の様子を見ていきましょう。フットパスはいろんな場所に存在します。まず、この写真では草原の真ん中を堂々と歩いています。ポイントごとに標識が必ず出てきます。農場にもフットパスが通っています。ここはリンゴ園で羊が放し飼いになっています。家畜と十分な距離を保ち、彼らを刺激しないようにする。管理側の都合を尊重し、最低限のルールを守れば、私有地を歩くことも可能になるわけです。アウトドア活動は自己責任が原則です。歩く側は通行権という権利だけを主張するのではなく、それに対する責任も負わなければなりません。

次にこちら左の写真ですが、イギリスには産業革命時代に造られた運河が多く残っています。その運河脇にある小道や水門の上もフットパスが通っています。また、干潟のど真ん中にフットパスがあります。次にこれはある民家でのショット。この家の敷地内にもフットパスが通っています。「プライベート・トラック・アンド・ガーデン・バイ・フット・オンリー」とありますが、個人が所有している通路と庭です。「ここのみ通過可能」と、書かれた小さな注意書きがあります。最初、慣れない私は日本人である故、人の家の敷地内を通ることに非常に抵抗を感じていました。日本にはない価値観なので、通過するのに今でも緊張します。ゴルフ場内にもフットパスがあります。ウォーキングをしている人はフェアウェイを堂々と横切っています。日本ではあり得ない光景ですよね。もちろん、ここでも自己責任が問われます。ゴルフボールには気を付けないといけませんし、ゴルファーたちのプレーの邪魔は禁物です。

フットパスというのは、何も田舎だけにあるわけではありません。街中にもちゃんとあります。こちらが電車の線路に人だけが通れる踏切。すべてそうですが、まずフットパスがそこにあった。そして、その後から家や農場、電車の線路や橋、ゴルフ場ができた。通行権がある以上、フットパス込みでその土地を管理する。何かを建てる際には、この通行権を一番に尊重すべきということです。

歴史的建造物付近にもフットパスはあります。この箱はなんでしょう？　実はこれは第 2 次世界大戦中に使われた掩体壕（えんたいごう）というシェルターの一つで、ここから

海を渡って攻めてくるドイツ軍を機関銃で撃って防御したそうです。

フットパスの標識ですが、全国どこでも黄色い矢印で表記することになっています。もう一つ青色の矢印があるんですが、こちらは“Bridleway”と言いまして、この道は歩行者以外にサイクリング、乗馬で通過することが許されている道です。フットパスの標識と一緒にレクリエーショナル・トレイルの標識も設置されているところがあります。ピンクと赤いマークがそれになります。

次に、私が参加したエセックス州内でのグループ・ウォーキングについてご紹介します。まず、ランブラーズ協会をのぞいてみます。所属しているグループは全国に 500 グループあり、毎年 30 万人以上の人々が一緒に歩いているそうです。エセックス州内には 20 グループあり、それぞれ特徴がありました。例えば、長距離に特化しているグループ。逆に高齢者向けに短距離を歩くグループもあります。また、20 代から 40 代までの若い世代のみ参加できるグループもあります。歩き終わった後、どのグループも必ずパブに行くのがお決まりでした。歩くことで体力も付き、友達もつくれる。心身ともに健康になるということのようです。

次にナショナル・トラストが主催しているガイド・ウォーク。これはイギリスの風景画家・コンスタブル（John Constable）の人生と彼の絵について学ぶコースです。この画家は日本ではあまりなじみがないのですが、イギリスではとても有名な人です。彼が生まれ育ったフラットフォードという村で、ガイド付きでウォーキングを 3 時間ほど楽しんで来ました。ボランティアのガイドさんが学芸員並みの知識がありまして、コンスタブルの描いた 19 世紀のフラットフォードと今を、彼の絵と見比べながら丁寧に説明してくれました。画家のことだけではなく、この美しい田園地帯の歴史を学びました。

それから、自然教育に力を入れている野生生物トラスト協会のエセックス支部。まず、トラストが所有している森を歩きながらバード・ウォッチングを行うガイド・ウォークです。この森を管理しているレンジャーに森を案内してもらいながら、みんなで生息している野鳥をモニタリングする。レンジャーはただ野鳥の説明をするだけではなく、彼らが野鳥や他の動植物を守るためにどのように森をメンテナンスしているのか、細かく説明してくれました。参加者の中には双眼鏡を持参するほど熱心な方がいて、最近見た鳥の情報交換もしていました。私もたくさん鳥の名前を教えてもらいました。

最後に、同じワイルドライフ・トラストが行っていた、子どものためのウォーキング・イベント、サンタ・トレイルをご紹介したいと思います。これはサンタさんに会いに行く道すがら、クイズに答えていき、全問正解するとサンタさんからプレゼントがもらえるというもので、大人気のイベントです。道の途中に野生動物からのプレゼントが置いてあります。タグを見て、どの動物からのプレゼントなのか、クイズの解答用紙に名前を書くと同時に実際の動物の写真ステッカーを貼っていく。子どもたちだけではなく、親たちも童心に返って楽しんでいるようでした。以上、グループ・ウォーキングでの体験談をお話ししました。ちなみに今回参加したグループ・ウォーキングは、すべてフットパスを利用し

ています。

さて、エセックス州から飛び出して、スコットランド・グレート・トレイルではどんな歩きをしているのか見ていきたいと思います。トレイル管理区からの情報には紙媒体と電子媒体があり、ともに充実しています。各トレイルにビジター・センターがあります。またウォーキング専門のツアー会社を通じて参加することもできます。

実際のトレイルの様子です。まず、ロンドンの中心街を流れているテムズ川を源流まで川に沿って歩いて行くテムズパス、296km です。高低差がほとんどないので、初心者向きです。実際に歩いてみると、いろんなタイプの人たちがこの道を利用していました。もちろんフットパス目的の方もいらっしゃるんですが、ただ散歩している人、iPod で音楽を聴きながらジョギングしている人、自転車でツーリングしている人など、人それぞれで、カジュアルに身近に楽しんでいる印象を受けました。

次にイングランド南西部の海岸線を歩くサウスウェスト・コーストパス。ここは大西洋の荒波で削り取られた岩壁が続くコース、1,014km です。英国の中でもさらに温暖な地域で、天気がいいと潮風が実に気持ちいいそうです。こちらは世界遺産に登録されているハドリアヌスの長城という、ローマ帝国時代の城壁の跡の脇を歩くハドリアヌス・ウォークパス、135km のコース。この城壁は、ちょうどイングランドとスコットランドの国境付近にあり、大西洋から北海へと横断するように造られています。

さて、飛びましてスコットランド・グレート・トレイルの一番人気、ウェスト・ハイランド・ウェイ。シェルパ斎藤さんも歩かれたコースです。スコットランドの最大都市・グラスゴーからブリテン島で一番高い山、ベン・ネビス山があるフォート・ウィリアムまでの 154.5km の旅です。まさに“ザ・スコットランド”という風景が続き、非常に面白く、最近日本でもブームになっている本場スコッチ・ウイスキーが楽しめることでしょう。

さて、次に 3 番目のポイント、イギリスを歩く文化の継承。ここからは少し角度を変えて、イギリス人たちが歩く文化をどう守り、どう継承していこうとしているのかを、ざっとお伝えしたいと思います。ここで歩く文化を広めるために、イギリスで行われている主なイベント、キャンペーンをリストアップしてみました。

すべてを説明するのは時間的に難しいので、ここからいくつか抜粋してお話ししたいと思います。まず、A のチャリティー・チャレンジ。これはロングトレイルなどを利用して行われるチャリティー・ウォーキング大会です。挑戦者がスポンサーを募り、集めたお金を支持するチャリティー団体へ寄付する。全国各地で夏を中心に開催されています。規模もピンキリです。例えば、テムズパス・チャレンジ。こちらはウォーキング、ランニング、またはサイクリングのいずれかを選択して決められた距離を完走するというもので、去年は 4,000 人が参加したそうです。私も、地元で開催されたこぢんまりしたウォーキング大会に参加してみました。白血病患者へのサポートを行っている団体が主催したものです。団体のスローガンが書かれた赤い T シャツを参加者全員が着て、30km ほど歩きました。私の場合、自分のスポンサー募集を家族や友人、知人に Facebook 上で呼びかけました。

そして、大会開催中、スマートフォンを使いながら Facebook を通して実況中継し、大会の雰囲気や歩いている様子を皆さんに紹介。ネット募金を利用することで、イギリス国内だけではなくフランス、日本、アメリカからの募金が集まり、わずかではありますが、日本円で合計 72,000 円ほど寄付することに成功しました。

次にウォーキング・フェスティバル。これはある一定の期間中にガイド・ウォーク、講演会、映画上映、ワーク・ショップ、地元物産展などが行われます。一年中、英国のどこかで開催されています。

そして、オリンピック・キャンペーン。これは 2012 年のロンドン・オリンピックに関連して、先ほど紹介したウォーキング・フェスティバルや、それぞれのオリンピック競技会場へ歩いて行くキャンペーンなど、大いに盛り上がりました。

次は健康向上ウォーキング。ウォーキングとヘルス・キャンペーンのことです。最近は Green Prescription、つまり「緑の処方箋」と題して、お医者さんが患者さんの容体に合わせた運動プログラムを処方箋として出しています。

そして、自然教育。最近はフォレスト・スクール、森の学校を積極的に実施しながら、指導者教育にも力を入れています。いろいろなイベントを通して子どもから大人まで自然を知ってもらおうと、教育機関や環境保護団体が日々頑張っています。

次にジオキャッシング。これはアメリカ発の、GPS を利用した地球規模で行われている宝探しゲームです。イギリスでもフットパス、ロングトレイル、国立公園などにお宝が隠されています。キャッシュと言われるタッパーの中にあるログフックというお宝を探します。国立公園、トレイルを管理している側も積極的にこのジオキャッシングを PR しています。日本でもジオキャッシングはあるようです。

最後に障害者のためのランブラーズ協会。みなさん電動車椅子で散策を楽しんでいるようです。この協会は歩く仲間を増やすだけではなく、車椅子でもトレイルを楽しめるよう道の整備を求め、各管理区と話し合いを続けているそうです。

さて、最後になりますが、フットパスを整備・管理する側にスポットを当ててみたいと思います。フットパスの利用者が道を歩いている際に何か問題があった時は、まず地方自治体に連絡します。地方自治体はフットパスを整備している土地所有者に問題を解決するように促したり、管理指導や補助金を出したりします。また、フットパス専用地図、Definitive Maps を管理・保管する役割も兼ねています。土地所有者は決められた期間内に道の整備、橋やゲートの修理を行う義務があります。

さらにナショナル・トレイル、スコットランド・グレート・トレイルに関しましては、地方自治体の上にトレイル管理局があります。ただ、この三者だけでは、とてもフットパスおよびトレイルを整備し管理していくことは難しいです。そこでボランティアの存在が重要になります。

地方自治体やトレイル管理局が補修ボランティアのチームを持っている場合もありますし、先ほどから登場している環境保護チャリティー団体に所属しているボランティアと協

力してメンテナンスをする場合もあります。こういったボランティアを活用することによって、国全体でフットパスやトレイルの整備、保全をしていくことが可能になります。

私も経験があるのですが、ボランティアは心情的にその場に愛着が湧いてくるものです。その環境を大切にしようと、自然に思うのではないでしょうか。また、活動を通していろいろなスキル、例えばチェンソーの使い方などを学べるのも参加者には利点です。

以上、駆け足でイギリスのウォーキングに関する現状をお伝えしました。イギリス人にとってのウォーキング、そしてその環境づくりは、日本のものともアメリカのものとも違うことがお分かりいただけたのではないでしょうか。

実は、通行権という考え方は他のヨーロッパの国にもあるのですが、通行権を使ってこれだけ多くのフットパスを整備している国は、イギリス以外にないと言っても過言ではないと思います。今回はイギリスを例に、一つの国での歩く文化を学びました。人が歩く、人間にとってこの素朴な行動を国ごとに見ていくと、それぞれカラーがあることが分かり、その国の本質が見えてくるように思います。日本の歩く文化は、イギリスに負けないくらいユニークなものがあり、大きな可能性を秘めていると海外に住む私は感じています。そして、日本を歩きたいと思っている海外の人々は、その文化を体験したいのではないでしょうか。

2020年の東京オリンピックというビッグチャンスに向けて、そして、その先にある日本の未来に向けて、皆さんのトレイル運営活動と日本の歩く旅のさらなる発展を願って、今回のお話を終わりたいと思います。長い時間、ご清聴ありがとうございました。

2 海外と日本のロングトレイルの歩き方

ルーカス B. B. （『PAPER SKY』編集長）

解説（中村達）：ちょうど2年前に大手企業の広報担当者の方から、ルーカスB.B.さんをご紹介いただきました。彼はアメリカ人なんですが、ニュージーランドのトレイルに非常に詳しい人だというんです。彼は日本で本を作っている。半分英語、半分日本語で書かれた旅の雑誌ですが、日本中はもとより世界中を旅して作られている。『PAPER SKY』という非常にきれいな本です。毎日新聞社から出版されています。ということで、本日はルーカスさんの目から見た日本のトレイルのお話をしていただきます。

ルーカスと申します。私の帽子の〝L″はロングトレイルの〝L″でもあるし、ルーカスの〝L″でもあります。

今日はニュージーランドの話をしますが、本当は自分が一番大好きなのは日本で歩くことなので、日本のことも話します。私は日本人の奥さんと結婚して、一緒にこの『PAPER SKY』を編集しているのですが、ある時、彼女が静岡の実家に歩いて帰ろうよ、と言ったんです。昔、旧東海道という道があって、東京から京都まで歩いたと友達が言ったので、僕らもできるんじゃないかと思って奥さんと歩いたんです。日本で歩くことは、日本人が大好きなピーク（Peak：山頂、頂上）を登るというイメージだったけど、旧道を歩いたら違うものを感じた。ロングトレイルの特徴は多分、どんな人でも歩いて体験できることで、とても楽しいなと感じられることだと思います。ピークを目指すのではなくて、自分と向き合って歩くことも、すごく平和的な歩き方だなという感じがあります。

まずニュージーランドですが、はじめは石川直樹さんという、冒険家で写真家でもある方と一緒に行きました。ニュージーランドはロングトレイルで歩くスタイルが一番確立しているんじゃないかと思った国でした。そこで、ロングトレイルの特集をやるのなら、ニュージーランドがいいんじゃないかと思いました。

1回目は2009年で、2回目は2012年、2013年かな。最初は歩きで、次はロングトレイルでした。2回目は自転車と歩きの両方をロングトレイルでやりました。自転車を1週間やって、ロングトレイルでの歩きは1～2日分くらい取り入れることしかできなかった。

ニュージーランドが一番素晴らしいのは、怖いものがほとんどないこと。まあ、さっき言った、自然の怖さはもちろんどこへ行ってもあるけど、怖い動物はいないし、毒を持っているヘビとかクモとか、いろいろ心配しないでのんびり歩ける。

これまでいろんな国で、白人が良くないことをいっぱいやってしまって、自然もいっぱい壊してしまったけど、その中でもニュージーランドは白人が来たのがすごく遅い国です。まだ200年くらいたったかどうかで、自然がまだ野生的な感じです。ニュージーランドは日本と似ていて温泉がいっぱいあるので、とても楽しい。

あと星です。目で見える星。普通はこんなに天の川って見えない。あとは食べ物、新鮮な食べ物。野菜、果物、食べ物はみんな新鮮。おいしいものがいっぱいある。そしてマウント・クック。世界で初めてエベレストに登ったエドモンド・ヒラリーさんの練習場だった。

有名なミルフォード・トラックはとても人気のトレイルで、人数を制限しているくらいで、入れないこともある。そして、アベル・タスマンというトレイルは、あまり知られていないけど、すてきなトレイルだと思う。海を渡るところがあって、満潮になると渡れない。泊まるところがとてもすてきで、これがDOC（Department of Conservation、ドック）という政府がやっているシステムです。食べ物の用意をしたり、ネットで予約をしたり、朝ご飯も出ます。そして、みんな好きな時間に起きて、好きな物をバケットに入れて持って行って、朝から歩き出す。

このアベル・タスマンのトレイルは海を楽しめるトレイルで、全部歩くと3〜4日くらいで歩ける。いろんな遊びをしながらトレイルを歩くと、自然と遊んでいると感じられるかもしれないなと思う。もう一つのトレイル、ルートバーン・トラックというトレイルは、全部歩くと4〜5日くらいかな。

白人たちが来る前にマオリの人たちが住んでいたので、マオリの人にガイドをお願いするといい。植物にものすごく詳しい。歩きながら、この植物はこういう病気が治るとか、元気が出るとか、知識を教えてもらえるので、トレイルの楽しみの一つになると思う。

日本では、旧東海道を全部合わせて16日かけて500km歩いた旅が良かったです。日本橋から出発したけど、こういう場所が300〜400年前からあるんだけど、今でも生きている。これは日本のすごい面白さだと思う。僕はいろんな場所を旅するけれど、なかなかそういう国がない。「にんべん」という店（株式会社 にんべん：日本橋室町に本社を置く主に削り節やふりかけ、調味料を製造する水産加工品メーカー）が昔々からこの場所でずっとかつお節を売っている。ちょっと歩くと北品川。意外と今でも旧道が残っているところがいい。品川野菜、品川にしかない野菜をここで売っていたり、野球選手のイチローさんが大好きなノリのお店が昔からあったり、不思議な北品川。ここには400年前からずっと下駄を売っている店もある。

弥次と喜多。ちょっとミカンを抱いて。本当にこういう旅を楽しむことが旧東海道だと、自分は知らなかったけど、歩いて分かったことだった。由比の方で、広重（安藤広重）さんが昔描いた絵です。これが今、現在。富士山も本当は同じ位置に見えるはずだけど、雲があったから見えなかった。日本の場合、食べ物も残っている。安倍川餅という店だけど、この店も昔からずっと街道沿いにあるお店ですね。また、少しオリジナルの道がきれいに

してあって、掛川の方かな。静岡はやはり長い。

次に名古屋。みんなすごくよく考えている時代だったと思う。こういう船、木があって道も分かるし、風除けにもなるし、木を伐ってきれいな道にすると燃料にもなるし。本当に無駄がないような道造り。だから、僕が歩く時にイメージしたのは、歩くことは昔のインターネットかなと思った。今はインターネットをみんなが見て情報を得るけど、多分、昔はこういう感じでいろんなところから来ている人、いろんな人が交わって、そこでの出会いがまたいろいろあって、情報をシェアしたりしたんじゃないかなと思う。しかも、これは結構女の人も歩ける道で、この時代、他の国にはないと思う。だから、この時も日本はすごく安全だった。ここのホテル、大橋屋（1649 年創業の東海道赤坂宿の宿）というところです。ここがまだ泊まれることを、多分、ほとんどの日本人は知らないと思う。これが外国だったら、絶対みんなここは知っていると思う。外国人が来れば、逆に日本人がその後をついてくるんじゃないかなと思う場所はいっぱいある。

それから、今も残っている文化は道案内、平仮名、片仮名。僕はいつも覚えられないけど、京都の方はどっちか、東京に行く方はどっちか。まだ暗い時間、宿から出るから方向が分からない。こういう看板があるとすごく助かる。方向が合っているなと思う。

この人は忍者、服部さんという方です。何世代か分からないけど、和菓子屋（三重県亀山市の旧東海道の関宿にある深川屋）を昔からずっとやっている。関というエリアで和菓子を売っている。忍者の話をいっぱいしてくれて、2 階に上がるといろんな面白い資料がいっぱい出ている。

次が熊野古道。仕事の都合で僕らが歩くのはいつも 12 月。高野山の方から那智の滝の方まで、多分、180km くらいかな。ここは山のアップダウンが楽しい。出発する前に、お勤めに行った。ここでは弘法大師さまがまだ生きているらしい。泊まる場所がとても大事で、さっき言ったニュージーランドもすごくきれいで清潔感があって、予約もしやすいし、食べ物もおいしい。ここも若い夫婦が高野山で始めた、高野ゲストハウス（高野山ゲストハウス Kokuu）というところ。パウダーの雪の中。本当にワンダーランドだった。もちろん、誰も歩いていない。僕ら以外、旅人はいない、この時期は特に。こういうゲストハウスみたいなところもあるし、自分たちの家を使って人を泊まらせる民泊というシステムがいい。いろんな市や県がそういうのを取り入れてやっているけど、僕らもできる限りはそれらを使って、やはり住んでいる人々が作っている食べ物をそのまま食べたりしたい。

場所によっては、本当に落ちそうな橋がまだ日本にはいっぱいある。村の名前は忘れたけど、多分、日本で一番大きい村（奈良県十津川村）。人口がすごく少ないけど、広い村で、山の上に家がまだあって。ちょっとフットパスっぽいよね、人の家の間を通ったり、田んぼを通ったり。

光もすごくきれいな日が多いですね。やっと海が見えるところに来て、これはこの角度だと見えないけど、どこかに那智の滝が出てきて、いい景色でみんな休憩して。もちろん、この道はご飯とかがないので、全部自分たちで持ってきて作ったりする。

これは銀の道です。銀山街道（尾道石見銀山街道）があって、尾道から島根の石見まで行く道。日本を横に横断する道で、かなりマニアックな道というか、広島側には看板が一つもない。島根に入ると世界遺産になったので、ちょっと変わるけど。銀の道はわりとまっすぐな道が多くて、造った人、とてもタイム・イズ・マネーみたいな感じですね。銀を日本海に出すとすごくリスクが多かったので、全部、尾道、瀬戸内海の方に早く持って来て、そこから出すようにしていた。

ほんとに瞑想みたいな感じでどんどん歩くと、気持ちが良くなる。こういう昔あった道や古木がそのまま残っている。見ると右と左に方向が書いてある。その道に入ると、柿があったりする。日本人はみんな優しいし、知らない人が、せっかくここを歩いているのだからどうぞと言う人がいっぱいいる。そこでまた会話が生まれるし、日本のことを知り、もっと楽しくなることが多いですね。

これは毎年歩いている仲間です。結構みんなはまって、ツアーみたいになって、みんな行動を一緒にして歩く。今は 4〜5 人くらいかな。この後ろにいる不思議な人、自転車をこいでいる彼、唯一この道に詳しい人で、僕らがこの道を歩くからと E メールを出すと、うれしくてしょうがないと、彼がずっと自転車でトレイルまで追い掛けてきてくれた。やはり日本はいい。みんなゆっくりしているし、こういう飾りで、家をきれいにしたりお餅を作ったりと、すごくいい。雪は場所によるんだけど、どんどん降ってくるし、寒い。しかもコンビニがない。休憩する場所がない。どうしよう、どうしようで、唯一の商店があって、「お母さんちょっと休憩させてくれない？」と、後ろに荷物を置いて、こんな感じでみんなラーメンを作ったり。

次は芋地蔵というトレイル。さっきの銀のトレイルと同じくらい人気がない。誰も知らない。知られたらきっと人気が出ると思うけど、この人、下見吉十郎さん（江戸時代に大三島などの瀬戸内海の島々へサツマイモを広めた六部僧）が昔、大三島というところに住んでいたが、貧しくて食べ物がないので、鹿児島まで行ってサツマイモを持って帰ろうと思った。でも、その時代は作物を持ち出しては駄目だった。下見さんは芋を盗んで逃げ回ってなんとか持ち帰って、この大三島のヒーローになった。

古墳も多い。古墳だらけの町で、2km くらいの間、数えられないくらい古墳があった。この町には団子屋が 5〜6 軒くらいあって、みんな売り切れ。団子が人気で、予約をしてちょっと食べられる。

年末の飾りやこういうものをお店で買うのではなく、ちゃんと作る人がいる。足が毎日みんな痛い。道でやられて、足が痛くて、膿が出た。鹿児島センターでお茶とキノコといろいろ出してくれた。

こんなふうに楽しい国にみんな住んでいる。ぜひ日本も、また外国もすごくいいところがいっぱいあるし、どちらも楽しいと思うので行ってほしい。ロングトレイルは、これからいっぱい日本でできると思います。ありがとうございます。

報告

1 「山の日」の制定とロングトレイル

磯野　剛太（公益社団法人日本山岳ガイド協会　理事長）

ご紹介いただきました磯野でございます。よろしくお願いいたします。

「山の日」というタイトルで、資料をお手元に配っておりますので、それをご覧になりながらがよろしいと思います。

ロングトレイルの前に「山の日」ということですが、今日、ご出席の皆さんは「山の日」って祝日になるという話を聞いたことはありますか？　あまりいらっしゃらないですよね。昨年5月28日に「山の日祝日法案」というのを国会で通してもらいまして、2016年8月11日から16番目のナショナル・ホリデー、祝日になりました。でも、意外と簡単に決まってしまったものですから、誰も知らないんですね。

実は、日本で祝日がない月というのは6月と8月なんです。なので、6月に祝日を、という話があったんですが、授業日数が1日減るというので、8月になった。8月でしたら子どもたちが休みなので、あまり影響はないのだそうです。それと同時に、ご両親なり家族の方と一緒に山に行けるということで、結局8月になりました。施行は来年の2016年からになっています。山の日の「山」というのは、山全体を考えております。例えば森林、それから森林があるということは水資源、そして里山、里の文化。日本の山は8割方は神様が祀られています。特に女神が多い国なんですが、宗教の大本山はほとんど「何々山」なんです。そういう山という意味ももちろん含んでいます。ですから、山は非常に広い意味での山だ、ということでお考えいただければと思います。

「山の日」というのは、祝日としてシンボルになりますので、その夏の一番良いシーズンを通じて、皆さんの仕事や趣味の役に立ててもらえます。もうすぐ20近いロングトレイルができてくると伺っていますので、その中で山と海と、そしてそのはざまにあるロングトレイルという考え方、非常に自由な発想でいろいろなことができるのだという、こういう視点が大変大事なんだろうと思っています。

日本では、熊野古道も伊勢路になりますと、ほとんどフィールド地形が海と峠、そして海岸に泊まるというパターンになります。石見銀山に行く道もそうなんですけれども、いろいろなトレイルがある。イギリスのフットパスという感覚と、実はニュージーランドのトレイルはまた違う感覚ではあるんですけど、イギリス流のフットパスもあるんですね。ヨーロッパでもラウンド・トリップをするような、ツール・ド・モンブランですとかツー

ル・ド・マッターホルンというものがあるわけですけども、それらの文化に、あるいはいろいろな目標・目的に応じたトレイルというのがあって良いと思います。その中で日本の中の地形や文化、宿泊する場所など、いろいろなものを組み合わせて、皆さんにはオリジナルな、皆さんらしいトレイルを作っていただくということが、一番のポイントになるのではないかと思っています。

この後にまた、白山白川郷と信越トレイルのお話があると思いますが、その根本となる思想性や考え方など、そこをしっかりとしてほしいですね。地域を活性化するというのは「山の日」の目的でもあるんです。ロングトレイルが一つの要素だとしますと、その地域社会にロングトレイルの魅力があって、人に来ていただくためには、どういうことが必要なのかというところが大事ですね。単に他のところでこういうことをやっているから、きっといいに違いないと、それを単純に採用したからといって売れるものではないと思うんです。

それからもう一つ、外国人の日本旅行が格段に増えています。そして、日本での観光だけではなく、トレイルを歩く、山を歩く、いろいろな人たちがものすごく増えています。私は別途旅行の仕事をしていますけれども、去年の夏、フランス人のグループですとか、トルコ人のグループとか、珍しい国からの方たちも結構来たんですね。日本に成田空港から来て、浅草に泊まって浅草を味わって、それから松本へ行って松本を味わって、山登りをして下りてから高山へ行って、高山から京都へ行くというような、15 日間くらいでそういう旅行をしている方が多いです。フランス人に至っては、熊野古道を歩いてきてから京都、そして富士山に登りに行くとかですね、そういういろいろなパターンを勉強して来ています。非常に良く勉強して、日本の文化を分かりたくて来ているわけです。ですから歴史にも詳しいし、それから見たいものが非常に明確化しています。きちっと勉強しているということを、皆さんも覚えていただければと思うんですね。

その意味で、ロングトレイルの整備ということになりますと、道しるべ、道標の整備の仕方ですとか、キャンプ地の整備の仕方、あるいはトイレの問題。いろいろなものがあるわけですけども、そういったものを含めたアコモデーション（accommodation：宿泊施設や宿泊設備、接客のための設備やサービス）、インフラ、そして、もう一つは安全管理が必要です。基本的には来る人の自己責任だということです。そういうスタンダードを、皆さんと一緒に、私どももお手伝いをして、作って参りたいと思っています。

ぜひ皆さんが、ロングトレイルを通じてご自分の地域の活性化を図っていただきたい。活性化した成果を皆さんで話し合っていただき、さらに発展していくというパターンを作っていただければ、と思います。どうもありがとうございました。

2 オープンする白山白川郷トレイルについて

山田　俊行（白山白川郷トレイルクラブ）

皆さん、こんにちは。私は世界遺産で有名な岐阜県の白川郷から参りました。そちらで白山白川郷トレイルクラブを作りまして、事務局を担当しております山田と申します。本業はトヨタ白川郷自然學校の仕事で、かれこれ 10 年続けて参りました。

白川ではまだトレイルを作っている途中で、皆さんに胸を張って紹介できる状態ではないのですが、いろいろとご配慮をいただきまして、今回時間をいただくことになりました。

はじめにパンフレットをご紹介したいと思います。この白山白川郷トレイルが、どういうルートなのかを見ていただきたいと思います。新幹線の新高岡駅があって、その少し南に南砺市があります。ここの瑞泉寺をスタートしまして、ずっと南へ行きます。世界遺産集落の五箇山集落、そこの行徳寺から山の方を行きまして、ここが世界遺産集落の白川郷。この辺から白山国立公園に入って、白山の頂上からさらに白山の一番南の端、白山中居神社まで、およそ 100km というコースです。

まず、白山の縦走登山というのを一つお勧めします。これは南縦走路と言われているルートで、地図で一番南の端にあるコースです。およそ 2 泊 3 日です。2 泊 3 日で大体 25km ほど歩くコースです。これはいわゆる登山コースです。それからもう一つは大白川の原生林トレッキング。見ていただいたら分かるとおりです。高低差が非常に少ないコースなのですが、今まで環境省の地図には出ていなくて、林野庁の地図にのみ載っていたルートです。そこを改めて使ってもいいということで、今回お披露目となりました。具体的に言うと、特別保護地区の中にどっぷり入って行けるコースです。素晴らしい原生林が広がっていまして、日本有数の原生林地帯ではないかと思います。

それから、もっと里に近いところも歩きたいという方向けにも、世界遺産トレッキングを設けております。いわゆる有名な白川郷の風景がありますが、この展望台のちょっと裏山へ行くと、実はブナ林が広がっています。白川郷は年間 140 万人が来る観光地なんですが、この裏山には多分、年間 100 人も来ない、誰も通らない山道があります。そこを歩くと、知られざる白川郷を知るという感じで、お得感があるルートです。足元の道が悪いので、登山スタイルが必要になっています。

それから最後は砺波平野。散居村ですが、非常に珍しい風景が広がっています。写真はちょうど田植え前ですが、水が田んぼ一面に広がっているので、湖の中にぽつぽつと家が浮いているような感じに見えます。道宗道というところを通って平野に至るルートです。この道宗道、道宗というのはお坊さんなんですけども、お坊さんが浄土真宗の普及のために通った道を、道宗道の会という富山県の方々がこつこつと作り上げていったところとつ

なぎ合わせて、一緒の道にしましょうということで動いているわけです。

このトレイルは 100km なんですが、高低差はほぼ 2700m。おそらく高低差が一番あるルートになるんじゃないかと思います。全部を歩く方よりも、部分部分で歩く方が多いと思います。いろいろな楽しみ方ができる、いいルートだと思っています。

この白山白川郷トレイルクラブを作ったのは、2013 年 7 月になります。作る前に実は白川村の村長さんにも話しかけて、ぜひ白川村にもトレイルを作りましょうと、ご協力をお願いに行きました。白川村としても、全面的にこの動きに協力をしようじゃないかということになったんです。メンバーを募って、もちろん山のガイドの人間もそうですけれども、山岳救助隊のメンバー、それから地元の猟師、それからただの山菜採りのおじさんなども含めて、みんなで集まって、白川村の山の魅力を外部の方にたくさんお伝えしていこうじゃないか、ということで作ったメンバーです。今、25 名くらいおります。ちょうど磯野さんにも相談をしている最中ですけれども、日本山岳ガイド協会の正会員にもなり、ガイドの仕事を本格的に受けていけるようにしていこうと動いております。

今回、お集まりの皆さんで、もし白川郷でトレイルのガイドをしたいという方がいらっしゃいましたら、基本的に人手不足でありますので、ぜひお越しいただけたらと思っております。人口 1,700 人しかいない村で、いつも会議をすると出席するメンバーが決まってしまいます。トレイルクラブの会議があり、その後、白山の将来を考える会をやると、メンバーはほぼ一緒ですね。会はいっぱいあるんですけど、メンバーは一緒ということで、いつも忙しくしていますので、人が足りません。ぜひ、ガイドに来ていただけたらと思います。

できたてほやほやの白山白川郷トレイル、ぜひお越しいただけたらと思います。ありがとうございました。

3　新幹線開通とロングトレイル

木村　宏（NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長）

皆さん、こんにちは。信越トレイルのことを知らない方がいらっしゃるかと思いますので、それをちょっとだけお話しします。場所は、長野県と新潟県の県境です。下が長野県で上が新潟県というところです。

スタート地点に立ちますと、トレッキング・ルートが敷設されておりまして、今は 80km を歩くことになっております。途中、鍋倉山があり、峠がたくさんありまして、歴史の峠道であったり、かつて人の往来があったところですね。今もいろいろな形でこの峠が使われているのですが、峠を貫く峰道と思っていただければいいかと思います。

これを作るに当たって、加藤則芳さん（日本を代表するバックパッカーであり作家、2013 年 4 月没）は欠かせない 1 人だと思います。2 年前に亡くなってしまいましたけれども、日本にロングトレイルの文化を確立しようと考え、いろいろ啓発活動をして来られた方です。今、東北の「みちのく潮風トレイル」の建設が進んでいますが、こちらも彼の哲学の中で、国の政策として出来上がりつつあります。

たまたまわれわれと出会いまして、信越トレイルを彼の思うロングトレイルの一つのモデルにしていこう、ということでライフワークとしてやっていきたいということだったのですが、その遺志をわれわれが継いでいるわけです。加藤さんは世界のロングトレイルを歩いておられて、特にアメリカが多かったと思いますけども、その文化をつなげようということで尽力した方です。彼の指導の下、トレッキング・ルートの維持管理をする NPO が立ち上がりまして、信越トレイルがスタートしました。

信越トレイルはアパラチアン・トレイルを模していると言いますか、そっくり真似ていると言いますか、そんなイメージで思っていただければいいと思います。アパラチアン・トレイルは全長 3,500km あるんですが、31 のメンテナンス団体が 13 の州にまたがって組織的にトレッキング・ルートを管理している、というシステムが出来上がっています。それが素晴らしい、と加藤さんはおっしゃって、その仕組みを受け入れているということです。信越トレイルは 80km ですので、比較にはならないんですが、似たような仕組みでトレッキング・ルートを管理しています。

信越トレイルは国有林がほとんどですので、国との連携が必要になります。当時の中部森林管理局長にも今日はお越しいただいておりまして、この方がいらっしゃらなかったら国有林にこんな道ができなかったんじゃないかと今、思うところであります。

アパラチアン・トレイルは、ボランティアの力で支えられています。いろいろな人が地域の中で汗をかいて、トレッキング・ルートの維持管理をしていくという仕組み、私たち

はこれを学んでいます。8年間の歳月の中で、2,000人の方々に汗を流していただいて、この80kmのトレッキング・ルートが出来ています。維持管理をするためのボランティアの人たちも大勢いらっしゃって、どういうふうにトレッキング・ルートが変化していくのかという調査も毎年行っています。これは一般の方々も参加できます。ホームページをご覧いただくと、そろそろボランティアの募集が始まりますので、ぜひ、お出かけいただきたいと思います。

今、入山カウンターを付けて、どのくらいの人たちが入山しているのかという調査をしていますけども、ガイドの養成も必須でございます。こういった訓練も含めて、ガイドさんが活躍する場にもなっているということです。生物多様性ってなんだろう、というものを地域の人に知ってもらわなきゃいけないということで、地域の中でもこういったシンポジウムを開いて、地域のものにしていこうとしています。

トレッキング・ルートを整備する団体が20団体くらいあるのですが、行政もNPOもありますし、いろいろな方々がこのトレッキング・ルートを管理する役割を持っています。これもアパラチアン・トレイルを真似しました。それから、ロングトレイルはどうしてもバックパックを背負って歩くというのが基本だというところもありますので、こういったロケートサイトもできていまして、今、誰も歩かなかった山の中に36,000人くらいが歩いているだろう、というのが信越トレイルです。7年経ちまして、自己申告ですけど、667名が全部歩いたよという登録証をもらっています。名前が出ていますので、ホームページをご覧になっていただきたいと思います。

この後、いかにクオリティを保つかというところが大事なところだと思います。先ほどの節田さんの、イギリスのフットパスの例にもありましたけども、長い歴史の中で多くの人が支えてクオリティを保っているという、これが言葉では簡単ですけど、なかなかできないというのが、ロングトレイルの痛しかゆしといったところだと思います。

ところで、新幹線が来ると多くの人がやって来る。今日のテーマは外国のロングトレイルを見るということなのですが、外国であれだけ歩いている人たちがここに来るということは、外国に見習って日本もトレッキング・ルートをきちんと整備していきましょうということだろうと勝手に解釈いたしました。われわれの地域には、飯山、上越妙高と2つの駅がありますけども、この区間に信越トレイルがあるということをまず理解していただきたい。スタート地点が飯山駅から車で30分くらいのところです。スタートしましてずっと北上して終わる。車で40分くらい行くと上越妙高駅ということです。新幹線で10分です。歩くと6日間かかるわけです。これがロングトレイルの醍醐味だと思います。

確かに信越トレイルは、ここ数年外国人が多くなっています。欧米人だけではなく、アジアの人たち、台湾、韓国の人たちがだいぶ多くなってきました。日本を訪れて2度目、3度目に行きたい日本の田舎、それを通り越して今度は歩きたいという、そういった層が着実に増えているというのは実感するところです。

後ろから見ると、日本人か外国人かは分かりませんけども、やはりのんびり歩いて楽し

む、楽しみ方はやはり日本人と違う。いろいろな特徴が分かってきましたけど、これから外国人が増えるということを想定すれば、ロングトレイルも今のままではいけないんじゃないか、受け入れ体制の整備が必要になってくるんじゃないかと思います。

長野県も、山岳高原を生かした世界水準の滞在観光地づくり、移動を楽しみながら滞在をしていくという旅のスタイルを推進しています。長期の滞在をしながら余暇を過ごすという人たちが、多少増えてきた感じはありますけども、まだまだ日本の方はそういう旅行のスタイルをしませんので、これらをわれわれも仕掛けていく必要があるかと思います。これがスイスの例でございますけども、のんびりゆっくり滞在しながら楽しむというスタイル、これをぜひ日本、長野にもということです。

国際観光都市にふさわしい、自然の美しさをうたっているのにふさわしいようなハード、駅舎を造っていただきまして、観光案内所も外国人がいつ来てもいいように対応ができています。観光案内所の中は、滞在しながら楽しめるような雰囲気づくりをしています。海外の方も毎日やって来て、ここでWi-Fiをしながら数時間過ごす。駅の中にアクティビティー・センターという着替え室ができて、レンタルがあって、交流ができて、山に出かけられる、川に出かけられる、自転車に乗って行けるというセンターを作っています。

長野経由の北陸新幹線で信越トレイルを歩いて、最後、苗場山に着くと上越新幹線で帰れるという、まさに新幹線とロングトレイルにふさわしい実践をしていこうという目標を立てています。

2020年、これを機に外国人が山岳高原リゾート、ロングトレイルを歩く確率は非常に高くなってくると思います。皆さんも、日本人だけではなく、海外に向けてインフラの整備をしていくということは大事で、これから世界に通用する日本のトレッキング・ルートが出来上がってくるということだと思います。こんな笑顔がたくさん迎えられるようにということで、はなはだ簡単ではございますが、私の発表に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

日本ロングトレイル協議会報告

前川　正彦（日本ロングトレイル協議会常任委員・事務局長／高島トレイルクラブ会長）

皆さん、こんにちは。NPO 法人高島トレイルクラブは、基本的に日本山岳ガイド協会の認定ガイド 17 名で切り盛りしています。その中で先ほど出ていたようなインバウンド関係は、英語、韓国語を話せる女性ガイドが 2 名おります。高島トレイルクラブは今、年間で 40,000 人から 45,000 人くらいの来場があり、主に 17 名が交代で、必ずガイドが付いてのツアーを実施しています。トレイル弁当、これも必ず付ける。そして地図、地形図は必ず初めての方には買っていただく。弁当は 5,000 食くらい 1 個 870 円で売っているのですが、季節によって冬は冬で、冬バージョンの弁当を、内容をいろいろ変えています。

ロングトレイル協議会は、明日より NPO 法人に移行準備をしていくわけですが、これらのシステムはエリア・イベントを実施したり、持続可能を目指す、これが第一条件です。

方向性については、山に例えますと、サミットがあってミドル、そしてボトムがありますが、このボトムがやはりすべてです。ここにしっかりとした組織、みんなの想い、人、文化すべてが固まっていると思います。ここをしっかりすることによって、徐々にピーク、サミットへ向かっていく。極端な話、エベレストを登っていた人がキノコを採りに来ている。自然を楽しむことが第一です。高島の場合、物語化ということで、琵琶湖の水源になっていますので、水源域を歩くというテーマを設け、「水の一生物語」という形でツアーを増やしていく。そうすると途中で話が終わるので、必ず次のツアーに来ないと話がつながりません。そのような形でいろいろなもの、地域に合ったツール、商品を物語にすれば、すごくいい形になって、最後はサミットに上がっていけると、そう思います。

そんな中でボトムをしっかりと、その中にもやはりいろいろな問題があります。今後、皆さんが担当する時にいろいろな障害などが出てくると思うんですけど、その場でクリアしていかないといけない。これをためていっては、最後にぶつかりますので。諸問題はどんどんクリアして前に進んでいってほしいと思います。

自然環境に対するダメージの軽減も必要です。これは、ガイドが常に山を歩いていますので、外来種が出てきていないか、環境変化がないかということをチェックしています。新規事業は、一過性のイベントはまず駄目ですね。やはり続けていくというのが非常に大事なことで、参加者が 5 名でも必ず伝わっていきますので、持続することが大事です。

トレイルランですけど、対策として専用コースの設置ということで、高島トレイルは 40km のトレイルラン専用コースも作っています。そこでしっかりとしたガイドラインを

作りながら大会を行っています。

受け入れ体制ですけども、当然、年代層に合ったこともやっていかなければいけないんです。やはり子どもから大人まで、いろいろなスタイルで受け入れをできるような受け皿を作っておかないといけない。

今後の課題ということで、私どもの経験上ですけども、関係者総参加でやらないとなかなかものが進んでいかない。持続可能なトレイルにしようと思うと、どういう形で自分たちにメリットがあるのか、というところも加味しながら勉強していただければと思います。もう一つはキーマンですね。リーダー格の人が出てこないと、なかなか引っ張ってもらえない。

私ども高島トレイルでは、国内旅行の旅程管理者（国内旅行業務取扱管理者）、ツアー・コンダクターの資格を 4 名ほど持っているんですけども、これを持っておくと、ツアー会社との連携が非常にやりやすい。こちらで企画をして、ツアー会社の負担をできるだけ軽減して現地ですべて回していく。弁当の手配から時間の手配まですべて。あまり大量の人数はいませんけども、バス 1 台分くらいは案内しています。

遭難対策協議会の設立も必要です。長野県警は山岳遭難救助隊があって、しっかりしていますが、滋賀県をはじめ、私どもの近隣になると地域課の駐在員が出てくる形になります。加えて、私どもガイドは必ず出かけています。昨年も、トレイル線上ではないですけども、市内で 10 件ほどの道迷いや遭難事故があって、私どもガイドができるだけ早く要救助者を助けに行く方向で、今、警察や消防と連携して進めています。

私がいつもうちの会で言っているのは、ロングトレイルが全国につながって、連携をして北海道から九州まで行けたら、一番いいかなということです。

どうもありがとうございました。

特集2 第5回環境思想シンポジウム

日本における環境思想をどのように展開するか

期日　2014 年 11 月 27 日(木)
主催　安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
進行　結城正美（金沢大学 教授）

挨拶

岡島 成行（安藤百福センター センター長）

第 5 回環境思想シンポジウムということで、アメリカの UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）から 2 人の先生をお招きしました。特に今日のテーマは、Environmental Humanities（環境人文学）、人文科学による環境学です。環境問題というと、公害とか地球温暖化もそうですが、それに対応するために科学技術を考えたり、汚い空気をきれいにしたり、実用的な工学、農学、理学というのが盛んでした。それとともにもう一つは経済を使って、環境税（Environment Tax）などを使って環境を良くしたり、法律で縛ったり、様々な方法があります。

21 世紀のこれからの環境問題、特に地球環境問題は、人々、我々自身が加害者であり、被害者です。我々人間の生き方の問題になってきているということになりますと、当然、哲学、歴史などの人文科学でも扱わなければならないテーマになってきます。私の長年の持論では、環境問題は人文科学が取り組むべき課題になっていると言っていますが、それに対して今日のお二人は Environmental Humanities ということで、日本語の翻訳は非常に難しいと思うんですけれども、環境人文学とでも訳しますが、人文学の立場から環境を切り取ってみる、もしくは環境の立場から人文学の形を整えてみるという観点から活躍されているお二方に来ていただきました。

このテーマについては、後ほど結城先生からお話があろうかと思いますけれども、日本で初めてのディスカッションになろうかと思いますので、皆さん、ぜひレクチャーが終わったら質問などをいただければと思います。通訳もおりますので、日本語で構いません。時間が限られているので質問は的確に、ご自分の意見は披露しなくて結構ですので、要点

だけをおっしゃっていただくということでやっていただければ、たくさんの方が質問できると思います。

もう 1 点、安藤百福センターは皆さんもご存じのように、最終的には子どもたちが自然と仲良くできるための施設です。昔は子どもたちだけで自然の中で遊べました。しかし、今は子どもたちが自然と切り離されているので、いろいろなことを知りません。最初に誰かが連れていってあげないと危険性もあります。私は今年で 70 歳ですが、私たちの世代は子どもだけで山に行って、川に行って、十分に楽しめたんですけれども、現代では誰かが一緒に連れていってあげないと危なくて仕方がない。川に行けば流されてしまいます。

そこで当然のこととして、子どもたちを自然の中に連れていく役回りが必要になってくる。その役回りの人を養成するのがこのセンターの大きな目的です。子どもと自然、それからリーダー、もうちょっと突き詰めていくと、そのベースにあるのは人と自然の関係です。これについては、ヨーロッパでもアジアでもアメリカでも日本でもいろいろな考え方がある。人と自然との関係について、常に考えていく必要があるのではないでしょうか。安藤百福センターでは、スキル、技術としてリーダーになるためにはこういう勉強をしましょう、ということでたくさんの指導者養成を行っています。その一方で、この環境思想シンポジウムが毎年こうやって開かれているのは、その根っこに感じたことについての理解を深めていくというねらいがあります。そのために、環境思想、人間のあり方、人と自然の関係について世界中の方に来ていただき、ここでディスカッションを重ねていくのがこのシンポジウムの趣旨です。

今回は幅の広いテーマで、見えてくるテーマは「都市とデジタル」ですけれども、ベースにはこのセンターの目的である人と自然の関係を考えるというところにきちんと収まっています。その辺りを踏まえてぜひお聞きいただき、皆さんの考え方を共有したいところです。それでは、ゆっくりお楽しみください。どうもありがとうございました。

結城　正美（金沢大学　教授）

おはようございます。今回の環境思想シンポジウムは、環境人文学に焦点を当てたセミナー形式のシンポジウムで、この企画に携わらせていただいた者の一人として、簡単にですが、環境人文学について、趣旨説明を兼ねてお話しさせていただきます。

「環境人文学（Environmental Humanities）」というのは聞き慣れない言葉だと思います。実際これは新しい用語で、2010 年頃から一般的に使われ始めました。

環境人文学の拠点が世界中にいくつかありまして、今日お話しいただくお二人がいらっしゃる UCLA、他にオーストラリアや北欧でもさまざまな活動が展開されていますが、北欧で環境人文学の活動を牽引しているスティーブン・ハートマン（Steven Hartman）さんがよく使われるスライドを紹介します。

花のような絵になっていまして、真ん中に環境人文学があります。花びらに当たる部分に歴史（History）、文学（Literature）、思想・哲学（Philosophy）、人類学（Anthropology）、人文地理学（Human Geography）、考古学（Archaeology）があります。それぞれの花びらがばらばらになっているのではなく、重なっており、全てが重なる中心の部分に環境人文学がある、ということを示したものです。歴史とか文学といったそれぞれの分野は従来から研究領域としてあるわけでして、新しい領域というよりも新しい動き、これらをネットワークとしてつなげて環境の問題に取り組む、そういう動きが環境人文学の特徴だと言えます。

それぞれの専門領域で研究をするということは、従来の研究スタンスと変わりません。何が違うかといいますと、例えば文学なら文学、歴史なら歴史の分野で閉じた形で研究をするのではなく、あるテーマに関して文学と歴史と考古学、いろんな人文諸分野の人たちが協働し、ネットワークをつくりながら研究をしていくという動きがあります。それが非常に新しいところです。

今日お話しいただくお二人は、ハイザさんは文学ですし、クリステンセンさんは歴史、そしてジャーナリズムですので、違う分野の専門家がある同じテーマについて探求するという、環境人文学の良い例を私たちは見ることができると思います。

環境人文学が 2010 年頃に生まれた背景には、先ほど岡島センター長がおっしゃったように、環境の問題は科学やテクノロジーだけで解決する問題ではないという意識があります。つまり環境の問題は価値観の問題ととても深く接続します。これは当然で、私たちは何らかの価値観に基づいて行動しているわけですから、環境の問題について考える時も、その価値観を問い直さなくてはいけない。そこのところに人文学の研究が深く関わってきます。

環境人文学が生まれた背景としてよく引き合いに出されるのが、スウェーデンの環境研究財団ミストラ（Mistra）が出している環境人文学についてのリポートです。これはオンラインで見られます。概ね次の二つの点が強調されています。

まず一つは、環境問題はこれまでもっぱら科学や技術や経済の観点から検討され、価値観の問題がほとんど取り上げられていなかった、ということです。たとえば、リスクを避けなくてはいけないという議論では、どうすれば避けることができるかということは話し合われていても、何をもってリスクと捉えるのか、という価値観に関わる問題はほとんど論じられていません。価値観に関わる問題は重要であり、そこを追究していくうえで人文学に光が当てられたというのが一つ目の強調点です。

もう一つの強調点は、環境の問題は専門家の間で研究され、共有されてはいますが、それが一般の人になかなか伝わりにくいという事実に関することです。このような現状を改善するために、一般の人とのコミュニケーションを取る手立てが必要になるわけですが、そういうところで人文学の役割が重要になります。その点も強調されています。

この二点を強調して、環境財団ミストラのレポートは、今後、北欧や EU で環境人文学を進めていくことが重要だという結論を出しています。

今日お話しいただくお二人は、アメリカのロサンゼルスという大都会にある大学で環境人文学を牽引なさっています。簡単に紹介させていただきます。

まずウルズラ・ハイザ（Ursula K. Heise）先生は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）英文科の教授でいらっしゃいます。ドイツで生まれ育ち、アメリカのスタンフォード大学で Ph.D.（博士号）を取得されました。その後ニューヨークのコロンビア大学、カリフォルニアのスタンフォード大学で教鞭を執られ、現在は UCLA で教鞭を執られています。ASLE（the Association for the Study of Literature and Environment、アズリー）という、環境文学の領域で非常に大きな、会員数 1,000 名を超えるアメリカの学会がありますが、そちらの会長を 2011 年に務めておられます。

専門領域はエコクリティシズム（Ecocriticism：環境文学研究）で、文学を通して環境をめぐる価値観の問題に取り組んでおられます。ドイツ語と英語はもちろんのこと、フランス語、スペイン語、イタリア語、ラテン語、日本語をはじめ多くの言葉に長けておられ、比較文学の領域でも大変活躍なさっています。環境と文学の交差する地点、なかでも SF と文学とか、科学・テクノロジーと文学とか、南米アメリカ・西欧・日本の環境文学表象など、多数の領域で多くの論文や本を出版されていらっしゃいます。とりわけ 2008 年にオックスフォード大学出版局から出されたご著書『場所の感覚、惑星の感覚』は、環境人文学において非常に重要な研究書として評価されています。

実はハイザ先生には、この 2、3 日前の三連休の時に大きな環境文学のシンポジウムが沖縄でありまして、そこでも基調講演者としてお話しいただきました。今日はまた別のお話、環境人文学に関するお話をしていただきます。沖縄では環境文学における重要な概念についてお話しいただきました。

もう一方は、同じくカリフォルニア大学ロサンゼルス校のジョン・クリステンセン（Jon Christensen）先生です。クリステンセン先生は、環境・持続可能性研究所 （Institute of the Environment and Sustainability）の兼任准教授でいらっしゃいます。ジャーナリストとして、カリフォルニア大学出版局から季刊で出されているジャーナル『BOOM』の編集長を務めていらっしゃいます。『BOOM』というジャーナルは画期的で、研究者だけでなくてジャーナリストやアクティビスト、作家、政治家、教育者、アーティスト、そういった人たちが、カリフォルニアに関する環境の問題を話し合うフォーラム的な場になっています。

現在、本を執筆なさっていて、テーマは今日お話しいただくデジタル環境人文学に関するものだそうです。

以上、簡単ですが、趣旨説明および講師の紹介をさせていただきました。センターのホームページに掲載されているプログラムには、最初に 70 分ハイザ先生のお話とディスカッション、そのあと休憩を取ってクリステンセン先生のお話とディスカッションとありますが、お二人のお話は相互に関係しておりますので、適宜お二人で、交代で話し合うところは話し合っていただきながら、最終的に 12 時ぐらいまでレクチャーとディスカッションを続けていきたいと思います。

講演

1　環境人文学について

ウルズラ・ハイザ（Ursula K. Heise）

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）教授

今日はお招きいただいてどうもありがとうございます。環境の危機に関して、子どもたちを教育することは非常に重要なことであり、それに関連して環境人文学の話をいたします。

環境人文学は、ここ10年の間に出現した分野です。人文学、社会科学の中で生まれてきた動きで、オーストラリアでは生態人文学（Ecological Humanities）と言われています。

先ほど結城先生が示したスティーブン・ハートマンのスライドとは若干違いますけれども、（スライドに示した）こういった領域が環境人文学に関わっています。

スライドにリストアップした前半部分には、思想、歴史、文学、人類学、地理学があります。先ほどのハートマンのスライドにあった考古学の代わりに、ポリティカル・サイエンス（Political Science）が入っています。コミュニケーション研究やジェンダー研究なども環境人文学に関わるものと考えています。

この中でも環境思想・環境哲学がもっとも古く、1970年頃から発展してきました。環境史は1980年代半ばから、環境文学は1990年代初頭から出てきた動きです。環境人類学は世界各地のさまざまな環境の問題に対応した分野です。文化地理学はデータを取り扱い、データ研究を通して、いかにその土地が使われてきたのか、土地利用が変化したのかといった研究に取り組んでいます。ポリティカル・サイエンスは、ときにポリティカル・エコロジー（政治生態学）とも呼ばれていて、権力構造と環境の問題の関わりを研究します。コミュニケーション研究は、文字どおり、環境の問題がどういうふうに伝えられ、メディアが環境問題にどう関わっているかといった問題を中心に検討します。ジェンダー研究は、アメリカでは1980年代までは女性研究（Women's Studies）と呼ばれていましたが、いかにジェンダーの違いが環境の問題に関わっているかという点に特に注意を向けています。例を挙げますと、アメリカのネイチャーライティングと呼ばれる文学領域では、男性が野生の自然に入っていき、そこでの経験を作品にしている。野生を経験し書くのが男性であるということから、そこにフェミニスト的な考察を加えた研究などがあります。

以上、環境人文学の概要をお話ししました。ここからは環境人文学で議論されている重要な問題をみていきたいと思います。まず1つ目として、私たち人間は私たちが「自然」と呼ぶような人間以外の種に関してどういう責任を持っているのか、「自然」にどのように

関わっていくべきなのか、という問題です。

2つ目は価値観に関するもので、どういった価値観が自然環境との関わりにおいて重要になってくるか、どういう価値観を通して自然環境との関わりが深まっていくかというものです。価値観がどういうふうに変わるべきか、あるいは変わらないべきか。あるいは、文化が違うとどのように自然環境との関係が違ってくるか。私自身、もともとドイツで生まれ育ち、現在はアメリカに住んでおり、文化的相違と環境観との関係に関心がありますが、文化的相違と自然観の関係も環境人文学の重要なトピックになっています。

文化の相違と環境観との関係は、土着文化（indigenous culture）の問題にも接触します。先住民の環境観を先住民以外の文化で参考にする時にいろいろな問題が起きており、この点は3つ目のトピックとして挙げられます。

4つ目の重要な課題は、歴史を通して自然に関する考え方や自然の利用がどう変わってきたかということです。

5つ目の問題は、経済の状況と環境問題に関わるもので、経済状況の違い、つまり貧富の差が環境の危機をどういうふうに形成しているのか、あるいは環境の危機にどう関わっているのかということに関わります。つまり経済の状況や宗教の違い、ジェンダーの違いを考慮に入れながら、環境正義（environmental justice）の問題を検討していくということ。環境正義の中でも、特に話題になっているのは気候変動に関連する「気候正義」（climate justice）の問題です。

6番目は、どのような物語やイメージを使って環境の問題を伝えているのか、考えさせようとしているのかという問題です。どんなストーリーやイメージをどういうふうに使って、どういう対象に向けて書いているのか、そういった問題が環境の危機の表象を考える上で重要になってきます。

7番目の課題は、何かを決定する時に誰が決定するのかという意思決定・政策決定（decision making）の問題です。例えば、アメリカである場所を国立公園にしようという決定をする時に、誰かがそれをするわけですが、反対派の人もいるわけです。誰が決定をするかという問題、これは政治的な問題ですが、他方で文化や価値観の問題にも接続します。

今までお話ししてきたテーマの中心にあるのがこの点で、環境問題は社会的・文化的な問題なのです。これは研究においてはもちろんのこと、先ほど岡島センター長がおっしゃったように、教育の上でも、環境人文学は次世代にどういうものを読ませ、考えさせていくかということに関わってもきますので重要です。UCLAの英文科で開講している環境関連の授業には、文系だけでなく理系の学生も参加します。理系の学生たちは、自然科学の研究が一般の人々に理解されていないと言いますが、環境人文学的な視点から見たらもっと考えるべき問題があって、例えば自然とは何なのか、どういうふうに自然や環境の問題を考えればいいのか、といった価値観の問題に向き合うことが求められます。

（以上は、結城の逐次通訳にもとづくものであることをお断りしておく）

2 デジタル環境人文学

ジョン・クリステンセン（Jon Christensen）

ジャーナリスト／カリフォルニア大学出版局季刊『BOOM』編集長

今日は、岡島センター長をはじめ、お招きいただいてどうもありがとうございます。これが自分にとっては初めての来日で、2日ほど東京にいましたが、今回この素晴らしい環境に来させていただき、大変うれしいです。

ハイザさんの話は学問領域に関わるものでしたが、私は学問領域以外のことに目を向けて話をしたいと思います。私はジャーナリストとして仕事をしてきて、現在はUCLAで環境史とコミュニケーションを教えています。教育に関わっているわけですけれども、大学の中での教育と、大学の外、一般の方々を対象にした教育の両方に関わっています。そういった意味で学問と、もう少し広い普通の生活を含めた一般の環境でのコミュニケーションにメディア研究なども通して携わっています。

これから、スライドに書かれているような言葉に着目しながら話を進めていきたいと思います。

まず一番上にあるのが“Environment”（環境）と“Humanities”（人文学）です。環境に関わることと人文学に関わることは、先ほどハイザさんがお話になりました。これらは別個のものではなくて、環境の視点から人文学が見直され、人文学的なアプローチを加えることによって環境をめぐる価値観の問題が見えてくる、という相互関係にあります。

先ほどの1番目の項目と同じように、「デジタル」と「人文学」も相互に関連しています。メディア分析といった形で、デジタルに進んでいることを人文学に応用するだけではなく、人文学的なアプローチでデジタル的なものを見るという逆方向の動きもあります。

デジタルの一つの例としてデータがあるわけですけれども、データは、客観的ないしニュートラルなものではありません。そこには何らかの歴史的・文化的な意味、価値観が埋め込まれていますので、データを分析する時に人文学的なアプローチが役立つというふうに、両者は相互関係にあります。

3番目の、「デジタル」と「環境人文学」も、上の2つと同じように相互関係にあって、デジタルなものを環境人文学に導入することによって、これまで見えてこなかったものが見えてくるし、環境人文学的なアプローチをデジタルなところに適用することによって、価値観の問題、文化的意味の問題が探求されてきます。

一番下に「デジタル」「環境」「人文学」という言葉が並んでいますが、右側の「環境」と「人文学」についてはハイザさんが先ほどお話しされました。私は、特に「デジタル」

と「環境」の方にフォーカスを置き、人文学的なアプローチも念頭に置きながら、これから自分が携わっているプロジェクトを具体例としながらお話ししたいと思います。

これが最初の例です。デジタル環境史というもので、“Thick Mapping”（「分厚い地図化」）に関するものです。ここに 2 つの画像があります。右側は衛星写真で、ロサンゼルスを含むカリフォルニア南部の写真です。左側は歴史生態学者（historical ecologist）が作ったイメージで、およそ 160 年前、歴史が短いのでカリフォルニアにとってはかなり昔になるわけですけれども、160 年前のカリフォルニアがどんなものだったかをイメージ化したものです。

こういった衛星地図と昔のイメージを提示し、自分が編集している『BOOM』というジャーナルをフォーラムの形で議論の場にしていこうとしています。ここが川で、ここが土でという説明を付けたり、それが分かるような形ではなく、わざと歴史的なイメージをアートとして示そうとしています。

意図的にアートとして提示されている地図のイメージですけれども、それがどういうテキスト、どういう歴史的な文章に基づいたものであるかというものが左と右にあるものです。左側は文章によるもので、それに基づいてアーティスティックにイメージ化したものが右になるということです。

右の方にカラーで作られたアート的な地図がありますけれども、それが何に基づいているかというと、左側にある非常に古い地図とか、上の方にある絵とか、あるいはテキストとか、そういったものに基づいて昔はどうだったかという新しいアート的な地図を作っているわけです。これはカリフォルニアのデルタで、カリフォルニアの人たちにとって最も重要な水がめであり、ここに一般の人々の関心は大きく集まっている、そういうトピックです。

昔の土地利用を復元することによって昔に帰ろうという議論をするわけではなく、見れば昔あったものが今でも存在するということ、形は違えども存在することが分かる。それを私たちの風景観を考える手立てとしたい。私たちは一体何に価値を置き、何に関心を払い、何を重要視しているのか、そういったことを考える手立てにしようとしています。“Thick Mapping”というプロジェクトは、大学や研究所で研究されていることを一般の方々に開いて話し合いをする場として活用しようとしています。

これからお話しするのは、City Nature< http://citynature.stanford.edu/> という別のプロジェクトのものです。私がこのシンポジウムで期待されていることはデジタル環境人文学についてお話しすることなので、それをこれからお話しします。どういう手法で研究を進めているのか。デジタル環境人文学の可能性はどこにあるのか。結論的に言えば、データと物語の相互関係にあると考えています。

データと物語がお互いを前景化するということに加えて、逆にデータと物語がお互いに批判し合うという動きにも着目しています。データは全く中立的なものではなく、ある物語に則っています。データが語る物語はどういうものなのか。あるいは、データを物語に

持ち込むことで、これまでにない物語の分析も可能になってきます。このように、私はデータと物語の相撲やレスリングを楽しんでいるわけです。

City Nature は、アメリカ合衆国の 40 の大都市を選んで、公園やオープンスペースのデータを収集して分析しているプロジェクトです。

この地図は、40 の大都市のうちの 1 つであるコロラド州デンバーのものです。緑で示されているところが公園です。こういうふうにデータを収集していくわけですけれども、一般的に公園あるいは緑地にアクセスしやすい場所に住んでいるのは富裕層で白人が多いと考えられていますが、本当にそうなのかどうか、白人富裕層が緑地へのアクセスがあって、白人ではない、経済的に富んでいない人たちはアクセスがしにくいところに居住しているのかということを、データを収集して分析します。濃い緑の部分が重なりましたけれども、これはオフィシャルに公園という場所ではなくて公園のような場所、つまり木々が生えていて、そこに人が住んでいなくて、コンクリートの道路がなくてという公園のようなところを衛星写真に基づいて重ねたものです。

分析の際には “neighborhood”という言葉がキーワードになります。都市全体で緑地へのアクセスの問題を考えるのは枠組みが大きすぎるので、単位を“neighborhood”にするわけです。“neighborhood”というのは歩ける距離の範囲を指し、おそらく日本語で言えば町内や地区と言えるでしょう。このデータは“neighborhood”を単位にしたデータです。“neighborhood”ごとにさまざまな項目を立ててデータを取っていきました。どれぐらい緑地があるか、舗装されている土地の割合、公園の率、どれぐらい公園が必要とされているか、といった項目があります。公園がないので公園が欲しいという必要性もデータとして取っていますし、その地区の人口密度とか、そこの地区に住んでいる人たちの収入、経済的な要因もデータとして取っています。

そういう形でデータを収集して分析した結果、一般に思われているように、緑地や公園の近くに住んでいるのは白人富裕層である、という考え方は必ずしも正しくないということが分かりました。赤いところが富裕層を指しており、じっさい緑地に近いところに富裕層が多いですが、緑地から遠いところにもかなりいるということが分かります。

この図のように、低所得者層が住んでいる所には緑地や舗装されていない場所がたくさんあったりして、緑地へのアクセスは白人富裕層が良いという一般的な考え方は必ずしも当てはまらないことが分かります。データの分析によって一般的に考えられていることが必ずしも正しいわけではないということは分かったのですが、それが誤っているというわけでもありません。

私たち人文学に関わる者の癖ですが、私にも物事を複雑にする傾向があります(笑)。今、指している部分は、人々がここに公園が欲しいと思っている地区です。海があって、そこが港になっているわけですけれども、港からは物資が運ばれる流通の経路にもなっていて、先ほどの直線のところは割と低所得者層の人が住んでいる場所です。そこでは公園が欲しいという声が非常に大きいです。

紫の部分は、公園が欲しいという声が大きい地区です。そこには赤い丸で示された富裕層の人たちもたくさんいますが、彼らは金持ちだから自分たちで何とでもできる。先ほどの直線のところは低所得者層の人が多いので、自分たちで何とかすることは難しい。そこは低所得者層の人がたくさん住んでいるので、公園に似た緑地が公的に造られるという可能性も低い。このように、City Nature というプロジェクトは人文学における研究が一般の環境政策に関わるという 1 つの例です。

皆さんとのディスカッションの時間も取りたいので、ここからは簡単にお話しします。今まではイメージの問題に焦点を当ててきましたけれども、これからは言葉や文章の分析データに関するお話をします。

歴史学者として仮説の検証に取り組んでいます。仮説として共有されているのはビジョンとリーダーシップは相互関係性があるということです。果たして本当にそうなのかということを言葉の分析、テキストの分析を通して検証しました。

別のプロジェクトについて簡単に 2 つお話しします。これはロサンゼルスで 2014 年に Instagram で撮られた写真に基づくデータです。ロサンゼルス、サンフランシスコ、ヨセミテ国立公園を舞台にした SNS、Instagram の写真を載せてあります。このプロジェクトを立ち上げた背景にあるのは教育に関することで、公園の未来をどう考えていけばいいのか、次世代の環境教育をどう考えていけばいいのかといった問題意識があります。

この研究から分かったことの 1 つは、国立公園は社会的な場であり、ツイートしたり写真を撮って送り合ったりされているということです。そういうことは公園管理者も知っているのですが、あまりそこに関わろうとしていません。歴史デジタル環境人文学の研究から、公園で人々は社交的で社会的な行動を取るということが分かっているので、そこにもっと管理者も関わっていくことが重要だという提言をしています。

もう 1 つ、よく国立公園に関して言われているのは、国立公園や野生の自然はジョン・ミューアのように白人の男性が孤独に活動する場であって、そこには有色の人たちはあまり行かない、なぜなら自分たちと同じような人がいないからという考え方がありますが、自分が分析したデータによると全くそういうことはなくて、アジア系もラテン系も公園を楽しんでいることが分かります。

最後にご紹介するのは、人々を気候変動の地図に置くというプロジェクトで、あるデザインに関わっている人との共同研究です。これはカリフォルニアのベイエリア、サンフランシスコがそこにありますが、その辺りの水面上昇の地図を図にしたものです。例えば、これから 25 年の間に 3 フィート（約 90cm）水面が上昇すると言っても、人々は別に驚かない。まだたくさん陸地があるではないかと思われ、特に衝撃は与えられないわけです。視覚的なイメージを少し反転させた形でこれからお見せします。これはサンフランシスコのベイエリアの一部ですけれども、3 フィート水位が上昇すると、このように水浸しになる。一つひとつの点が一人ひとりの人間を表していて、色の違いは、黄色が白人、緑がアジア系という形になっています。これが 25 年後、あるいは私たちはこれから若い世代だ

と 40 年、50 年と生きるわけですから、生きている間にこういう状況になるということを可視化する手立てなのです。

現在、これから何十年後かに水位が上昇するわけですから、自分がどういう状況におかれることになるかが分かるようなアプリケーションを作っています。これはその一つのイメージです。こういったアプリケーションを作ってソーシャルメディア・キャンペーンに関与していくことを考えています。写真を撮って、例えばこれから結婚 50 年のお祝いの時や自分が 70 歳の時にどれくらいの水位になっているかが分かるようなものを作ろうとしています。何故かというと、気候変動という非常に抽象的な問題に、人間的なエレメント、人間の物語を取り込んで具体的に感じられるような形にしたいという思いがあるからです。

これはデータを図式化したものですけれども、これからの将来で確実に言えるのは、人口が増えていく、読み書き能力を持った人が増えていく、都市が増えていくということです。これから 40 年後、水位は上昇しています。都市の人口は 2 倍になっています。そういった状況で私たちはどういう暮らしを考えていけば良いのか。

これからますます情報化社会になっていきます。データと人間が全く別個のものではなくて、つながっていきます。そういった問題を視野に入れて、私たち教育に関わる者たちは環境の問題を考えていかなくてはいけないのではないでしょうか。

最後にこの Web サイトを紹介させてください。「エンバイロンメンタル・ヒューマニティーズ・ナウ（Environmental Humanities Now）」という Web サイトで、今、準備中です。これは英語だけではなく、他の言語も使って、環境の問題や環境人文学に関わる人たちのフォーラム的な場にしようと思っています。これはデジタル環境人文学に特に関わる情報が載っているところです。

（以上は、結城の逐次通訳にもとづくものであることをお断りしておく）

質疑＆応答、ディスカッション

結城： ありがとうございました。これから会場の皆さまからの質問をお受けします。

Q ：クリステンセン先生に質問をさせていただきます。先生はカリフォルニア南部の現在の地図と 160 年前のイメージを映されて、「昔のように戻ろうという議論はしない、しかし次世代に引き継ぐ環境をどう考えていけば良いのか」、少女が腰まで水に浸かった写真を示しながら問い掛けられました。この点について、次世代に引き継ぐべき環境の姿のクリステンセン先生の描くイメージを、具体的に教えていただけますか。また、どんな方法でそれを展開するのがいいとお考えですか、お尋ねいたします。

クリステンセン：自分は歴史を専門としていて、通常、歴史は過去の問題を研究する領域ですが、自分にとって歴史は現在をより良く理解するため、将来、未来を考えるためのものであるということをまずお伝えします。ハイザさんがよく私について言うことなのですが、歴史への研究態度はサイエンスフィクションへの関心と似ている。歴史をサイエンスフィクションのようなものとして捉えられているところがあります。歴史が未来を考える手立てになる、未来の可能性を考える手立てになると考えています。私は歴史家として、ジャーナリストとしてもそうだと思うのですが、人の話を聞くのがとても好きだし、そこに関心がある。私はロサンゼルスという人種的・言語的に多様性に富んだ場所に住んでいて、そこでいろいろな人種、いろいろな言葉を話す人たちの話を聞きながら、多様な背景を持つ人たちがどういうふうに自然を考え、自然環境の何に価値を置いているのか、自然環境をどういうふうに見ているのかといった問題を理解しようとしています。そういった環境にいるので、私の将来へのビジョンはおのずと人種的・文化的・言語的に多様な風景の中で形成されていくことになります。

結城：他にご質問やコメントなどございますか。最初にハイザ先生から環境人文学に関する概要的なお話を頂いて、その後クリステンセン先生からデジタル環境人文学についてお話を頂きました。この後、質問の時間が終わりましたら、もう一度ハイザ先生にご登壇いただき、都市（アーバン）の環境人文学についてお話を頂きますが、その前に今までの 2 つのお話で質問などがありましたら、ぜひどうぞ。

Q：先ほどの質問と関連すると思うのですが、“Thick Mapping”の話で、今後どうするかということを考えていく、何をするのだというご発言がありましたけれども、それを住民のグループのどこかと協力してやっているとか、あるいは大学の学生さんたちと何か協力しているとか、クリステンセン先生がお一人でいろんな人に聞いて回っていることは分かったんですけれども、それ以外にいろんなグループとの関連とか協力関係があるかないかということを教えていただきたいです。

クリステンセン：先ほど類似のご質問を休憩中に頂いたので、それと合わせて今お答えさせていただきたいと思います。先ほどのシティーパーク・プロジェクト、公園と人々の経済状況をデータ分析したプロジェクトに関して質問を頂いたのですが、1つここで申し上げておきたいのは、経済状況とかビジョンとか、そういったものが何かを説明するのではなく、現象を説明するものは歴史であるということです。何が起きているかは人々の行動と関係があって、偶発性（contingency）に基づいています。実際、ご質問にあったように、さまざまな関心を共有するグループと共同して研究やプロジェクトを進めていくことは重要だし、実際にそうしています。具体的にどういうグループと協働しているかというと、ロサンゼルスにある博物館と一緒に動いています。博物館とは、例えば生物多様性の調査などで共同研究や共同プロジェクトを進行させています。

結城：それでは、最後に、ウルズラ・ハイザ先生から Urban Environmental Humanities（都市をめぐる環境人文学）に関してレクチャーを頂き、そのあと質疑応答も含めた全体ディスカッションに移っていきたいと思います。

ハイザ：私のこれからのお話は、先ほどのクリステンセンさんの最後のスライドを始まりとしたものになります。そこではナショナル・ジオグラフィック（National Geographic）のデータに基づいて、これから都市の人口が増えるという話がありました。これは一つのデータですが、2008年を境に地球上で初めてある種が、つまりヒトですけれども、都市に居住する者がそうでない者を超えるという現象が見られます。人の居住地域をアーバン（Urban：都市）とルーラル（Rural：田舎）に分けますと、2008年を境に都市人口がそれ以外のものを上回っています。これはその傾向を別の形でグラフ化したもので、青が世界のデータで、緑がアジアのものです。都市人口が増えていることが分かります。今、数の問題として都市人口の増加を見たわけですが、数の背景にはいろいろな動きがある。WHOで、どれぐらいの人口密度だったら都市というのかという議論があり、それは重要なことですが、都市は世界のどこにおいても増えている、大きくなっているのは事実です。これは環境人文学にとって非常に大きな挑戦的な問題です。というのも都市は、一般的に野生の自然と対立するものだと考えられているからです。2年前にクリステンセンさんと一緒にロサンゼルスに移ってきて、そこでは公害の問題や環境の問題がたくさんあるので

すが、都市という場所を環境の問題の観点から考えるとはどういうことなのだろう、と思索し始めました。都市という文脈において環境に関する文学をどう考えていけば良いのだろう、また UCLA や大都市に住む学生たちが環境の問題、環境人文学にどういうふうに関わっていけば良いのだろうということを考え始めました。

都市の環境問題を人文学的に考える時に何を手がかりにすれば良いか。2 つのリソースが考えられると思います。1 つは生物学者が言っていることで、自然は人間の手によってつくられ、変えられてきているという考え方です。自然は人間の手が加えられているという考え方を以下に説明しますと、まず 1 つ目に、ピーター・カリイバ（Peter Kareiva）という人が言っていることですけれども、飼いならされた自然（domesticated nature）という概念があります。小諸のような美しい自然であっても、これは野生の自然ではなくて人の手によって作り替えられているという、飼いならされた自然として環境を見るという視点が 1 つあります。2 つ目はアンソロームス（Anthromes）という概念で、エコシステムがそれ自体としてあるというよりも、人との関係において人の手に影響を受けて存在していることを指します。3 つ目のインターベンション・エコロジー（Intervention Ecology）というのは、これまでは生態系を回復することに視点が置かれてきたわけですけれども、生態系を回復するということは現実的なのであろうかという懐疑を内包した考え方です。というのは、気候変動やさまざまな問題によって生態系の要因は常に変わってきているので、それを復元するとか保存するとか、そういったことは現実的ではないだろう、と。過去のものを復元するのではなくて、これからどういう生態系を考えていけばいいのかという、そちらの方向性の概念が 3 番目です。さらに、アンソロポシーン（Anthropocene）という概念があります。これはアメリカやヨーロッパでは今とても議論されていますが、アジアではそれほど議論されていないように思います。これは新しい地質学的な年代を指し、もはや自然が自然として存在する、そういう地質学的な年代は終わって、産業革命期以降、すべて人間の影響に自然環境はさらされているといった考え方が前面に出たものです。

先に「都市を環境問題の場として考えるときの 2 つのリソースがある」と言い、1 つ目として、もはや自然と言われるものはそれ自体が自然ではなくて、人の手が加わっているという概念が既にいくつか出てきているということをお話ししました。ここでは 2 番目のリソースとして都市生態学（Urban Ecology）を考えるための概念をみていきます。UCLA では都市人文学（Urban Humanities）という動きも作られており、それがどういうものかをごく簡単に言うと、人文学の重要な部分である理論的な分析に都市計画とか建築とか都市デザインとか、そういった実践的なものを組み合わせて、実用的な形で研究を進めています。都市人文学の具体的な一例としてバイオシティー（Bio City）という考え方をご紹介します。バイオシティーというのは、生物学的に良い機能をする都市のことであって、例えば水の問題を考える時に、水をめぐる文化とかエネルギーの使用に関する文化的な問題を考えることがあります。具体的な例を挙げると、アメリカでは特に前庭、時には裏庭もそうですけれども、青々とした芝生を持つことが重要なのですが、雨の降る東部ではそ

れで良いとしても、雨のあまり降らない西部でそれをやっては環境的にあまり良くない。都市人文学の観点から、芝生は西部の環境には良くないというようなことを言って、芝生に関する、あるいは前庭に関する人々の知覚に働き掛けています。芝生ではなくて、例えば何が美しいのか、何が良いのかという価値観の問題に積極的に関わろうとしています。2番目として挙げたのは、自然や文化の多様性に関する問題です。誰がどんなふうに公園や浜辺や湖や川を使うのか、知覚の問題、価値観の問題です。都市というのは、都市でなくてもそうですが、干ばつや火事や地震のリスクにどういうふうに対処するのかといった問題があります。リスクへの対処。ロサンゼルスは乾燥していますので、火事はとても大きな関心事です。どこに住むのか、どこに住めばそういったリスクが避けられるのかという時に、どういう居住地が良いとされるのか、美しいとされるのか、そこにも知覚の問題、価値観の問題が関わってきます。次に出したのはマルチスピーシーズ（Multispecies）、いろんな種が住む都市という考え方です。つまり都市は人間だけが住んでいるわけではなく、トカゲやいろんな人間以外の種も住んでいるのですが、人間以外の種にとっても住みやすい環境はどういうものなのか、アーバンデザインとの絡みもあって、そういったこともトピックになっています。

これらのことを考えるために2つのエピソードを紹介しますが、私は鳥が好きなので鳥の話になります。例えばニューヨークシティーとかトロントとか、そういった北米の東部の都市は渡り鳥が飛来する場所にもなっていますが、高層ビルに渡り鳥がぶつかる、つまり高層ビルのガラスを彼らはガラスだとは思わずにぶつかって死んでしまうという例が多く見られます。そういった事故を避けるために、環境活動に関わる団体が、例えば高層ビルのガラスに、人間の目には見えないけれども、鳥の目には分かるフィルムを貼ってぶつかるのを防止する策が取られています。今申し上げた例のように、人間以外の種（＝鳥）にとって住みにくい環境に、人が手を加えて鳥たちが住みやすい環境にしていくという活動があります。

2番目は2つの違う種の対立に関わることです。例えば、日本では猫が好かれているようですけれども、人と猫の関係を例に話します。猫は自由に戸外を歩き回り、鳥を捕まえて殺したりし、アメリカでは毎年25億もの鳥が猫によって命を奪われているという状況があります。ロサンゼルスでは猫と鳥のことに関して2つの方策が取られていて、1つは猫を殺して鳥を保護するという動きがある。他方で、猫はロサンゼルスの風景の一部であるので、殺さずに都市に存在させるという動きがあります。猫を殺さずにロサンゼルスの重要な風景の一部として見なす人たちは、猫をそこに置いておく聖域みたいなものをつくっています。今お話ししたことから引き出せるのは、人間として人間以外の他の種に対してどういう道徳的な責任を負うのか、道徳的に私たちはどういう行動を他の種に対して取ればいいのか、そういった問題を考えさせるエピソードです。これまで都市が人間以外の種にとって住みにくい、あるいは人間以外の種にとって敵意に満ちた環境であるという見方と、人間以外の種にとって住みやすい環境であるという例を示しましたが、これから話

すのはどちらでもない3番目の例です。この鳥は私が飼っているローラという名前の鳥で21歳です。1993年に生まれて2008年に友達から譲り受け、それ以降一緒に暮らしている鳥です。私は出張が多く、鳥が寂しそうだったので、この鳥の友達（メート）を飼っています。その鳥を見ながら野生の種について思索をめぐらせています。もともとこの鳥はメキシコの北東部をホームとします。1960年代から1980年代にかけてペットとして流通しましたが、環境破壊などもあって激減したものの、ペットとして人気があるので、自然の中で生まれたひなをもともとの環境から北米へ移して売られました。連邦政府は1993年にこの鳥の交易と売買を禁止しました。今は絶滅危惧種のデータ、レッドデータに載っていて、数は本当に少ないです。4,000～5,000ぐらいしか確認されていないそうです。これは非常に典型的な環境問題の話のように見えます。人気の鳥がいて、それをもとの生まれ育った場所から引きはがしてペットとしてアメリカで売って、どんどん数が少なくなってきている。この話は、ここで終わると環境破壊の典型的な話になるのですが、面白い展開があって、アメリカ合衆国の中で3つ、この鳥が野生の鳥として生息している場所があるのです。フロリダとテキサスとロサンゼルスです。テキサスはどこから来たのか分からないのですが、テキサスにはメキシコとの国境がありますので、南の方から渡ってきたのではないか。テキサスと違ってフロリダとロサンゼルスは、もともとあの鳥がいたメキシコ北東部からは遠いので、自然に渡ってきたということは考えにくい。ペットとして北米に持ってこられた鳥が野生化したと考えられます。もともとの生息地であるメキシコ北東部にいるのは4,000～5,000羽ですが、ロサンゼルスで野生化した鳥は8,000羽いるということです。数はどんどん増えてきている。これはロサンゼルスの写真です。カリフォルニアの鳥類学者がカリフォルニアの鳥を研究する研究所があります。1990年代にこの鳥は絶滅危惧種扱いされていましたが、カリフォルニアのロサンゼルスでどんどん増えてきていることが鳥類研究所の観察で分かってきて、絶滅危惧種のリストに載っているのはおかしいということで、2001年にメキシコ北東部原産の鳥がカリフォルニアの鳥として公式に登録されました。実際にこれは都市が野生化した鳥、野生の鳥の重要な環境になっているという例です。私が飼っている2羽の鳥はとてもうるさいので、一緒に暮らしているジョンさんは、「きっとこの鳥たちは野生に戻りたいんじゃないか」といつもジョークを言っています。今申し上げた鳥の話は、都市が計画的にではなく、期せずして絶滅危惧種の鳥の野生の聖域になっているということでロサンゼルスをバイオシティーとして見る良い例だと思います。

ロサンゼルスは空間が広がっているわけですけれども、アメリカの家は裏庭（バックヤード）が広く、そこを庭として使用するのではなく、人の居住空間を作るというプロジェクトがあります。通常バックヤードになっているところに人の居住空間を作ると、人以外の種にとっては空間を奪われるわけですから、住みにくい環境になってしまう危険性がある。それを回避するために、例えば人の居住空間を作ったら、その上に植生などを考えて、鳥や他の動物が来られるようにし、人の居住空間を増やしても人以外の種が住みにくくな

らないような工夫を考えています。2015 年 6 月にロサンゼルスでそういう展示があるらしいので、楽しみにしています。

2 番目のバイオシティー・プロジェクトは、生物学的・文化的な多様性にフォーカスしたものです。大都市は、かなり生物多様性に富んでいます。というのも、人が多く、それぞれいろいろな植物や動物などを持ち込んできているので、生物多様性が非常に豊かです。大都市が実は生物多様性に富んでいるという観点はあまり論じられていません。というのも、生物多様性はいつもその土地固有の土着（native）の生物に着目して研究がされているからです。さっき言ったように、住んでいる人がそれぞれ植物や動物を持ち込んでくる。つまり native でないものを持ち込んできたが故の生物多様性はあまり検討されていませんが、これは結構面白い観点ではないでしょうか。都市の生物多様性を研究する上で、例えばどういった種がその都心の生物多様性をよく語っているのだろうかといったことがテーマになってきます。私は環境人文学の方なので、生物多様性に関して人文学的なアプローチをプロジェクトとして進めています。それはどういうものかというと、動物なり植物なり自分の身の回りの種についてどれぐらいのことを人々は知っているのか、どういった動物や植物が良いと思われていて、何が嫌われているのかということを、年代別、人種別、多様な人たちがいるわけですので、聞いてデータを取ってマッピングしています。どういう種が望まれているのか、どういう種が嫌われているのか、種に関する文化的な見方、価値観の問題は非常に重要です。それは先に言ったように、例えば庭に何を植えるか、芝生ではなくて環境に合ったものを植えることによって水の使用量が変わってくるということにも関わってきます。

これからお話しするのは水に関すること、ロサンゼルスの川に関することです。ロサンゼルスの川は結構コースを変えます。それは場所が大きいので特に問題ないですが、1930 年代にロサンゼルスで大きな洪水が起こって、その後、洪水を防止するためコンクリートでコースを固定するというプロジェクトがありました。そうすると美しさというものがなくなってしまった。ロサンゼルスの川の美しさを取り戻す運動が起きていて、その一環として川に在来種（native species）を再び放すということが行われています。もともと住んでいたものとして、例えばカエルとかヘビがいるわけですけれども、カエルは良いけれどヘビは人々があまり好きではありません。何を導入するかという時に人々の好きなもの、嫌いなものといった文化的な要因を考える必要があります。今お話ししたような形で生物多様性の文化的な側面を考えることは、今後、大都市、バイオシティーを考えていく上で重要だと思います。

（以上は、結城の逐次通訳にもとづくものであることをお断りしておく）

結城：ありがとうございました。今のハイザ先生のお話でも、これまでのお話に関することでも、ご質問やコメントはありませんか。

Q：簡単に言うと、何が望まれていて、何が嫌われている種かを考えるのが必要であるとハイザ先生はおっしゃいましたが、嫌われているものが、それこそどんどん絶滅してしまうのではないかという危険性は考えられませんか。
ハイザ：嫌われている種がどんどん絶滅に追いやられているのではないかという質問に対して、何が嫌われているかというのはちゃんと分かっているのだろうかという疑問を持っています。仮定のレベルにとどまっていて、実はよく知らないのではないか。そこをもっと調査する必要性があります。嫌われているものを排除するというのではなくて、それをどう考えていくかということで、ここに教育の問題が関わってきます。
Q：先ほどの質問と関わりますが、芝生の例と猫の例がありまして、それはまさしく人の美の感覚や価値観と関わるものだと思います。表面的な人間の目というのは、猫がかわいいとか芝生がきれいというような美的感覚が歴史的・文化的に構築されたものであるというようなご発表だったと思うのです。質問の形にできるか分からないのですが、日本の作家で結城先生が扱われている梨木香歩さんとか加藤幸子さんは、町における生物多様性を描いたような小説を既に日本で書かれていて、その部分をまずコメントしたいということと、生物多様性の意義という観点を描いている文学作品とか映画作品を、それはアメリカ、日本にかかわらず、ご存知であったら教えていただきたいと思ったので、お願いいたします。
ハイザ：生物多様性に関する代表的な文学作品には、パトリック・シャモワゾー（Patrick Chamoiseau）の *Texaco*、カレン・テイ・ヤマシタ（Karen Tei Yamashita）の *Tropic of Orange*、リディア・ミレット（Lydia Millet）の *How the Dead Dream* があります。（あらすじを詳細に紹介されたが割愛）

まとめ

野田　研一（立教大学　教授）

皆さん、長時間お疲れさまでした。ありがとうございました。私自身が刺激を受けたことを少しお話ししてこの会を閉じたいと思います。安藤百福センターでの環境思想シンポジウムは今回で5回目となり、5年間行っているわけですけれども、私もその中に加えていただいています。私も環境文学系、ネイチャーライティング系という文学系の人間なのですが、いつも大変刺激的な議論を伺っています。今日伺っていて、最初にご質問を頂いたことにも関連しますが、環境をめぐってわれわれは何を考えていくのかということを思う時に、過去、人類は環境との関係がどうであったのか、現在はどんなふうに環境との関係を持っているのか、それから未来、単純な時間ですけれども、過去がどうであって、今がどうだということをきちっと見ること、それしかない。未来は分からないというのもありますが、未来は私たちの意思決定だと思うのです。未来の意思決定をしていくためには過去と現在をきっちりと見極めていくということを考えなくてはいけません。今日お二人の先生から伺った、例えばThick Mappingとか生物多様性という考え方は、まさしく意思決定を非常に細かくわれわれがやらなくてはならない時代に入ったということのような気もいたします。それは人間にとっての自然環境をどうするかという問題と、子どもたちの教育をどうするのかということも絡めた形で、意思決定を非常に細かく、先ほどのヘビはどうかという話もそうですけれども、どの生物を維持するのかとか保持するのかとか、そういった問題、都市に入ってきたよその土地の鳥をどうしていくのか、そういった問題も全部、われわれは一つ一つ意思決定しなければならない時代に、好むと好まざるとにかかわらず入ったのかなということをとても強く思いました。それはとても大変なことだと思いますが、逆に言うと学問とか研究がそういうことを果たすのだ、どういうふうに果たすのかということをお二人の先生から伺った、一つのモデルを頂いたとも思っています。その意味で、とてもありがたい時間を私自身も経験させていただきました。ちなみに、東京もインコがどんどん増えているのですね。そういう論文もあると思いますので、東京の鳥、特に野生化した、リワイルド（Rewild）の鳥の話は大変面白いと思っています。ハイザ先生、クリステンセン先生、どうもありがとうございました。

特別インタビュー【第4回】　　名桜大学学長　**山里 勝己**

アメリカ文学が織りなす自然 ――ゲーリー・スナイダーとの対話から

山里 勝己　プロフィール

1949年沖縄県本部町生まれ、那覇市、浦添市で育つ。琉球政府立琉球大学卒、ハワイ大学修士課程修了、カリフォルニア大学デイヴィス校大学院博士課程修了、米文学博士（Ph. D）。著書に『場所を生きる：ゲーリー・スナイダーの世界』『移動のアメリカ文化学』『琉大物語 1947-1972』『＜オキナワ＞人の移動、文学、ディアスポラ』など。留学時代に、詩人であり自然保護活動家のゲーリー・スナイダー氏に巡り合い、以来、親交を深める。近年は、沖縄とアメリカの接触によって生まれた異文化接触の研究を手掛けている。

――英米文学に目覚め、ご興味を持ったきっかけについて教えていただけますか。

それはね、やっぱり沖縄で生まれ育ったからですよ。大学に行く時に、私は文学好きでしたから、国文にも行きたいな、それから英文にも行きたいな、というのがあったけれども、やっぱりそこにアメリカ人がいるわけでしょ。この人たちがいったいどういう人たちなのか知りたいと思いました。

それから高校時代ですね。中学3年から高校3年の1学期まで、毎日、英字新聞を配達していたんです。『モーニングスター』という沖縄の英字新聞があって。それを基地の中に配達するんです。だいたい40部ほど。浦添市の基地の中で、新聞社がくれるパスを持って金網（フェンス）の中に入っていって、毎朝7時前まで配達してから学校に行っていたんです。その時にアメリカ人と会うでしょう？　アメリカ人と個人的な付き合いをするわけですよ、人間として。だから新聞に出てくるようなアメリカ人じゃなくて、苦悩しているアメリカ人とか、ベトナムに送られそうになって、やけ酒飲んでいる人とか。それからアメリカの小学校がいっぱいあるでしょう？　そうするとね、アメリカの女の先生たちが、本国から送られてくるわけです。その人たちの寮にも新聞配達しているんだけども、その孤独な姿を見ているわけです。だから、この人たちはいったいなんだろうと。この人たちのことをわかるには何をすればいいのだろうって。ああ、じゃあやっぱり英語をやろう、英文に行こうと思ったんです。

私の世代の沖縄の人間で、アメリカ人とこんな感じで非常に濃密に個人的に付き合った人はあまりいないんじゃないかな。あの人たちはやっぱり孤独でしたよね、アメリカからこんな遠くまで来てね。そういう人たちの姿を見ているので、やっぱり国文に行くより英文に行った方が、この人たちのことが良くわかるんじゃないかなって思ったわけです。

――81 年にスナイダーさんとお会いになって、研究活動が本格化するということですね。

3 年間、カリフォルニア大学デイヴィス校に在籍しました。ゲーリー・スナイダーのアーカイブスがあって、彼の資料が全部あるということだったので、それで行ったわけです。ある時、図書館でスナイダーの書いた本を借り出そうとしたら、図書館の人がたまたまスナイダー・スペシャル・コレクションの担当で、その上司がスナイダーと親しいというのです。そこで手紙を書いて紹介してもらうと、スナイダーさんから私に、「直接連絡してください」という葉書が来ました。「お会いしたい」と手紙を書くと、スナイダーさんから地図と一緒に手紙が届きました。そして、森の中を探して、彼の家を訪ねたんです。

最初に入って行ったらね、彼が京都風に「こんにちは」って言うんですよ。家には奥さんと子どもさんがいらっしゃったけど、近くの町に用事があるのですぐに出掛けて行ったんですね。だからとても長い時間、「お前、何しに来たんだ」「なんでカリフォルニアいるんだ」などと聞かれ、2 人だけでずっと話をしていました。そのうちに、アメリカ文学をやっているんだけども、身近に感じられるアメリカ文学がいい、あなたが一番私にとっては感覚的にも合うし、今あなたがやっていることが現代の課題として非常に大きいので、ぜひ勉強させてほしい、と。沖縄には私たちが生まれた時からアメリカ人が大勢いるんだけども、アメリカって一体なんだろうっていうことも考えたい、あなたは日本も知っているし、お互いに意見交換しながらやるといい勉強になるんじゃないか、そのためにいろいろとご指導願いたい、と言ったんです。

彼は、資料をカリフォルニア大学にずっと入れているんだけど、その時まだカリフォルニア大学の先生じゃなかったんです。まだ教えてなかったので、2 ヵ月に 1 回とかね、3 ヵ月に 1 回、学期が終わった時とか、2、3 日泊まり込みで訪ねて、話をして教えてもらったり、資料のことを話してもらったり。まあ、そういう形で付き合いが始まったんです。それは 1981 年の 3 月からでした。スナイダーさんがまだ 50 歳ぐらいで、まだ若い頃です。私が 30 歳ぐらいの時ですからね。私は 80 年の 9 月にカリフォルニア大学博士課程に行きましたから、81 年の 3 月に最初にお会いして、もう 34、5 年のお付き合いです。だから、ものすごく長い付き合いですね。

私の指導教員が、「スナイダーを訪ねているのだから、彼について博士論文を書きなさい」と言うわけですよ。誰もやっていないところに入っていくのが学問だと言われて、「はい、それはそうですね」と始めてみたら、スナイダーさんが行っていたリードカレッジやコロンビア大学に彼の未発表の手紙が結構あるんです。それを見つけたので、全部コピーして彼の所に持って行ったら、彼もびっくりしてました。1940 年代からの手紙です。一番仲の良い友達で、詩人のフィリップ・ウェイレンさんに宛てて、スナイダーさんが京都から送ったものを、ウェイレンさんがリードカレッジとコロンビア大学に寄贈していたんです。だから、空白だった彼の京都の 10 年間がほとんどわかりました。手紙で哲学的な議論をするわけですよね。書きかけの詩などもありました。

彼が日本に行った理由というのは、アメリカのこれまでの自然観とかキリスト教的な自

然観ね、そういったものにやはり彼は満足できないんですよ。それで、アジアの思想に触れたら、文明がひっくり返るような衝撃があった。その時から彼は、例えばアメリカの大森林の皆伐とか自然破壊にかなり懐疑的になっているんです。西洋文明は自己破壊的な所を持っているんだとね。もしかすると別の文明があるかもしれないと探したら、仏教があるわけです。仏教の中では鈴木大拙なども読んでますね。その当時、50 年代、日本に行く前から、エコロジー運動もしています。日本に行く船の中でつけたスナイダーさんの日記の中に、Where am I in this food chain？という 1 行があるんです。自分はいったい、この食物連鎖の中のどこにいるんだって、たいへん哲学的な、根本的な問いを発しました。私は、彼が京都で突き詰めていったのはこれじゃないかなと考えています。アメリカ人の面白いところだと思うんだけれども、神秘的なものや悟りなども大事だけども、むしろ仏教の中にある自然観というか人間観などをクールに突き詰めていった感じがするんですよ。『Regarding Wave』（波を見ながら）という 68 年の詩集に、日本で書いたスナイダーさんの詩がたくさん載っています。その中に食物連鎖の詩があるんです。私は、あれが彼の、日本での修行の最後の卒業論文だと思っているんです。詩の中で、人間は何を食べている、何を食べている、何を食べているって次々と書いていくんです。例えば、土の中で太って丸くなった根っこを食べているとか。たぶん、人参とか大根でしょうね。それから、子羊の跳躍の中にあるエネルギーを食べているとか。そういう食物連鎖の意味っていうのを非常に深く突き詰めて、最後はね、「Eating each other」と言うんです。私たち（この世界に存在する生き物）はお互いを食べていると。食べるということについて突き詰めていき、最後は食べるということが深い愛の行為だというところにたどり着きます。このような思想を持ち帰り、帰国後、今度はカリフォルニアの山の中の、ウィルダネス（原生自然）のような所に行って住んで、アメリカの自然とどういうふうにすり合わせるか、交渉するかという話になってきます。あのあたりで、彼の著作『Turtle Island』ができたんです。

私のドクター論文は、『Seeking Fulcrum』というタイトルです。fulcrum とは、「てこ（梃子）」という意味です。だから、直訳すると『てこを探して』。スナイダーさんは自身の手紙の中で、自分は日本に行き、アジア的・東洋的な深みの中に沈潜して、そこで文明をひっくり返すためのてこを探しに行く、とウェイレンに書くんです。彼の仕事は、20 世紀までの文明の有様を変えていくためのてこを探す、そのような思想を鍛造する、創造する仕事だったんじゃないかな。その中にアメリカのウィルダネスやネイティブアメリカン、仏教、エコロジーなどいろいろな考えが入ってきて、彼なりの思想体系を作り上げてきた、そういう仕事をしたんじゃないかなと思います。それを追いかけて行くと、非常に面白いですよね。アメリカの詩人が、近代文明が生み出した環境の問題、自然破壊の問題、そういうものから出発して、結局人間って一体なんだろう、生きるってなんだろう、人間であることの意味（What it means to be human）をずっと追求して、太平洋を横断し、京都に移って、インドまで行って。タンカーに乗ってアラビアへ行ったり、太平洋を横断して星を見ながら様々なことを思索し、結果その 10 年間、彼なりの自然観、人間観、環境観

を深めて、それをアメリカに持ち帰った。私のドクター論文は、彼の人生におけるこの期間の研究です。その後のことはまた別の論文を書いたり本に書いたりしていますが、博士論文はだいたいその 12 年間位について扱っています。そういう意味では、誰も研究していなかった彼についての空白を埋めることができたかな、と考えています。

スナイダーには、最後に私の論文を読んでもらったんです。そしたら彼が褒めたもんだから、論文審査委員はあまり何も言えなくなった。(笑)

――81 年から現在までお付き合いされる中で、スナイダーさんはどのように変わられましたか？

だいぶ変わってきていると思いますよ。やっぱりね、どんどん深みが出てきていますよね。若い頃は、誰でもバシバシバシッと切っちゃうところがあったんです。彼はシャープですしね。でも深みが増し、丸みが出て、彼の言うことはやはりすごいな、ディープだなって感じますね。アメリカの現代詩人、生きている詩人の中で、一番の重鎮じゃないですかね。詩だけではなく、彼の著作『野性の実践』は、散文で書かれた大変深い哲学ですよね。野性をどう自分の中に取り入れるか、要するに野性を文明の中にどう取り入れて新しい文明を創っていくかという試みですよね。そういう意味ではアメリカン・オリジナルですよ、彼は。そのようなところがスナイダーさんの面白いところじゃないかな。

――山里先生はかなり長い間アメリカに行かれていますが、日本人とアメリカ人の自然への接し方について、どのようにお感じですか。

ヨーロッパ人がアメリカに渡ってきた時に、ウィルダネスにぶつかるわけですよね。それとどう交渉するか、どう折り合いをつけるか、人間としてそれをどうするかという思索の中で、新しい人間像が生まれてきたんじゃないかなっていう気がするんです。

一方、日本人は、自然に対してまったく新しい世界が目の前にドーンってあるかっていうと、そういう感じはないのではないかな、と思うんですよね。それよりも自然に対して非常に近い位置にいて、その中から新しい洞察が生まれてくる感じがします。ただ、それが人間としての新しい洞察、人間を変えてしまうほどの洞察かなということになると、そこが少しアメリカと違うような感じがします。アメリカ人は大自然と向かい合うことによって、人間はどう生きるべきかっていう命題が出てくると思うんです。それに答えようとするところが、アメリカの詩人や作家などにあるような気がします。これはまたアメリカ文学の伝統の 1 つであります。では、日本は例えば、芭蕉の『奥の細道』なんか読んでいても、そこに人間が変わろうとするところがあるでしょうか。非常に深い洞察はあるんだけれども、芭蕉が自然を見ていて、自分が強烈なインパクトを受けて、芭蕉の人間性が変わっていくかなというと、アメリカの詩人と比べるとそんな感じはしない。だからスナイダーさんやソローなどもそうだけども、ウィルダネスと直面した時に衝撃を受けるんですよね。そこで変わっていく、ものの見方が変わっていく、というところがアメリカのウィルダネスが持っている、強い力じゃないかなと思います。スナイダーさんは、ヨーロッパ人どころかアジア人も、とにかくアメリカにやってくる人たちは、アメリカのウィルダネスという自然と交渉し、折り合いをつけて新しい人間に変わっていくんだっていうことを

言うわけです。だから、Turtle Island のネイティブになるのだと言うわけですよね。スナイダーさんはそういうことを意識的にやっている人で、誰よりも彼が変容する自分を感じているし、他の人たちがどういうふうに変わってきたかということを見ようとしているのではないかな。

――帰国後のスナイダーさんの思索は、どのような暮らしや活動を通じて深まっていったのでしょうか。

彼は 1971 年頃、森の中に家を作りました。その時は何にもないですよ、電気もない電話もない、水道は自分で井戸を掘って作る。でも、そこで実験をするわけです。それから電気はソーラーパネルでしょ、彼の家の電気は全部ソーラーパネルです。これはもうまったく普通の家の電気と変わりません。しかし、よくも我慢してああいう所に長いこと住んだなあって。それはね、西部の森の中に農場を作って、お父さんやお母さんと一緒に住んでいた生活の伝統を引き継いでいるのかなっていう感じがしますね。彼の作った「キットキットディジー」という名の家は、3 つぐらいの文化の伝統が混ざり合ってハイブリッドになっています。京都で勉強した日本の農家と、ミシシッピ川の上流に住んでいたマンダン族というインディアンの部族の家の構造、それから屋根はスペイン瓦なんですよ。山火事があると火の粉が飛んでくるでしょ、瓦にしとくと燃えないって言って、スペイン瓦にしているんですね。そういうことを大胆にやってしまうっていうのがやっぱりアメリカ人かな、面白いなと思ったりするんです。キットキットディジーというのは、あそこに生えているバラ科の雑草の名前です。それはネイティブアメリカンの名前です。そのネイティブアメリカンの名前を自分の家に付けたこと自体が、彼の意気込みを示しているわけですよね。新しいネイティブになろうという、彼の考え方がそこにあると思います。

1987 年 スナイダー氏のご自宅にて（左：スナイダー氏、右：山里氏）

スナイダーさんが一番はっきりと実験したかったことは、space の中で人間がどう生きていくか、それを place に変えていくのがアメリカの人たちの生き方じゃなかったかということだと思います。place というのは人が定住して、歴史を作って、子どもや家族を作

って、何にもなかった物質的な空間を、人間が生きる場に変えていくというプロセスを意味する言葉です。そのプロセスの中で、ヨーロッパ人たちがやってきて、それからアジアから人々がやってきて変わっていくということを示したかった。だから、キットキットディジーは実験の場なんです。ヘンリー・デイヴィット・ソローも（ウォルデンでの暮らしで）実験を行ったけども、スナイダーさんは20世紀的な実験をしてみせたんです。それとね、山登り。忘れてはいけないことは、スナイダーさんは若い頃から優れた登山家だったということです。少年の頃から長けていたので、登山クラブに入れてもらって、ワシントン州あたりの山はみんな登ってしまった。これも実験の背景になっていると思います。

――スナイダーさんは、アメリカ先住民と白人との間の葛藤についてどのような考えをお持ちですか。

彼はアメリカ先住民と、移民してきたヨーロッパ人の子孫を統合したいわけです。いつまでたってもヨーロッパ人の子孫が、今度はアメリカで心理的に疎外されている。それをどのように折り合いつけるかっていうことを彼は一生懸命考えるわけです。ネイティブアメリカンと白人との葛藤というよりは、みんな一緒になんとかアメリカのネイティブになる方法はないかって。そのための一つの要素が、環境、自然。このアメリカという土地を、場所を、自分たちが大事に守っていこうということ、それはお互いに協力して仕事できるんじゃないかと。共同体で仕事できるんじゃないかと。そういうことを言うんですね。

だから、ネイティブアメリカンの先住民性っていうのは当然尊敬するけれども、同時にいま住んでいる人たちも、やっぱりこの土地のネイティブとして、この場所に対してきちんとリスペクトを持って生活していかなきゃいけないんじゃないかと。これはだから、21世紀の新しい価値観です。新しい価値観を生み出さないと。だからNew native of Turtle Islandということになるわけです。

――スナイダーさんの考え方に触れたい人は、どこからアプローチすればいいでしょうか？

『Turtle Island』（邦訳版＝亀の島）でしょうね。それから、『Practice of the wild』（邦訳版＝野性の実践）。そして『Place and space』（邦訳版＝新しい惑星の未来を創造する者たちへ）。これは、『野性の実践』の後の著作なんですよ。『野性の実践』はすごく堅い哲学的なものなんですが、『Place and space』は短くてわかりやすく、美しいエッセイがいっぱい入っています。スナイダーさんの、アメリカ人としての生き方を模索しているものとしては、このエッセイ集が読みやすいかもしれません。

スナイダーさんがplace（場所）と言う場合は、自分がちゃんと定住していて、そこにあるいろんなもの、そこにあるものをよく理解して、生命や存在しているものをきちっと尊敬しながら大事にしながら生きていこう、という価値観を表しています。多分ここには仏教の考えも入っていると思うんですよね。山川草木悉皆成仏というような考えがあると思うんですが、それを強調しているのがスナイダーさんなんですね。今までのアメリカ人は移動ばかりしていて、ここでだめだったらまた次に行って、よく言えば「opportunity」、機会があってそこを求めて行くっていうんだけれども、結局はいい所取りばかりして、環境に対して誰も責任を取らないんじゃないかという問題がありました。だから、ひとつの

場所に落ち着いてその場所に対して一人ひとりが責任を持つことによって、全体の環境、自然を良くしようと考えています。それはアメリカだけじゃなくて、アメリカから発信する惑星思考になるんです、最終的には。21 世紀は、惑星全体を考えないとやっていけないというところまで来ているわけですね。このあたりは、アメリカから来ていますよね。

スナイダーさんは、環太平洋の橋渡しをして、それからヨーロッパ人たちの歴史も視野に入れています。コロンブスたちがやってきたところから出発したアメリカにおけるユーロアメリカンの歴史は、スナイダーさんが帰結点になっていると思います。大きい枠で発想しているのは、彼ではないかという感じがしますね。

――今日は人と自然の関係についてアメリカ人、アメリカ文学の切り口から興味深いお話をいただきました。山里先生、どうもありがとうございました。

（インタビュアー：関智子　安藤百福センター主任研究員 2015 年 6 月　沖縄にて）

小諸 Tree House Project

普段自然に接する機会の少ない人に、「アート」をフックにして自然体験に興味を持ってほしいという願いから立ち上げた「小諸ツリーハウスプロジェクト」。プロジェクトの活動のシンボルとして「アートツリーハウス」という、国内外で活躍するクリエイターがデザインしたツリーハウスを制作・展示するとともに、昨年度より実際に自然と接する機会を創出する目的として、「自然・アート・食」を共通テーマとしたイベントを年に2回開催している。

第1回のイベントが「Debut Party」（5月24日開催）、第2回のイベントが「信州の収穫祭」（11月15日開催）とそれぞれテーマを設け、安藤百福センターの敷地内の森の中で、アート・自然と触れ合うワークショップや、地元の旬の食材を使用した飲食ブースの出店、安藤百福センター・トレイルを歩くイベントなど、気軽に自然に接することができるコンテンツを来場者に体験してもらい、そこから深く自然体験活動へ入ってもらうことを狙いとしている。家族連れが中心で、2回のイベントで約1,000人の来場者があった。

また、自然体験活動の普及の目的とともに、地元の文化・資源を活かしたコンテンツ作りを意識し、地元の活性化および地域と都市との交流も大きなテーマとしている。

日清食品ホールディングス㈱
デザイン統括部　今西 彩夏

論考

日本における自然学校の意義

岡島　成行（安藤百福センター センター長）

自然学校とは、自然体験活動を普及することを目的とするソーシャル・ビジネス[1]と考えて良いだろう。組織として利益を上げることは重要だが、それ以上に社会貢献を重視する組織である。環境教育や青少年教育の実践、過疎地域の支援など、これまでの実績を考慮すれば、自然学校はソーシャル・ビジネスの実践者であると言えるだろう。

本稿では、わが国における自然学校の意義について、①環境問題など現代の大きな課題に対応するために、改めて人と自然の関係を考えるための手段としての意義、②日本の教育に欠けている部分を補い、さらに発展させる意義、③日本固有の課題である過疎過密の問題に対する具体的な方法論を築く意義、の 3 点を指摘する。

なお、本稿で言及する自然体験とは、非常に幅の広いものである。奥深い山に分け入ることも海を渡ることも、またロングトレイルを歩いたり、身近な川で泳ぐ、キャンプを楽しんだり、郷土料理を作ったり、野山を駆け巡ることなど、自然との触れ合いを目的とするものすべてが含まれる。概念としては、登山やスキー、ヨット、サーフィンなども含まれるが、競技種目として既に確立していたり、動力を使うようなジャンルについては、自然体験活動という範疇から外されていることが多い[2]。

日本における自然学校の流れ

古事記に、筑波の国の農民が秋に連れ立って筑波山にハイキングに行く様子が描かれている。わが国には古くから、山にキノコや山菜を採りに行き、川に魚を釣りに行くなど、実利と趣味を兼ねた「遊び仕事」という伝統もあった。このような自然体験を通して、大人やガキ大将が子どもたちを山野に連れて行き、様々な教育をしていた。

明治に入り、ハイキングや登山といったアウトドア・スポーツが輸入され、それまでとは違った形の自然体験が始まった。富山県の学校で立山に集団登山をするようになったのが、西洋式の自然体験の嚆矢とされる[3]が、後に YMCA やボーイスカウトといった青少年団体が盛んにキャンプ活動をするようになり、西洋型の自然体験が徐々に「遊び仕事」といった伝統的な日本の自然体験を駆逐していく。薪炭が石油に取って代わられ、国全体が都市型に変容していく中で必然の結果と言えるかもしれないが、現在ではこのような遊び仕事に類する活動は非常に少なくなっている。

こうした流れに対し、1980 年代から日本各地で民間団体により自主的な活動として自然

---

1 西村仁志(2013)『ソーシャル・イノベーションとしての自然学校』, みくに出版, PP.134-156
2 文部省(1996)『青少年の野外教育の充実について』, 文部省生涯学習局青少年課
3 井村仁(2006)「我が国における野外教育の源流を探る」, 野外教育研究学会,第 10 巻 1 号, PP.85-97

学校が生まれてきた[4]。事業形態としては、子どもや大人に自然体験を教える、もしくは伝えることで「授業料」をいただき、それを運営資金として活動を続ける方法を採用している。1987 年 9 月、筆者らが呼びかけ、山梨県・清里で「清里環境教育フォーラム」を開催した。日本に自然学校をたくさん作ろう、という趣旨で仲間を募ったのだが、200 人ほどに連絡をしたうち 97 人が集まった。ここで初めて各地の自然学校の連携が図られるようになった。当時は自然学校といっても社会的にほとんど認知されておらず、自然学校の創設者たちは経営に四苦八苦で、将来展望はまったくない状態であった。しかし、青少年の体験活動という意味の中で、国や地方公共団体からの助成金や企業との共同事業として資金を得ているケースが増え、自然学校は徐々に発展してきた。

1996 年の調査では、自然学校は全国で 76 校だったが、2010 年の調査では 2,000 を超える組織が存在し[5]、事業を展開している。自然学校の多くは零細事業であり、世の中を変革に導くにはまだ力が足りないが、地域社会に一定の存在感を示し始めるようになった。

自然学校がやや安定し始めると、今度は地域社会で一定の役割を負うようになった。自然学校の設置場所が過疎地域であることが多いため、地域の過疎対策支援に踏み出すようになってきた。若いスタッフが移住するため、地域の役務や共同作業に人を出す、地域経済に貢献する、などが求められるようになったのである。多くの自然学校は 1990 年から 2000 年代にかけて、地域振興や過疎対策と共同歩調をとるようになった。例えば長野県・泰阜村のグリーンウッド自然体験教育センターは村内第 4 位の営業規模となり、積極的に地域経済に関与するようになっている。現在では、各地の自然学校は地域社会に確実に根付き始め、教育機関としての役割の他に地域振興・過疎対策の担い手といった役割を果たすようになっている。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災を機に、自然学校が地域の復興の担い手になるという、さらに新たな役割を担うことになる。震災直後に、自然学校関係者が集まって RQ 支援センターを設置し、現在まで復興の柱の 1 つとして活動している。その結果、被災各地に自然学校が生まれ、地域の復興の拠点となりつつある。

こうした流れについて、関係者の間では、自然学校を創設し運営を軌道に乗せるところまでを第一世代自然学校とし、地域振興や過疎対策に乗り出した頃を第二世代自然学校と位置づけ、震災後の地域再生活動に踏み込んでいった段階を第三世代自然学校、被災地型自然学校と呼ぶようになっている[6]。

現代における自然学校の意義

1．自然と人間の関係を見つめ直すこと

現代は科学技術の発達などによって瞬時にして情報が駆け巡り、世界各地に自由に出か

---

4 岡島成行(2002)『自然学校をつくろう』, 山と溪谷社, PP.141-156

5 日本環境教育フォーラム(2011)『第 5 回自然学校全国調査 2010 調査報告書』,日本環境教育ﾌｫｰﾗﾑ PP.3-6

6 広瀬敏道(2011)「防災教育の新たな展開」,『防災教育の観点にたった青少年の体験活動プログラムの調査研究』, 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター, PP.46-52

けることができるようになった。医学が発達し、様々な病気が克服され、人間の平均寿命も大幅に伸びるなど、科学技術の発展による恩恵も大きなものになっている。しかしその反面、人類の知恵が追い付かないという状況、すなわち科学技術の発達に対し、政治、行政、倫理など社会科学、人文科学的取り組みが追い付いていけない状況が生まれ始めている。しかもそれが地球的規模になっている。そのためテロや感染症、生命倫理、環境問題など新たな課題が生じている。このような地球的規模の諸問題の中で、戦争や病気の克服など多くの事項は古くから継続している課題であるが、生命倫理と環境に関する諸課題は人類が歴史上初めて体験するものである[7]。

クローン人間の是非や、産み分け、代理出産など、これまで神の領域とされていたことが人類の判断に委ねられるようになっている。こうした課題を取り扱う生命倫理は、きわめて微妙で繊細な判断を迫られている。例えば、宗教で禁じられていた諸課題に新たな判断を取り込まなくてはならない。一方、地球温暖化などの環境問題も、突き詰めれば人類の生活の仕方、生き方を修正しなくてはならないことに行き当たる。いずれの課題もこれまでは宗教や習慣、因習などにより無条件に禁じられ、また制限されてきたことを乗り越えようとする人類の欲望の追求に原因が見られるようだ。

生命倫理と環境問題の根源は、人類の欲望の追求、見方によっては欲望の過度な追求によるものであると言える。人間は、これまで長くて 100 歳ぐらいで死ぬものであり、子どもは天からの授かりものであると考え、食事は腹八分目で満足するようにしつけられてきた。宗教の教えを中心に、欲望の制限を守ってきたが、科学技術が発達し、民主主義に基づく個人の権利意識が拡大することにより、足元を見ることなく、すべての病気を治し、200 歳まで生きようとする欲望が先に立ってきた。明日は今日より必ず良くなると信じ、無限の発展を夢見るようになった。進歩発展を否定するわけではないが、足元がおぼつかないままでの進歩発展はいずれ崩れていくであろう。現代の人類の危うさがそこにある。

人間とは何か。人類の行く道はどの方向なのか。人と自然との関係をもう一度見直す必要があるようだ。私たちは今、人類と宇宙をも含めた自然との関係について真剣に向き合う時期にきているのではないだろうか。

現代は「環境革命の時代」[8]と呼ばれるように、人類史上まれに見る変革の時代であり、これまでとはかなり異なる考え方が必要になると思われる。哲学を育てたヨーロッパの思想、プラグマティズムが主流のアメリカの思想、インド、中国や日本の思想、様々な宗教など世界の多様なものの考え方をぶつけ合い、議論し合う場が今こそ必要なのである。現代の限られた考え方だけでなく、古くからの思想もすべてテーブルに広げ、ニュートラルな姿勢で議論を始めることが求められているのではないか。

私たち人類は、まだしばらくの間、地球以外の星に住むことはできない。であれば、地球のキャパシティと人間の欲望とのバランスを考え始めなくてはならない。人類のあり方

7　加藤尚武(1996)『現代を読み解く倫理学』，丸善ライブラリー, PP.209 - 222

8　伊東俊太郎(2002)「環境と文明について考える」,『環境革命の時代』，地球環境戦略研究機関, PP.20-30

を環境的制約の中から考え直す努力を重ねることが喫緊の課題であり、私たちはこうした作業を急がねばならない。

根底にあるものは、人間と自然との関係について冷徹な目で見つめ直すことだろう。それには自然にじかに接することが最も効果的であり、自然の中に身を置いて自然からのメッセージを真摯に受け止められる能力を養う必要がある。自然の一部としての人間を明確に認識できなければ、自然を無視して走り過ぎてきた人類の進行方向を変えることはできないだろうし、現代の諸課題に対応できないはずである。自然学校の使命は人々を自然の中に置くことであり、人間と自然について誰もが考え直すきっかけを与えることである。そこに、自然学校の現代的な意味がある。

2. 大人にも子どもにも自然体験が必要な時代

明治以来の日本は常に、「欧米に追い付き追い越せ」を合言葉に走ってきた。目標は欧米であり、欧米を目指して走ってきた。しかし、今では既に日本はフロントラインに立っている。日本人は、「フロントラインに位置している」という事実を認識しなければならない。現代の日本には、国際社会の第一線で貢献できる人材を輩出する義務が生じているのである[9]。チャレンジ精神に富み、クリエイティブな人材を育成する必要がある。

しかしながら、戦後日本は経済至上主義に近い形で発展してきた。お金の追及に焦点を当ててきたと言っても過言ではないだろう。急激な経済発展を支えることに重きを置いた教育システムにより、教養や人格についての基本的な教育がおろそかにされていた面がある。その結果、人に使われやすい人間、指示待ち人間が増え、先駆的事業に踏み込む若者や難題に挑戦する人が少なくなっていることが指摘され始めている。

例えば、一流大学と言われるA大学の入学生の7割が、さらに難関のB大学に入れなかった学生であり、そのほとんどがB大学へのコンプレックスに悩まされているという。これは当事者のA大学のトップによる中央教育審議会での発言だが、そのような景色からは、創造性も挑戦する気概もまったく感じられない。残念ながらこうした現代日本の教育システムでは、世界の第一線で活躍する人材を輩出するのは難しい。

自然学校にはこうした教育の欠陥を、たとえ一部でも、是正できる要素がある。自然の不思議、美しさ、人間の矮小さなどを実感し、自然に触れてみて初めて分かることを教えることができる。人間としての基本的なたたずまい、生き方などについて自主的な判断を鍛えることができる[10]。

アメリカ・ワイオミング州の自然学校 Teton Science Schools には Journey School という付属学校がある[11]。小学校から高校までの小さな私立学校である。授業はすべて自然をお手本にして行われている。教室から出て、野外での授業を重視する。アメリカの一般的

---

9 小宮山宏(2007) 『課題先進国・日本』中央公論社, PP.37-53

10 R. Louv, “Last Child in the Woods” 『あなたの子どもには自然が足りない(春日井晶子訳)』(2006),早川書房, PP.93-108

11 ホームページ www.tetonscience.org/

な教育では到底及ばないコンセプトで子どもたちを育てている。ここを卒業した生徒たちはいわゆる有名大学に進学し、アメリカのリーダー層に食い込みつつあるという。こういった役割が日本の自然学校にも求められる日が遠からず来ると思われる。

一方、大人の自然体験である。戦後の高度経済成長時代に育ち、もしくは働いた世代は滅私奉公といった形で働き続け、国家の発展に貢献してきた世代だが、生活に時間的な余裕がなく、次々に現れる目先の重要事項に全力をつぎ込むという生き方をしてきた。そこには人としての生きる意味などについて深く考える機会が少なかった。そんな余裕はなかった。そういった方々が現在、自らの生き方に疑問を持ったり、新たな自分を探そうとしたりするのは当然のことである。彼らの年齢や社会的地位を考えると、日本という国の進む方向に大きな影響力を持っている。それだけに、彼らの常識やものの考え方が大変重要になってくる。落ち着いて、日本や国際社会、もしくは地域社会の将来を考えてもらうためにも、自然との触れ合いが重要になると思われる。

自然に身をさらすことは、日常生活から脱却し、普段とは全く異なる状況、すなわち非日常の生活に身を置くことであり、逆に日常の自分の姿が良く見えるようになる。この作業が今の日本の大人に必要なのではないだろうか[12]。

自然学校は、今の日本にとって、子どもにも大人にも必要な存在であるし、社会に大きな役割を果たすことができる存在だと言える。

3. 過疎過密の問題

現代の日本には、少子高齢化、過疎過密、経済格差の広がりなど課題が山積している。中でも過疎過密の問題は深刻である。2014 年に発表された増田レポート[13]が政府に衝撃を与えている。近い将来、限界集落を経て消滅に至る村落が増え、東京など大都市圏に人が流れていくという試算である。だが、ちょっと考えてみれば分かることだが、地方社会が潰れてしまえば、東京も生きてはいけないし、日本という国が存在できなくなるのは明らかである。増田レポートはそのための警鐘なのである。過疎過密の問題は現在の政府が第一に取り組むべき課題であることは言うまでもない。江戸時代のように、山にも里にもバランスの取れた人員配置が必要となってくるのは当然として、どのように実行していくのか、誰も示せないでいる。

過疎地域に移住する場合の税の軽減や医療費、教育費の補填もしくは無償化、都市と過疎地域の交流促進のための費用に対する税の控除など、思い切った政策が求められているはずなのだが、政府は予算配分を多少増やす程度の作業でしか対応していない。現在の政治から、またそれを支える官僚集団からは未だ新たな知恵がなかなか出てこない。

こうした状況の中で、自然学校は自由な発想と行動力をもって新たな過疎対策を生み出

---

12 養老孟司(2003)『一番大事なこと－養老教授の環境論』, 集英社新書, PP.188-196

13 日本創成会議・人口減少問題検討分科会(2006)『成長を続ける２１世紀のために「ストップ少子化・地方元気戦略」』, 日本創成会議

すべきである。自然学校にはその力が潜んでいるはずである。

自然学校は過疎地域のお年寄りと都会の子どもを結びつける。その逆もある。都会の子どもたち、時には大人たちも過疎地域の豊かな自然体験を楽しむと良い。交通が発達し、インターネットが世界を駆け巡る時代にふさわしい新たな解決策、生きる道を探すべきである。ロングトレイルの推進、幼児教育に自然体験を取り入れるなど、誰もが安心して安く手軽に楽しめる自然体験への道を切り開かなくてはならない。その結果、都市と農山漁村との交流が活発になり過疎問題が改善される、という方向性を追及する必要がある。

一方、自然体験をめぐる日本のマーケットは依然、成長途上にあり、成熟には程遠い。欧米で確立されていて日本にはない数少ないマーケットである。これは、ある意味ではチャンスなのだ。日本に自然体験というマーケットを築くチャンスである。ソフトバンクや楽天がインターネットを使った新たなマーケットを切り開いたように、自然学校は、目の前にある大きなチャンスを逃してはならない。

しかしながら、自然が好きで自然学校に携わっている人たちの多くは経営が苦手であり、マーケット論については疎い人が多い。目の前のチャンスが見えないのである。今後は、自然が好きで自然の中に人を誘う人と新たなマーケットを作る人とが役割を分担して事に当たるといった経営形態を創造する必要があるかもしれない。

今後の課題

自然学校はまた、新たな価値観を生み出すべきである。お金だけではない価値観である。第一点で述べたように、地球環境問題に対応するためにも、また、あらゆる旧弊に対抗するためにも新たな価値観を創造しなくてはならない。それがどういったものであるか、次の機会に意見を述べたいと思う。本論では、今後の課題のみを列記しておく。

自然学校の今後の課題

① 自然体験を希望している多くの一般人を取り込めていない。
② ボランティアの活用ができていない。
③ 休日に人が集まり、平日は暇なことが多い。
④ プログラムが子ども中心で、大人向けが貧困。
⑤ 外国人観光客を取り込めていない。
⑥ 安全教育は良いのだが、冒険心を養うようなプログラムが少ない。
⑦ 自然学校の連携が足りない。業界団体が必要。
⑧ 学校との調整が弱い。学校と自然学校とを結ぶコーディネーターが必要。
⑨ 指導者のレベルと範囲を確定するなど、指導者育成システムの整備。

調査報告

米・国立公園局における職員研修システムについて

関　智子（慶應義塾大学特任准教授、安藤百福センター主任研究員）

はじめに

アメリカの国立公園、例えばイエローストーン、ヨセミテ、グランドキャニオンなどは、外国とはいえ日本人にとって親しみやすい存在なのではないだろうか。実際に訪れてみると、雄大な自然環境にまず圧倒され、その中を走る道路や山道、各種施設（ビジター・センター、レジャー、宿泊、ショッピング、レストラン、教育、研究、研修など）の充実に驚かされる。さらに国立公園局や、局と連携する民間団体が提供しているバラエティに富んだ自然科学や歴史を語るプログラムの数々に、子どもから大人まで大勢の人が気軽に参加している様子を目の当たりにする。日本人としては、軽いカルチャー・ショックを受ける。こういった舞台裏で、自然環境の保護や保全、安全と美しい景観を保持するために、国を挙げて大勢の職員が働いている。

アメリカは、世界で初めて「国立公園」という考え方を生み出し、その存在意義を世界中に伝え広めてきた。国立公園の形成には、白人とアメリカ先住民の間の土地を巡る争いの歴史をはじめ、複雑な事情を抱えながら発展してきたプロセスがあるが、2015 年 3 月時点で米国政府・内務省国立公園局（National Park Service、以下、NPS）は、全米 407 ユニット[1]を管轄し、年間延べ 2 億 5 千万人以上のビジターを迎えている。紛れもなくアメリカの象徴的な一側面であり、国民の精神性に深く根づいている文化と言える。

本稿では、わが国における自然体験活動指導者養成への 1 つの参考情報として、上記 NPS における指導者養成システムの骨格といくつかの要点について報告を行いたい。膨大なシステムであるが故に、日本ではその存在を知られていたものの、詳しい内容についてはあまり伝えられていなかった。そこで筆者のこれまでの研究から[2] 1)ビジターのニーズに応じて導く役割にあるインタープリターの養成、2)所長をはじめとする管理者の養成の 2 点について紹介する。

筆者はこれまで 2012 年から 2014 年にかけて計 3 回、アメリカでのフィールド調査を行い、職員研修システムの構造、内容、そして NPS が外部機関と連携して行っている研修事例について、視察、関係者へのヒアリング、文献およびウェブサイト情報の調査を行ってきた。ヒアリングは、ワシントン D.C.に位置する NPS 本部、ウエストヴァージニア州の NPS 研修施設マザー・トレーニング・センター（Stephen T. Mather Training Center）、アリゾナ州 NPS

---

[1] 407 ユニットには、国立公園のような自然遺産だけではなく、文化遺産、歴史遺産、河川、ランドマーク、トレイルなどが含まれる。

[2] 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター（2015）『アメリカ合衆国における政府主導の職員研修システムに関する調査報告書　――内務省・国立公園局を事例として』国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター.（詳細は http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/97/ を参照）

研修施設オルブライト・トレーニング・センター（Horace M. Albright Training Center）などで実施した。

米・国立公園局

NPS の使命は、「人々が楽しみ、教育のために用い、感動を受け、そして次の世代に引き継ぐことができるよう、国立公園システムの有する自然および文化資源並びに価値をそのままに保つこと」である。アメリカのみならず世界各地において、自然および文化的な資源の保全および野外レクリエーションから得られる恩恵をより高いものとするために、NPS はボランティアやコンセッショナリー（営業権所有者）、非営利団体、州政府、地方自治体、個人事業団体などとの連携を図りながら運営を行っている。

資料 1　内務省 National Park Service の概要

局　長	Jonathan B. Jarvis　　副局長　Peggy O'Dell　Christina　Goldfuss
管理ユニット数	401 ユニット（2015 年 3 月公表データでは 407 ユニット）
予　算　額	合計 2 兆 8,665 億円 *2,340 億円（2013 年度 24 億ドルをレート 97.5 円で計算）と 国立公園収益 2 兆 6,325 億円（2013 年度 270 億ドルをレート上記同様で計算）
正 職 員 数	約 20,000 人（臨時従業員、季節従業員は別）
ボランティア数	約 246,000 人（約 3,200 人の職員の労働を充当したことに相当する）
ビジター数	2 億 7,400 万人（2013 年） *2 億 8,600 万人（2000 年）　1 億 9,800 万人（1980 年）

（NPS ウェブサイト[3] より　2014 年 4 月 21 日更新データ）

約 20,000 人の正職員を抱える NPS[4] には膨大な数の職種がある。このうち 2015 年 3 月時点で、6,000 人余りはレンジャー（自然保護官）と呼ばれる職員であり、ビジター対象のインタープリテーション・教育をはじめ、トレイル整備、メンテナンス、探索・レスキュー、外来種管理、消防、警察、ビジター管理、資源保護、公園計画、環境保護、廃棄物管理、種の保全などの職務を担っている。これまでに消防士、生物学者、生態学者、歴史家、博物館の学芸員や建築家などがレンジャーとして採用されている。

ボランティア・システムも確立している。VIP（Volunteer in Parks）と呼ばれるものであり、アメリカ国民だけではなく、諸外国からの参加も受け入れている。これらのボラン

[3] "National Park Service Overview", http://www.nps.gov/news/upload/NPS-Overview-2015-update-2-25.pdf, (参照 2015-02-25)

[4] 日本の国立公園をあずかる環境省自然環境局の正職員は約 200 人。

ティアは NPS 職員に適正であると評価されれば正職員の職域にも参入することができ、例えば、人気の高い花形職のインタープリターとしてビジターを担当することも可能である。このように、ステイタスの高いボランティアによって、NPS の運営は強力に支援されているのである。その一方で NPS は、これらのボランティアの研修や管理能力を向上させることについても配慮している。

NPS 職員研修の構成[5]

1）基本構成について

職員研修システムの中心は、資質向上を目標として構築された伝統ある Learning & Development Training Program（以下、LDP）である。研修全体には「局に携わった初日から退職する日まで、個々の職員の成長を支え続ける」という、NPS の基本スタンスが通底する。LDP では、生涯学習に通じるこういった NPS 独自の価値観を軸に、職域さえも超えた学びのコミュニティ形成が構築され続けている。

職員研修システムの全体構造は次のとおりである。

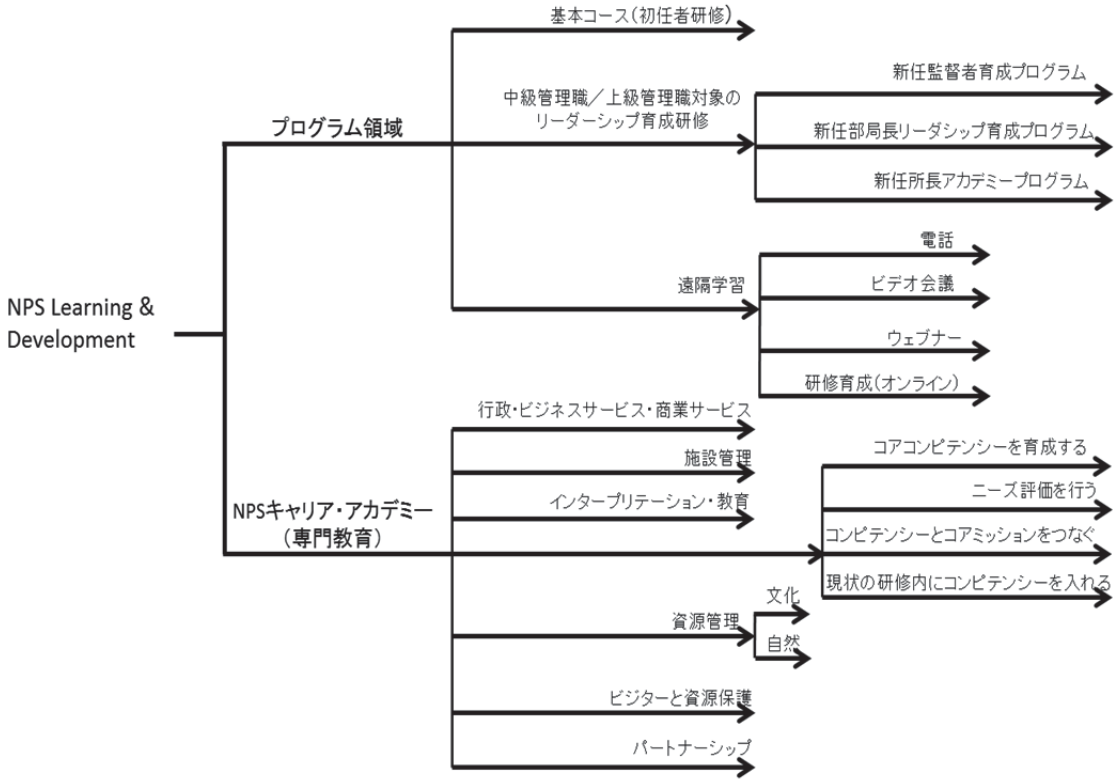


図 1　NPS 職員研修システムの構造

（NPS から提供いただいた資料を基に筆者作成）

[5] “Learning & Development”. National Park Service. http://www.nps.gov/training/LD/html/index.html,（参照 2015-01-31）

LDP は、プログラム領域とキャリア・アカデミーに大きく分かれている。前者はいわば個別テーマに則ったプログラム・コースであるのに対し、後者は専門教育で、大学のように高度専門職を目指す職員のコミュニティ形成が重要視されている。後者は大学のように、高度専門化を目指す職員のコミュニティ形成が重要視されているものである。全職員が受講を義務付けられている初任者研修はプログラム領域に位置づけられており、このほか管理職対象の研修と遠隔学習がプログラム領域に構成されている。一方、NPS における 7 部門の職種について、それぞれの専門課程が設けられている。中でも最も伝統があり発展しているのが、「インタープリテーション＆教育部門」であり、それぞれの段階で修了証明書が発行される仕組みになっている。

NPS 新入職員は、かつて白人、男性、新卒、未婚者というシンプルな属性であったが、近年では人種や民族の多様性、平均年齢 30 歳代、既婚者の増加、などの属性へと変化している。このことからも、NPS 職員としてスタートラインをそろえ、異なる多種多様な人々が構成する職場を秩序立てて形成、運営する上で、新入職員研修の必要性と意義は大変高いものであることがうかがえる。新入職員研修は全職員が受講することになっているが、その後は各自がキャリア計画を作成し、上司に相談しながら必要な研修に参加できるような仕組みが整っている。

現在の職員研修に利用している施設は、他団体所管のものも含め、2015 年 3 月時点で 12 ヶ所あるが、近年は遠隔学習と呼ばれるオンライン上の学習形態が発達したため、従来トレーニング・センターが担っていた部分が軽減される傾向がある。オンラインの学習形態が推進されることについては、賛否両論の意見があったようだが、全米の職員を対象に統一した研修内容をいつでも確実に届けられるメリットがあるため、NPS 内においてもその効果と効率の良さが認められてきたようだ。職場の現実は厳しく、毎日の仕事に追われ思うように研修に参加できない、させてもらえない状況もあるということだが、オンライン学習の整備も含め、自らの意志によってキャリアアップが図れる学びの環境は、NPS において確実に拡充されている。

2）高度専門化が図られるインタープリター養成

近年のインタープリターのトレーニングは、何度も改訂されている。1983 年から 1992 年では、専門の技術チームがプロフェッショナルの水準にある話術を習得し、テーマ、目標、ねらいを効果的に利用できるようインタープリターを訓練してきた。1993 年には大きな変革があり、インタープリテーションのトレーニングとその哲学を再検討した結果、新たに NPS のインタープリティブ育成プログラム（IDP）が開始された。1994 年、『説得力のあるストーリー』という本の中で、新しいタイプのインタープリターが推奨されるようになった。それは、直接的な事実や情報の提供を超えて聴衆を感動させ、目に見える資源の中にある、目に見えない意味を解釈し探究させることができるインタープリターである。1996 年、40 人のインタープリターが、マザー・トレーニング・センターで厳格な査読プ

ログラムの開発に着手し、インタープリテーションのプロフェッショナル・スタンダードを作成し始めた。そして、NPS のインタープリターが提供する本質的なインタープリテーションの内容やサービスについて、統一基準を確立するための基礎を築いた。これらの経過を通じ、インタープリテーションとは「資源固有の関連性や重要性に人々の知的、感情的なつながりを形成する機会をビジターに提供するもの」という考えが確立した。そして、インタープリテーションの 3 つの教義、①資源は存在する意味を持っている、②ビジターは自身のために価値のあるものを求めている、③インタープリテーションはビジターの関心を啓発し、資源の意味とのつながりを考えさせる――が定義された。2003 年、IDP の理論と教義は、『意義のあるインタープリテーション：場所、対象物、その他の資源に対し、人々の感性をどのようにつなげるのか』として公表された。2006 年より、IDP はさらに進化し、インディアナ大学と連携したオンラインによる新しいトレーニング・ツール源を開発、現在に至っている。

インタープリテーション・教育キャリアアカデミーでは、フロントラインと呼ばれる現場の前線で活躍するインタープリターを 3 段階のレベル（入門レベル、発展段階レベル、上達したレベル）に分け、これらを習得した者が目指すことができるスペシャリストと言われる専門家や、スーパーバイザー（中級管理職）あるいはチーフ（上級管理職）といったポジションが設置されている（表 1 参照）。

研修風景 1
グランドキャニオン国立公園にて

研修風景 2
オルブライト・トレーニング・センターにて
2 点とも筆者撮影

表１　インタープリター＆教育部門におけるコンピテンシーとトレーニングの要素

		インタープリテーションの基礎	インフォーマルなビジターとの触れ合い	解説に役立つトーク	アクティビティの運営指導	デモンストレーション・図解入りのプログラム	解説に役立つ文書作成	カリキュラムを基盤にしたプログラム	見解を同じくする、解説や教育プログラムから偏見を取り除く	解説に役立つ計画	解説に役立つメディア	インタープリターをトレーニングし、コーチする	資源と研究の連絡	カリキュラムに基づいたサービスの開発	考古学的資源の解説	地球温暖化の解説
フロントライン（現場指導者）	Entry（入門レベル）	○	○	○												
	Developmental（発展段階レベル）	↓	↓	↓	○	○	○	○	○							
	Full performance（上達レベル）	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	○	○	○	○			
専門家	スペシャリスト	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	○	○	○

（NPS ウェブサイト資料を参考に筆者作成）

* ○はトレーニングを受ける必要がある要素。

*↓は修得後にコンピテンシーを維持し、さらに深めていくもの。

3）中・上級管理職対象のリーダーシップ・トレーニング

新任所長アカデミー（NSA）と呼ばれる新任所長を対象とした総合的なリーダーシップ開発プログラムがある。受講者は、12～18 ヵ月の期間にわたり、グループベースの学習に参加することができる。このプログラムでは、各参加者最高 1,500 ドルの教育給付金が利用できる。

NSA には、在宅研修、ウェブ研修、コーチング、個々の給付金、実践コミュニティ[4]がある。在宅研修には、1) NSA オリエンテーション、2)人々をリードする、3)変革をリードする、といった内容を扱っている。ウェブ研修は、新任所長の情報ニーズ、リーダーシップの視点と課題に焦点を当てる。コーチング・セッションでは、人事管理局による評価に基礎を置いて研修が進められている。また、受講する所長には特定領域での訓練のために、給付金が提供される。実践コミュニティでは、彼らの挑戦、展望について協力的に議論し、情報とアイディアを共有するためのプロセスが展開できる仕組みになっている（表 2）。

表 2　2012 年度 NSA プログラム

要素	日時	場所・その他情報
OPM360（多面的な） ストレングス・ディプロイメント・インベントリー	2012 年 1 月 9 日～情報説明（オンラインセミナー） 1 月 9 日～31 日 ── OPM360 オンライン管理 1 月 9 日～20 日──オンライン管理	ウェブサイトでのオンラインセミナー／指示 ──オリエンテーション参加前に完成させなければいけない。 SDI に関する指示の第 2 セット参照
オリエンテーション	2 月 6 日～10 日	ジョージア州アトランタ トレーニングのお知らせとロジスティクス・メモ参照
管理者向けコーチング	オリエンテーション後、出来るだけ早く設定	POC:ステファニー・レオナード コーチングの質問事項に答える必要がある
滞在型セミナー 公共政策管理者研究所	4 月 30 日～5 月 4 日	ワシントン DC : 公共政策管理者研究所、「戦略的コミュニケーション」ワークショップとともに、トレーニ

[4] 自分たちが実践したり学んでいる何かを良くする方法についての関心事や情熱を、定期的に交流し分かち合う人々の集団を意味する。

		ングのお知らせとロジスティクス・メモに従う
「戦略的コミュニケーション」ワークショップ	4 月 26 日～27 日	参加する場合、宿泊は週末に及ぶ
人々を先導（滞在型Ⅰ）	8 月 6 日～10 日	TBD（MWR の可能性もある）
変化をもたらす（滞在型Ⅱ）	12 月 3 日～6 日	TBD（NER の可能性もある）
オンラインセミナー	進行中：スケジュールはウェブサイトに掲載され、進行に関する情報はオリエンテーションにて	POC:ロニー・ロウ トレーニングのお知らせとウェブサイトを参照
教育給付金	1,500 ドル ――プログラムの 18 ヵ月間、いつでも使用できる	トレーニング･マネージャーと連携する
メンタリング	自分で方向を決める――希望があれば、地域がメンターを割り当てる	NSA トレーニング・マネージャーやオリエンテーションにて､ガイダンスが用意される
実践共同体	グループベース、仲間同士の話し合い	テレビ会議を通して､参加者による管理、ガイダンスは NSA トレーニング･マネージャーとオリエンテーションにて
卒業！	2012 年 12 月 7 日 初めての機会 （2013 年 8 月～9 月 TBD）	すべての必要条件を満たした者

おわりに

2014 年に行ったヒアリング調査では、オンライン研修などに生じていた課題をクリアし、2015 年度は新体制で研修運営がなされるようになるとのことであった。今後は、国立公園や自然環境に携わる世界の人々が、NPS 職員研修の内容を学ぶことができるようになるだろう。

この研修システムの調査を通じて痛感したことは、国、民間、大学間の連携が強固で多様であり、柔軟性を持ちながらお互いを活かし合っているということだ。また、国内数万人の職員を対象とした研修体制を発展させ続けているところには、時代の変化に応じながら国立公園の品質を向上させようというアメリカのプライドを感じた。国民から絶大な支持を受ける文化的背景、活動のクオリティを向上させるための仕組み作り、NPS 職員研修の構築過程には、それらの重要なヒントがたくさん明示されている。

（本報告は前任の国立青少年教育振興機構での研究成果を基盤としている）

事　業　報　告

第4回浅間大学院生セミナー

2014 年 5 月 17 日(土)ー5 月 19 日(日)

環境教育や野外教育、自然体験活動など広い意味での「環境」をキーワードとした研究者たちが集まり、研究を通して研鑽と交流を図ることを目的とした第 4 回浅間大学院生セミナーを開催した。内容は教員の講義、大学院生の研究発表・ディスカッション、野外アクティビティなどを主に行い、2 名の大学院生は歴史の深いアメリカの自然学校「ティートン・サイエンス・スクール」に短期留学することができる特典も用意した。

期　日　2014 年 5 月 17 日（土）～5 月 19 日（月）　2 泊 3 日

内　容　1 日目　ティートン･サイエンス･スクール短期留学報告､野外アクティビティ、講義

2 日目　講義、大学院生研究発表、グループ・ディスカッション

3 日目　講義、グループ・ディスカッションおよび全体共有
短期留学派遣者発表

参加者　大学院生 21 名、オブザーバー参加 2 名、教員 6 名、事務局 3 名

参加費　5,000 円（食費、宿泊費込）

参加教員（順不同、敬称略）:

阿部　治（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授）
安藤昭一（千葉大学大学院園芸学研究科教授）
朝岡幸彦（東京農工大学農学研究院教授）
関　智子（国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター主任研究員）
岡島成行（安藤百福センターセンター長）
中村　達（安藤百福センター副センター長）

■セミナーの様子（1 日目）

昨年度派遣者として選ばれた 2 名のうち、石山雄貴さん（東京農工大学大学院）がティートン・サイエンス・スクール短期留学の報告を行った。今回は 2014 年 4 月 14 日～5 月 7 日の約 3 週間。幼稚園の環境教育プログラム体験、現地の大学院生との交流などを通して、ティートンならではの教育の手法を体験してくることができたようだ。

参加者同士のコミュニケーションが図れるよう、野外でのアクティビティを行った。課題をクリアした際には賞賛の声が響いていた。「ヒューマン・チェーン」（左）、狭い足場に乗る「日本列島」（中央）、全員が越えたらクリアの 4mのウォール（右）。

夜は教員の講義。大学院生のうちに学際的なディスカッションにも慣れてもらいたいという話もあり、明日からの研究発表に向けて、気の引き締まる時間となった。

交流会の最中に、ティートン・サイエンス・スクール短期留学報告その②を行った。発表者は田開貫太郎さん（富山県立大学大学院）。石山さんとは違った視点で報告をしてくれた。一緒に留学しても学び、気づきはそれぞれ異なる部分が多かった。

■セミナーの様子（2 日目）

大学院生の研究発表。1 名に付き発表を 10 分、意見交換を 15 分の時間で行った。特に意見交換は例年 5 分前後で設定していたが、異分野研究者からのフィードバックが貴重な発見につながるという意見があったため、少し長めに設定した。結果的にはそれでも足りないほどの意見交換を行うことができた。

今年は2会場に分けて研究発表を行った。事前に大学院生の発表内容をポスターで掲示し、話を聞きたい会場へ移動した（定員あり）。

各発表者に対して、聴講者が前向きな意見や質問を付箋に書き、それを発表者へフィードバック。自身が気づかなかった新たな発見があることを期待したい。

教員の方々からの講義（各 30 分間）も様々な領域からお話しいただいた。環境教育、ESD、ロングトレイル、研究者倫理など、一流の専門家からお話を一度に聞くことができる贅沢な時間となった。

研究発表ポスター。話を聞きたい発表が同じ時間帯になってしまうことも。休憩時間や夜の交流時間で熱心に直接話を聞き出している場面も見られた。こういった情報は、事前に参加者プロフィールの中に盛り込み配布していたので、当日の交流が比較的スムーズだったように感じられた。

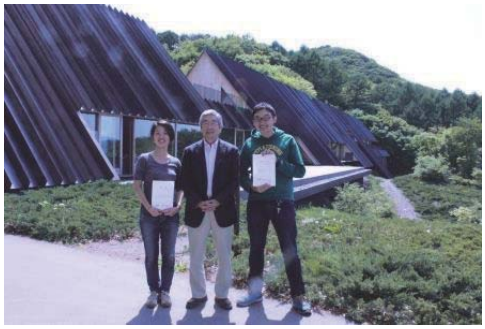
夜は大学院生が進行を務めるグループ・ディスカッション。(1) このセミナーに今後期待すること (2) このメンバーが環境のためにできること、の2点をテーマとしてディスカッションを行った。

■セミナーの様子（3 日目）

最後の講義の後は、昨日のグループ・ディスカッションを全体で共有するための仕上げの時間。それぞれ好きな場所へ移動して行った。新緑の森や雄大な浅間連峰をバックに話し合いが進められた。

最後の発表。これまで思いつかなかった面白いアイデアが続けて出てきた。来年度のセミナーでぜひ採用したいものもあった。プレゼンテーション力も高く、大学院生の力強さを感じることができた。

全体講評の後は安藤百福センターの修了証を授与。とても活気がある 3 日間のセミナーが無事に終了した。これまで以上に交流の輪（参加大学）が広がり、新しいつながりもできた。研究の分野を超えた新たな出会いが、これからの日本の未来を牽引する熱い力になれば、と願うばかりだ。



今回の短期留学派遣者は、辻梨花さん（関西大学大学院修士 2 年）と松岡宏明さん（立教大学大学院修士 1 年）に決定した。アメリカでの学びが実り多きものになることを期待したい。

学生発表要旨

氏名：林　有生
所属：岡山大学大学院　環境生命科学研究科

発表テーマ：
ヒノキ人工林における間伐施業が森林の水土保全機能に及ぼす影響

概要：
日本の森林の 40%は針葉樹の人工林であり、その多くは利用可能な時期に達している。既往の研究から、これら人工林では、間伐などの保育管理が適切に行われなければ森林の有する公益的機能が十分に発揮されないことが知られており、表土流出による災害発生の危険性も懸念されている。一方、材価低迷と伐木搬出コストの高騰による採算性の悪化から、近年では間伐を実施しても伐木を林内に放置する「切捨間伐」も多く存在する。しかし、このような切捨間伐が、森林の公益的機能に及ぼす影響に関する知見は乏しい。そこで間伐方法の違いが人工林の表土移動と養分損失に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。調査は岡山県津山市加茂町黒木地区の 34 年生ヒノキ人工林内で行った。2012 年 11 月に立木の 33.7%を間伐したのち、伐木搬出を行う間伐区と伐木を林内に放置する切捨区を設定し、それぞれの試験区において落葉落枝による有機物還元量と、地表流の発生に伴う林床有機物や表土の移動を明らかにするため、リター・トラップと自作の採取装置を設置した。また、同一林分内に人為的攪乱を加えない対象区を設け、放置区とした。各試験区で回収した表土および有機物はヒノキ落葉、その他有機物、礫（φ≧2.0 ㎜）および細土に区分して乾重を測定したのち、主要な養分元素の含有率測定に使用した。1 年分のデータから得た結果と考察、今後の展望を述べる。

氏名：清水 美貴
所属：金沢大学大学院　国際学専攻

発表テーマ：
〈場所の感覚 〉を再考する　――T.T.ウィリアムスの作品を事例に――

概要：
環境文学研究では、「場所の感覚」をキーワードに、人と環境との関係性を考察してきた。この「場所の感覚」は定住やローカリズムによる人と場所との密接な関係性を意味するものであり、移動社会、グローバリズムの現代社会には通用しなくなりつつある。本発表では、定住志向の「場所の感覚」を、アメリカン・ネイチャー・ライター、テリー・テンペスト・ウィリアムスの作品を事例に再考し、現代の移動社会に適合し得る人と場所の新たな関係性を明らかにする。

氏名：辻　梨花
所属：関西大学大学院　文学研究科英米文化専修

発表テーマ：
An Ethics-Based Approach to Environmental Education

概要：

環境倫理・哲学を主に研究してきたからこそ起こった 2 つの自問。一つは「しぜん」ってなに？ということ。もう一つは theory and practice。様々な環境倫理・哲学で取り上げられる“nature”と“humanity”という言葉を取り巻く概念、価値観、またその関係性は、環境問題と深く関わり、切っても切り離せないものである。その中で、一つ目の自問「しぜん」という言葉は、西洋の nature、また元々日本語である「自然な」という形容動詞・副詞が合わさって生まれた「自然」名詞である。そもそもの“nature”という言葉の持つ曖昧さの影響と、西洋的な価値観に大いに影響されている現代日本では、この言葉が生み出す新たな問題に向き合う必要があるのではないだろうか。また、2 つ目の自問 theory and practice で、環境倫理・哲学の研究を自分ならどのように実践的なものにできるかと考えた結果、An Ethics-Based Approach to Environmental Education というものを構想した。これは、環境問題を取り巻く、そもそもの倫理的価値観や情報に、critical thinking できるようになることを目標とした、考えるということを中心に行う環境教育である。この構想を基に、実際にプロジェクトを立ち上げ、「しぜんってなに？」という授業を作成し、行った。今発表では、これら上記のことに加え、このプロジェクトの具体的な内容についても紹介する。

氏名：南里　翔平
所属：首都大学東京大学院　都市環境科学研究科
　　地理環境科学域　地形・地質学研究室

発表テーマ：
地質学におけるフィールド・ワークの重要性
――伊豆諸島三宅島での地質調査――

概要：

地質学は、国内の資源を調べる目的で発展してきた。最近では堆積物に残っている様々な地質の記録を利用して土地の成り立ちを調べ、防災などに活かされている。卒業研究では三宅島で地質調査を行った。島内でこれまでほとんど研究者が歩いていなかった地域を調査し、黒い石を噴出するとして知られている三宅島で、白い軽石を追いかけた。観察をする崖のことを露頭というが、現地に通い詰めるとある時「露頭が教えてくれる」感覚に出会うことがある。そういう感覚を、これから教員として、中学生・高校生に伝えていきたいと考えている。

氏名：Milovidova Anastasia（ロシア出身）
所属：上智大学大学院　地球環境学研究科

発表テーマ：
持続可能な都市開発
――先進国と途上国における都市環境と持続可能性の指標――

概要：

現在、都市化は著しい成長率で進み、2050 年までに世界人口の 80%は都市に住居することになると予測されている。都市化に伴う環境への悪影響を抑えるために、巧みな都市計画・経営が必要とされており、都市計画の目標設定と進捗測定の道具としては評価システムが必要である。途上国の都市化は特に急速であり、環境への負担が増えていく。途上国と先進国のまちづくり経験・知識交換をより効率的に促進するため、共通の指標が重要であるが、今までは両方に適応しながら環境パフォーマンスを全面的に評価する指標群は存在していない。当研究の目標は、途上国と先進国が共有している都市の環境問題を見つけ出す上に、それらを測定するため、指標に基づく評価システムを提案するものである。特に、GIS を活用するコンパクトシティーの指標、都市の生物多様性の指標と、環境とクオリティー・オブ・ライフを関連する指標に着目するつもりである。

氏名：安田　知理
所属：千葉大学大学院　園芸学研究科
　　緑地環境学領域　緑地環境管理学研究室

発表テーマ：
森林環境税による森林空間のマネジメントの効果と課題

概要：

近年、林業の衰退や里山の放棄により、日本各地で森林の荒廃が問題となっている。そのような中、新たな森林の管理方法として導入が進んでいるのが、森林環境税である。森林環境税は県単位で新たに導入される税金で、この税金を財源として森林や自然環境を保全するための事業を行っている。2013 年 6 月時点では 33 県が導入しており、全国に広がっている制度である。事業内容は、森林所有者に代って県が森林整備を行うハード面からの事業や、環境教育に関するイベントを行うソフト面からの事業など、県ごとに決められている。私の研究では、人口と森林面積に着目して、兵庫県、神奈川県、秋田県、愛知県をケース・スタディとして取り上げて研究を行っている。研究では、事業内容と事業対象地・実施地の特性、事業の運用実態に関する分析を行った。その結果、①森林環境税の導入後、環境面を重視する空間と経済面を重視する空間に森林空間が分けられ、また、空間の管理主体が誰なのかが明確化さ

れたこと、②税金で森林管理を代行することで、林業のモチベーションを低下させる可能性が存在すること、③私有地が主な事業地であり、事業運用には地権者の理解が重要であること、④事業評価方法が未確立な状況であり、事業実施効果が明示されないまま事業が広がってしまっていることが分かった。

氏名：近藤 隼人
所属：千葉大学大学院 園芸学研究科

発表テーマ：
工場緑地の公開と管理運営の手法に関する研究

概要：
昨今の工場緑地の整備は、維持管理の質の向上や地域住民の利用等の観点からの見直しが進んでいる。都市公園整備が困難になりつつある中で、緑のまちづくりを推進し、地域社会のさらなる発展を図るためには、工場の緑地の公開と適切な管理運営のあり方を検討する必要がある。そこで、本研究では工場緑地の公開と管理運営の手法について、公開の形式に差異が見られた2つのケース・スタディを設定し、整備と公開の実態、公開を前提にした管理運営の実態、工場緑地の運営担当者等の認識から、工場緑地の公開の意義や管理運営に関わる課題について考察した。結果として、企業目線での工場緑地の公開の意義、環境教育の場としての工場緑地がもたらす効果、継続的な工場緑地の公開と管理運営のための方策が把握された。

氏名：阿部 真梨
所属：千葉大学大学院 園芸学研究科 生態遺伝学研究室

発表テーマ：
カシ類の保全に向けた遺伝学的研究

概要：
日本国内に分布しているカシ類（アカガシ亜属）の保全のための基礎研究を行っている。カシ類は関東以南から中国・韓国南部にかけて広がる樹林帯の主要な構成要素で、頻繁に種間交雑することが広く知られており、雑種が多く確認されている。近年、緑化目的等により各地で移植されているが、地域ごとの特徴が考慮されないことが多く、種間交雑による遺伝的多様性の喪失、さらには絶滅の危険が問題視されている。
これらの問題を解決するために、カシ類の交雑状況および地域間の特徴の解明を目指して、各地で採集したサンプルを DNA レベルで分析している。

氏名：佐藤　冬果
所属：筑波大学大学院　人間総合科学研究科体育学専攻
　　野外運動研究室

発表テーマ：
南会津アドベンチャー・キャンプの実践と地域連携の可能性

概要：

社会の変化の中で、子どもたちの直接体験の機会が減少し、多様な体験活動の充実が求められる中、平成 25 年「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」が取りまとめられた。そこでは体験活動の意義や効果に加え、体験活動推進の重要性に触れ、「社会全体として体験活動を推進していくためには、国や地方公共団体のほか、地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要である」と述べられている。教育キャンプを運営するわれわれ事業体と地域の効果的な連携関係は、地域資源を活用したプログラムを可能にし、キャンプ・プログラムの質的な充実につながる。それは体験活動推進のための大きな原動力となる。

また、地域と連携した事業展開は、地域活性化の視点でも重要であると言える。平成 22 年「地域力創造に関する有識者会議」（総務省）において、同じような経済的条件、自然的条件下にあって活性化している地域とそうでない地域の差を生じさせている大きな要因として「人材力」が指摘され、地域内外の人材交流や、地域外の団体、つまり「ヨソモノ」の積極的な活用などが人材力活性化の手段として挙げられている。キャンプ事業の開催は、スタッフや参加者などの人材交流を伴うため、非常に有効な人材力活性化の手段である。

このように、地域と連携した事業展開は、「体験活動の推進」や「キャンプ・プログラムの質的な充実」だけでなく、「地域活性化」の可能性もはらんでいると言えるだろう。以上を踏まえ、プログラム・ディレクターとして企画・運営した「南会津アドベンチャー・キャンプ」の実践と事業評価、そして、地域連携の実態を発表する。

氏名：黄　衛鋒（中国出身）
所属：東京農工大学大学院

発表テーマ：
コウノトリ野生復帰事業における持続可能な地域づくりとしての環境教育の成果と課題

概要：

コウノトリは、食物連鎖の頂点に位置する大型の肉食性の鳥であり、日本では、里地・里山を生息地として、水田の生態システムを利用し、水田内の魚類を主な餌にしている「里の鳥」と言

える。第 2 次大戦中には営巣木であるマツの伐採、戦後には土地改良や河川改修による生息地の減少と環境の悪化、有機水銀を含む農薬の使用による餌生物の減少などの原因によって、最後の野生コウノトリが 1971 年に日本の空から消えた。本研究の目的は、豊岡市のコウノトリ野生復帰事業における持続可能な地域づくりの上で、環境教育が果たす役割やその成果と課題を明らかにすることである。

氏名：迫　愛弓
所属：東京農工大学大学院 農学府 共生持続社会学専攻

発表テーマ：
日本企業の CSR における ESD の可能性について
～損保ジャパン・電源開発株式会社の活動を事例に～

概要：

企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility）の概念が誕生したのは、1920 年代に遡ることができる。社会の発展に伴い、それぞれの時代における社会からの要請の変化によって、そのあり方は形を変え続けている。

現代の日本においては、安全や品質に関する企業の不祥事の頻発や地球環境問題への対策等の面で、企業の社会的責任が問われる場面が増えてきた。しかし、前述したような特性から、その定義に関しては曖昧な点が多く、企業自身も取り組むべき姿勢はバラバラであるという現状がある。

「持続可能な社会」という考え方が叫ばれる今日、学校や自治体といった枠組みだけでなく、社会を経済的な面で大きく支えている企業内においても、ESD の視点が導入されることが、持続可能な社会を実現していくために必要不可欠ではないか。

導入に向けての課題および日本企業で行われている ESD 実践事例からその可能性について述べる。

氏名：黄　靖靖（中国出身）
所属：東京農工大学大学院農学府
　　共生持続社会学専攻　環境教育学研究室

発表テーマ：
小学校における環境教育
――総合的な学習の時間を生かしてアプローチする――

概要：

平成 10 年の学習指導要領の改訂において、総合的な学習の時間は創設された。総合的な学習の時間を創設する趣旨は、各学校が地域や学校、児童の状態等に応じ、横断的・総合的

な学習など創意工夫を生かした教育活動を行うことにある。総合的な学習の時間は、環境教育を進めるために創設されたわけではないが、これは環境教育もしくは環境学習の推進にとっては好機だ、と考えている研究者や専門家は少なくない。

そもそも環境や環境問題は、元来、学際的・総合的な特性を持つから、数多くの教科等で別々に扱われるだけでは、環境教育の目標を実に限定的にしか達成し得ない。ある程度のまとまった時間が確保でき、しかも小学校から高校まで実施可能となれば、環境教育の進展が大いに期待できると鶴岡義彦先生が言及した。鶴岡先生がおっしゃったとおりに、私は、総合的な学習の時間の創設は、環境教育の新たな展開と学校教育での位置づけの確立が期待されると思っている。

氏名：柄　晃裕
所属：東京農工大学大学院　農学府
　　共生持続社会学専攻　環境教育学研究室

発表テーマ：
日本流ロングトレイルの誕生と環境教育の可能性

概要：

近年、日本のアウトドアの分野で「ロングトレイル」運動が注目されている。ロングトレイルとは長距離の歩くための道であり、現在、観光活性化等に向けて、この道を活用して地域づくりにつなげていこうとする運動が全国で展開されている。2011 年 7 月には日本ロングトレイル協議会という全国的な組織が創られ、日本のロングトレイルの普及に向けて活動している。このロングトレイルには、以下の 2 点において環境教育との関わりが予想される。まず、自然の豊かな場所を通る歩道の利用には、自然を理解するための環境教育的な役割が示唆されており、ロングトレイルの歩行も自然体験的な機能を持ち得る。また、ロングトレイル運動は観光活性化に基づくまちづくりの 1 つとしても捉えることが可能であると考えられ、その過程で地域に関する学びが行われる可能性がある。そこで本研究では、日本におけるロングトレイルに関する取り組みを「日本流ロングトレイル」として概念づけるとともに、環境教育の役割を考察することを目的とした。日本においてロングトレイルは「観光資源を創出したい」などの地域の課題を解決しようとする思いをきっかけに始められた。ロングトレイルの開設・運営では、あるテーマの下に地域の自然や歴史、文化といった魅力が取り上げられる。ロングトレイルに関する活動を通じて、これらの魅力が協力者や地域住民、さらにはロングトレイルの歩行者にも伝えられていく構図が考察された。

氏名：石山 雄貴
所属：東京農工大学大学院 農林共生社会科学専攻

発表テーマ：
被災地における環境教育に与える東日本大震災の影響に関する研究

概要：
東日本大震災は、環境教育に大きな衝撃をもたらし、その問い直しを求めた。大規模災害の場合、自然現象の後、破壊された地域からの復興が地域には突きつけられるため、それは「人－自然」の関係だけではなく「人－社会」の関係性までも捉え直す必要がある。現在、「創造的復興」と呼ばれる外発的な復興がなされつつある中で、被災地では住民が主体となる内発的な復興が求められている。従来から地域づくりとして行われていた環境教育は、内発的な復興において役割を持つ可能性がある。だが、内発的な復興のための教育の場合、自然現象そのものだけでなく、被災地を取り巻く状況や急激に過疎化する状況など、社会的な視点や政治的な視点、経済的な視点が必要になる。したがって、環境教育実践から地域の持続可能性をも視野に入れる ESD として展開せざるを得ない。また、被災地における地域づくりを考えた場合、内発的な復興は避けられない地域課題であろう。つまり、被災地において被災前から行われていた地域づくりとしての環境教育実践は、ESD としての展開を求められるのである。
そこで本研究では、被災前から行われてきた環境教育実践に注目し、その主体による地域づくりとしての環境教育実践が ESD 実践としてどのように変化したのか、その過程を明らかにすることを目的とする。それにより、東日本大震災が被災地における地域づくりの環境教育にどのような影響をもたらしたのか、明らかにしていきたいと考えている。

氏名：田開 寛太郎
所属：富山県立大学大学院 工学研究科
環境工学専攻 博士前期課程 2 年

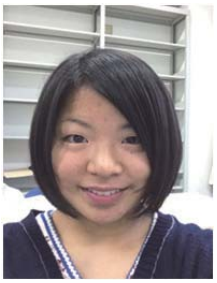
発表テーマ：
新たな地域協働の可能性に関する一考察
――域学連携の事例研究――

概要：
少子高齢化、防災・防犯、過疎化など、近年の様々な社会問題の深刻化などに伴って、日本の社会は多くの課題に直面しており、かつては行政や市民によって担われていた活動領域が、市民と行政といった単体もしくは二者間では解決が難しく、独自にまったく新しい活動領域の創発が必要となる。
そこで、ユネスコ世界文化遺産・五箇山合掌造り集落を研究対象とし、3 つの時代背景にお

ける五箇山の地域協働が、地域課題解決に向けてどのように機能してきたかを分析・考察することによって、現代における地域課題解決の新しいあり方を論じることを目的とするものである。本研究のアプローチは、(1)五箇山の概要、五箇山における地域課題事例を取り上げる。(2)その事例に対して、第 1 期から第 3 期において、五箇山における協働取組について、書籍といった二次資料を使い、分析を踏まえ考察を行う。(3)五箇山における具体的取組事例――総務省事業の域学連携を取り上げ、新たな地域協働の方向性を論じる。

また、域学連携の取組内容と大学生における学習を評価し、考察することで、現代社会における新たな地域協働のあり方を導くにあたり、有用な示唆を得られることが期待される。

氏名：津々木　健香
所属：びわこ成蹊スポーツ大学大学院



発表テーマ：
冒険教育プログラムを体験した大学生のアサーション行動に関する研究
～小集団への適応感に着目して～

概要：

冒険教育プログラムでは、活動をともにする小集団において、アサーティブな関わりが必要とされる。また筆者は、小集団への適応感とアサーション行動には関連があるのではないかと考える。そこで本研究では、冒険教育プログラムを体験した大学生のアサーション行動の変容を、小集団への適応感に着目して明らかにすることを目的とする。

B 大学野外スポーツコース専門実習に参加した 3・4 年次生（男子 17 名、女子 10 名）計 27 名を対象とし、アンケート調査を行った。調査用紙については、予備調査にて作成した、アグレッシブ、ノン・アサーティブ、アサーティブ（以下各 AG、NA、AS）の 3 因子 20 項目からなる簡易版青年用アサーション行動尺度、4 因子 29 項目からなる大学生用適応感尺度、実習中の振り返りシートを用いた。

結果、冒険教育プログラムを体験した大学生において、もともと AS 得点の低い人のみが AS 得点が有意に向上し、個人の特性が大きく影響する結果となった。今後の課題としては、個人の特性とアサーション行動との関連を明確にすること、対象者の疲労を考慮し、調査時期を検討することなどが挙げられる。また今回、予備調査にて作成した簡易版アサーション行動尺度においても、冒険教育現場で対象者がより自身の行動をイメージしやすい内容に改善する必要があると考える。

氏名：松岡　宏明

所属：立教大学大学院　異文化コミュニケーション研究科
　　環境コミュニケーション領域

発表テーマ：
観光客に対する環境意識啓発の拠点としてのビジター・センターのあり方

概要：

近年、世界遺産に登録された後に観光客が集中して訪れ、登録地の環境が破壊されているというニュースを耳にする。その中で世界自然遺産や国立公園付近のビジター・センターを観光客に対する意識啓発の拠点とし、成功している事例がある。しかし、日本では観光客がそもそもビジター・センターを訪れるという意識が薄く、ビジター・センターに誘導する仕組みもないのが現状である。そこで、本研究ではビジター・センターを意識啓発の拠点に据えることのメリットや効果を調査し、さらに現状の課題を調べ、拠点性を高めるための方策を提案することを目的とする。また、調査研究地として観光客に対してビジター・センターを使用した意識啓発を行っているハワイ・オアフ島の自然保護区ハナウマ・ベイを設定した。

氏名：唐　燕（中国出身）

所属：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

発表テーマ：
環境コミュニケーションに影響される市民意識

概要：

発展途上国をはじめ、世界では、持続可能な社会を具体化にするために、市民の環境への意識を向上させることが必要である。行政、企業と市民たちの架け橋となっている環境コミュニケーションは、メディアなどを介して双方向性というような特徴があると見られるので、日本における環境教育や環境コミュニケーションのあり方を解明することで、環境コミュニケーションがいかに役割を果たしているかを検討したい。

氏名：笹川　貴吏子
所属：立教大学大学院　異文化コミュニケーション研究科

発表テーマ：
ESD の導入による地域おこしの概念の再構築
～茨城県常陸太田市里美地区での実証実験を通して～

概要：

近年、日本の地域が直面している課題に取り組むべく、政府や自治体、企業といった様々な立場から地域おこし活動が行われている。地域おこし協力隊を例に挙げると、事業が始まった当初の平成 21 年には 89 名だった隊員も、平成 24 年には 978 名に増え、今後も隊員の増加が見込まれている。私は実際に地域おこし協力隊として 3 年間、茨城県常陸太田市里美地区での活動を通して、日本の地域の現状に向き合ってきた。

しかしながら、こうしたローカルな取り組みが全国的に展開されているものの、実際に活動を行っていると、日本の地域という場は私たちの社会からどこか乖離しているような印象を受けることがあり、そのことについて問題意識を抱くようになった。このような乖離を解決するには、まずは地域を広い視野で捉え、関係性を理解していくことが重要なのではないかと考える。

そこで本研究では、その視点を普及させるために、地域おこし活動、特にエコ・ミュージアム活動や地元学における地域資源の利活用を中心とした取り組みに、ESD の価値観を導入することで、地域おこしの意義を再構築するとともに、そこに関わる人々の意識に ESD の価値観が普及する実証実験を行うことを目的としたい。

氏名：浅岡　みどり
所属：立教大学大学院　異文化コミュニケーション研究科

発表テーマ：
大学公開講座における小学生向け園芸・環境教育プログラムの展望と課題

概要：

食料や酸素の供給源としてわれわれの生存に欠かせない植物は、水や土、太陽の力に頼っている。人と植物の関係を理解する上で重要なこのような環境を、「水」「土」「太陽」に分け、園芸的視点からアプローチする小学生向けプログラムを、過去 3 年間に 3 回、大学の公開講座として行ってきた。プログラム構築には、カリフォルニア大学サンタクルーズ校内にある NPO・Life Lab の視察、テキストの翻訳に加えて、日本の専門家からの学びを統合した。プログラムには職員や学生が携わり、体験と交流を通して参加者の親子とともに考え、学んだ。ここではプログラムを振り返り、今後の課題について考察したい。また、今後どのように展開すれば、ESD（持続可能な開発のための教育）プログラムとして位置付けられるかを考えたい。

氏名：加藤　隆之
所属：立教大学大学院　異文化コミュニケーション研究科

発表テーマ：
学校と地域との連携活動による持続可能な社会づくりの推進

概要：
　環境教育のねらいは、持続可能な社会づくりに貢献できる人材の育成であり、2004 年「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」の中に明記されている。環境教育において目指す人間像は、人間と環境との関わりについて正しい認識に立ち、自ら責任ある活動を実践し、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材を育成することである。
　学校と地域が共通の目的の下に活動し、地域の学校として、教育目標の具現化と、学校が地域の核となる地域づくりに貢献できる学校支援コーディネーターの選定方法を、どのようにすると人的環境が効率的に進められるのか。環境問題は目に見えない課題がほとんどで、成果は情報等により人を通して伝わり、見えてくると考える。学校と地域との協力体制構築に向けての架け橋として活躍できる地域の方を学校支援コーディネーターとして、校長はどのような人選基準を設けて、連携活動を達成するのか、調査分析する。

アメリカの環境保護思想と国立公園

―― ティートン・サイエンス・スクールでの インターンを終えて ――

北テキサス大学大学院
哲学・宗教学科　博士課程　辻　梨花

アメリカ・ワイオミング州にあるジャクソンホール空港に降り立った時、初めて全身でウィルダネス（Wilderness：原生自然）という偉大な自然を感じた。この空港はグランドティートン国立公園の中に位置し、白化粧をした美しい壮大な山々を 360 度眺めることができる。環境思想を研究している私にとって、この瞬間は感動そのものであった。今回のインターン先であるティートン・サイエンス・スクール・ケリー校（以下、TSS）も、グランドティートン国立公園の中に位置し、いつでも美しいティートンの風景を味わうことができる。

このような素晴らしい環境の中で、私は 2 週間 TSS のインターンとして、もう一人のインターン生、松岡宏明さん（立教大学大学院）とともに、TSS で行われている環境教育プログラム、リーダーシップ育成プログラム、大学院生プログラムなどに参加させていただき、また、アメリカの環境保護思想や国立公園について、たくさん学ばせていただいた。この報告書では、インターンの活動内容と併せて、新たな発見があったアメリカ環境保護思想に焦点を置くこととする。インターン世話役のジョシュ・クリスマス（以下ファースト・ネームで呼称）さんに、*How does "place" inspire people, and how do peope define "place"?* と一番始めに投げかけられ、*Why internship? What do you want to gain from it?*という会話からオリエンテーションが始まった。この報告書を通して、これらの問いかけに答えられるようにしたい。

ミューリーとグランドティートン国立公園

TSS のケリー校に到着した翌日、ジョシュさんは、まず私たちをキャンパス内にあるミューリー博物館（Murie Museum）に案内してくれた。そこには、マーディー（妻）とオラス（夫）のミューリー夫妻が生涯をかけて集めた、数えきれないほどの数と種類の動物の剥製コレクションが展示されていた。この博物館にあるのは全体の 3 分の 1 というのだから、ミューリー夫妻の努力には頭が下がる。どうしてこの場所が、最初に案内されるような重要な場所なのか？それはミューリー夫妻がアメリカ環境保護運動（1960 年代）で、原生自然保護法

（Wilderness Act、1964 年）を制定するのに多大な貢献をしたからである。アメリカで原生自然と呼ばれる場所が開発されずに今でも存在しているのは、ミューリーのような人たちの努力がなければ、あり得なかったかもしれない。この場所にはミューリーの意思が生きているのである。ミューリー博物館は、TSS で行われている環境教育プログラムの中で必ず訪ねられている。また、ジョシュさんは、*connect people with a "place" through education* と、TSS では人と「場所」（ここではグランドティートン国立公園）をつなげることを大切にしていると仰っていた。ミューリーが愛して、長年住んでいたこの場所と、新たに訪れる人々を、TSS は環境教育を通してつなげているのである。

Leadership と Sterwardship

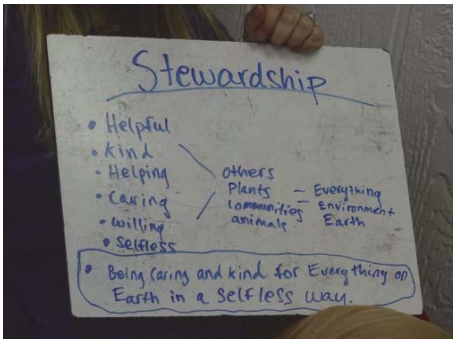
まず、TSS とはどのような学校なのか、端的に説明したい。主な運営として２つのプログラムを持っている。1 つ目は大学院生が行うプログラム。サイエンスを基本とした環境教育（野外教育）指導者を養成するために１年間のコースワークが設けられている。そのコースワークでは、実際に地域の小学校を訪れて授業を行ったり、私たちが参加せてもらったプログラムのように、全米から TSS に短期（5～7 日間、夏は１ヵ月間）で来る小学生から大学生ぐらいの参加生のためのプログラムを、大学院生が自身で準備して行う。この１年のコースワーク修了後は、もう１年をワイオミング大学などの提携している大学に通い、無事に修了できれば教員免許を取得することができる（違う進路を選ぶ院生も多い）。

2 つ目は、野外教育プログラムである。これは多岐にわたり、上記で述べた大学院生が行うプログラムもこの中に含まれている。一般客向けのエコ・ツーリズムも行っている。

私たちのインターン１週目は、ワイオミング州内の小学校 3 校から参加していた、小学校 5～6 年生のグループのプログラムに参加させてもらった。このプログラムは先述のように、大学院生が準備から指導まですべて行っている。大学院生（全員で 20 人未満）が 5 人程度のチームに分かれ、その内の 1 つのチームが今回のプログラムを運営していた。今回のプログラムの学習内容は、ランドスケープ形成（Landscape=Abiotic+Biotic+Cultural）と、そのコミュニティ（生物相）（SCAR: Sagebrush; Conifer; Aspen; Riperian）についてである。様々なアクティビティを通して、また、五感のすべてを使って、これら 2 つのことを 5 日間集中して学ぶ。とても素晴らしい内容であることは言うまでもないが、この手のプログラムは、他でも行われているかもしれない。しかし、テーマ学習と並行して行っているリーダーシップ育成、特にスチュワ

ードシップ（Stewardship）育成は、TSS ならではでないだろうか。むしろこの 2 つがなければ、TSS でのプログラムは成り立たないのかもしれない。

ところで、スチュワードシップという言葉は日本ではまったく馴染みがない。元をたどればキリスト教の聖書に出てくる言葉だが、ここでのスチュワードシップには宗教的要素はない。TSS では、自然環境に対して、またコミュニティ（人間環境含む）に対して自分自身がどのような精神、姿勢であるべきかということを、スチュワードシップという概念を通して伝えている。ここまで説明して、スチュワードシップとは具体的にどういう意味なのかと思われる方も多いと思う。しかし、ここではあえて長々と説明しない。というよりも、日本語での表現が非常に難しい。実際のプログラムでは、大学院生たちが小学校 5〜6 年生の子どもたちに意味を理解させるために、ディスカッションと実際にスチュワードシップ体験（今回はヤナギの植林）を行い、理論と実践両方を通して徐々に理解していくという方法であった。要は、日本語の「おもてなし」という言葉のように、言われただけでは理解が難しく、また、それだけでは理解したと言い難いのである。小学生とのディスカッションを通してみんなでまとめたものは、– *being caring and kind for everything on earth in a selfless way.* ここで重要なのは、selfless という姿勢である。きっと参加した子どもたちは、はっきりと意味が分からなくても、スチュワードシップという精神をこれから少しずつ育てていくのではないだろうか。



なぜ私がこのスチュワードシップ育成に注目したのか。それは、やはり環境問題は私たちの倫理的問題であるという、環境倫理を伴った環境教育の可能性、大切さを再確認し、腑に落ちたからである。サイエンスを基本にした環境教育を行っている TSS で、サイエンスだけでは育めない精神——スチュワードシップ育成を粗末にせず、しっかり力を入れているところに深く感銘した。アメリカで研究を続ける新たな意義をもらった気がした。

進化するアメリカ環境保護思想と国立公園

私たちが参加させてもらったもう1つのプログラムがある。それは TSS と国立公園が共同で運営する、マイノリティのラテン系移民の高校生向けに作られた Pura Vita プログラムである。「人種のサラダボール」と言われるアメリカでも、人種間の壁、それに伴う様々な問題がある。なぜそのようなプログラムが作られたのか。それはアメリカの国立公園を訪れる人々は白人が多く、高級なアウトドア用品を身に着けているという事実とイメージが存在し、そこで働くパーク・レンジャーもほとんどが白人なのである。それらの要因がマイノリティを国立公園から遠ざけてしまっている。国立公園が今でも残っているのは、人々がその場所を訪れ、愛し、大切にしてきたからだ。Public（アメリカの人々）の理解なしには存続できないのである。

そこで近年、国立公園が力を入れていることは、社会的マイノリティに国立公園を知ってもらう機会を与えることである。ラテン系の高校生がリーダーシップ育成プログラムを国立公園で経験し、その夏に地元のラテン系小学生などに、今度は自分が先生（リーダー）として国立公園で環境教育を行うのである。このプログラムの目指すところは、やがてより多くのラテン系コミュニティが国立公園を訪れるようになり、相互に理解が深まっていくことである。

進化していく国立公園とその思想。その進化には、人々がこの場所（place）を訪れ、国立公園とはそれぞれにとってどのような場所なのか、考える機会が必要なのではないだろうか。初めのジョシュさんの問いかけに戻るが、私自身も実際に国立公園に来る前と後では、ウィルダネスの意味が違っている。そして、もう1つの問い「インターンで何を得たのか」。上記に書かせてもらったすべての内容が、私自身インターンを通して学んだことである。しかし、それとは別に、自分自身のこと、また自分がこれからやっていきたいことについて再発見ができた。それは「子どもが好き」ということ。だから、子どものためになる研究をしていくことである。環境倫理を通して、何か自分が次世代、将来の子どもたちにできることを行いたい――ミューリーがお手本を見せてくれたように。インターンは新しい発見の毎日で、一日一日がとても貴重なもので、また、大自然の中で自分と向き合う特別な時間でもあった。この場を借りて、このようなインターンを実現させてくださった方々、また、アメリカで出会って、私たちを温かく迎えてくださった方々に深く感謝の念をお伝えしたいと思う。ありがとうございました。

浅間大学院生セミナー、インターン・プログラム報告

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科
環境コミュニケーション領域博士前期課程2年　松岡宏明

2014年5月17～19日の3日間行われた安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター主催の「浅間大学院生セミナー」にて、参加大学院生は研究発表を行った。その中から2名が選出され、アメリカ・ワイオミング州のグランドティートン国立公園を拠点とするTeton Science Schools（以下、TSS）へインターンができるというものであった。そして、このたび私たち（辻梨花、松岡宏明）2名を抜擢していただき、TSSでインターンを行えることになった。

インターンの期間は、3月29日から4月17日の約3週間だった。そのうちの2週間がTSSへのインターンで、残りの5日間がフリー・プログラムで、ヨセミテ国立公園を訪れた。いずれの国立公園も、歴史的にも文化的にも日本の国立公園と違った観点を持っていた。活用の仕方もまた異なっており、大変興味深かった。本報告書にて、簡単ではあるがインターン・プログラムとアメリカでの生活について報告したいと思う。

● TSSについて ●

私たちのインターンの受け入れ先であるTSSについて、少し紹介したいと思う。TSSは、アメリカ・ワイオミング州の南西部に位置し、その名のとおりグランドティートン国立公園を主なフィールドとしている。TSSは、Kelly CampusとJackson Campusの2つのキャンパスを有している。ケリー・キャンパス（写真左側）には、大学院生に対する講義や私たちのような研究者や様々な人々を受け入れる宿泊施設（ロッジ）がある。また、グランドティートン国立公園の基礎を築いたMargaret Murieの剥製コレクションを展示しているミューリー博物館もある。ジャクソン・キャンパス（写真右側）は比較的新しいキャンパスで、小学校～高校の校舎が立ち並ぶ。キャンパスには野生動物もしばしば現れ、環境教育には絶好の立地である。

● インターン全日程と概要 ●

3 月 29 日　TSS 到着、ケリー・キャンパス内ツアー
3 月 30 日　グランドティートン国立公園と TSS の歴史とそれらに関わった人々について
3 月 31 日
4 月 1 日　Field Education
4 月 2 日　（ワイオミング州の小学 5 年生に対する環境教育プログラム）
4 月 3 日　ジャクソン・キャンパスツアー、ジャクソンホールの町を観光
4 月 4 日　Wildlife Expedition、Wildlife Museum
4 月 5 日　フリータイム⇒大学院生とハイキング
4 月 6 日　日本食を作って振る舞う⇒すき焼き、浅漬けの特別授業
4 月 7 日　Pura Vida Program
4 月 8 日　（ワイオミング州に住むラテン系アメリカ人に対するリーダーシップ・プロ
4 月 9 日　グラム）
4 月 10 日　大学院生たちとスチュワードシップ、コミュニティについて考える
Pura vida の参加者による Closing celemony（子どもたちがガイド）
4 月 11 日　サンフランシスコへ移動
4 月 12 日　ヨセミテ国立公園へ移動。レンジャーの方に簡単に園内をガイドしてもらう
4 月 13 日　国立公園内ハイキング
4 月 14 日　ヨセミテ国立公園の会議に参加。サンフランシスコへ移動
4 月 15 日　サンフランシスコ観光（2 人は別行動）
4 月 16 日　日本へ移動
4 月 17 日　日本到着（日本時間）

● 主なプログラムの内容 ●

今回のインターンは 2 週間と、例年よりも短い期間であったが、アメリカが考える環境教育やアメリカの国立公園のまさしく“今”を見ることができたと思う。本項では、私たちが受けた主な 3 つのプログラムについて説明したいと思う。

★ Field Education

このプログラムは、アメリカ全土の学校を対象として環境教育を行うものである。主にワイオミング州の学校が TSS のプログラムを受講しに来る。今回は、ワイオミング州の 3 つの小学校が合同で参加していた（参加学年は小学校 5 年生）。プログラムは 3 泊 4 日で行われる（宿泊を伴う）。朝 1〜2 時間のイントロダクションを行い、夕方までフィールドに出て様々なプログラムを受けるというものであった。このプログラムの講師は TSS に所属する大学院生であり、プログラムの内容はもちろんのこと、ルート選択、リスクマネジメントもすべてをこなす。

例）ワイオミングに住む猛禽類について

▼座学で猛禽類についての基礎知識を学ぶ　▼実際に猛禽類の保護施設に行く

★ Wildlife Expedition

Wildlife Expedition は、TSS が運営するエコ・ツーリズム事業である。大きなバン（写真左側）に乗り、ジャクソンホール周辺の野生動物を観察する。対象者は、一般の観光客や地域の住民である。このプログラムの特徴は、ガイド兼インタープリターが生物学者であること。TSS がグランドティートン国立公園に根差し、自然環境を知るための教材として国立公園を活用してきたからこそできる事業であると考える。

▼エコツアー用の大きなバン。ルーフも開閉可能　▼観察の様子

★ Pura Vita Program

Pura Vita Program は、ジャクソンホール周辺に住むラテン系の高校生を対象とした、リーダーシップを育むプログラムである。また、コミュニティの中のリーダーを目指すと同時に Menter（人生の師）になることも視座に入れており、意義のあるプログラムだと思った。このプログラムを通して、ラテン系の人たちがどのような現状に置かれているのかなど、子どもたちの口から語られる場面が多くあり、非常に考えさせられた。また、大

変興味深かった点として、このプログラムの最後に高校生たちがインタープリターになって、私たちを森や川に案内するのだが、このプログラムでは、学習者が教育者になるという二面性を持っており、学び合いの大切さを再確認できた。

▼大学院生による Field Education

▼高校生たちによる Field Education

● まとめ ●

私は国立公園の保護の方法論について研究している。特に、教育を主眼においた地域、観光客、公園スタッフの保護意識の共有方法の効果や意義を探っている。今回のインターンでは、2 つの国立公園を訪れる機会に恵まれ、各国立公園の設立の歴史や文化、主眼に置いている理念、国立公園の活用方法を、国立公園に関わる人々の語りから聞くことができた。例えば、TSS では“Connecting People, Nature, Place through Science, Education”を理念として掲げている。この根幹には、Conservation の視点や Place(Community) Based Education などの考え方がある。これらの理念を見ると、グランドティートン国立公園は、次世代を科学の分野から教育することにより、国立公園内の自然価値の気づきと創造、保護意識の合意形成を助けていると考えられる。また、教育を受けた人々は、国立公園を訪れた観光客をエコツアーや Field Education で教育する。この学び、教育の連鎖がグランドティートン国立公園の強みであり、TSS の効果であると考える。今回のインターンで国立公園の好事例を体感させて頂けたことを心から感謝したいと思う。本当にありがとうございました。

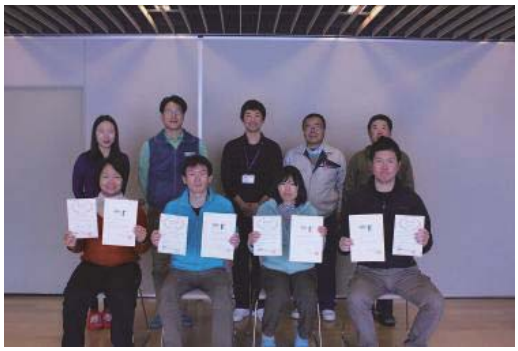
第 15 期自然学校指導者養成講座

2014 年 3 月 28 日ー12 月 21 日

安藤百福センター主催、公益社団法人日本環境教育フォーラム共催で「第 15 期自然学校指導者養成講座」を開催した。これは、様々な自然環境を舞台に活動する自然学校の現場において、即戦力となる人材を育てる講座である。今年で 15 年目を迎えており、これまでに 120 名の修了生を社会に輩出している。15 期は 20〜30 代の男女 4 名が集まった。

この講座は、4〜9 月までの OJT（現場実習）期間と、10〜12 月の座学期間で構成されている。まず、全国各地の自然学校において、現場での指導方法や運営方法を体験しながら学び、実習後は安藤百福センターに活動拠点を移して座学研修を行う。ここで講師陣から幅広い分野を学び、現場で体験したことを知識と関連付けていくことで、指導者としての力をつけていく。

座学研修では、環境教育や野外教育、生態学、環境思想などの基礎科目から、登山やインタープリテーション、プログラム・デザイン、アウトドア・マーケティングといった専門科目を学ぶことができる。また、一定の安全管理スキルを有する証明となるよう MFA（メディック・ファースト・エイド）の講習会も行った。



公益社団法人日本山岳ガイド協会主催の研修会にも参加し、ガイドが備えておくべき安全管理技術も習得。このほか、CONE 全国フォーラムや清里ミーティングといった、すでに業界で活躍している人たちとのネットワークをつなげる機会にも参加した。全国各地から集まった自然学校関係者との交流は、受講生にとって刺激になると同時に、方向性を決める機会となった。15 期の受講生は、全員講座を修了することができ、企業や NPO へ就職している。プロの指導者として新たな一歩を踏み出した彼らの、今後の活躍に期待したい。

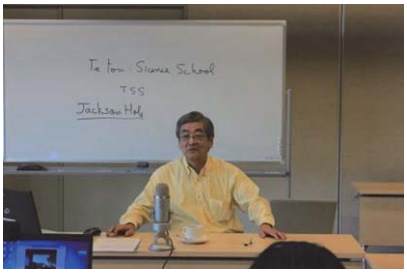
10月7日（火）10時～17時

科目	体験教育論
講師	西田　真哉　（にしだ　しんや）
主な役職	新生会ＨＡＬＣ自然学校校長
テーマ	体験教育論
概要	環境教育活動、野外教育活動における、参加機会と参加者相互の学習の深まりについて、「受講型（受身型）」、「参加型（体験型）」、「参加者主体型」、「参画型」の区分を、体験的に解説して、活動プログラムに「体験学習法」を導入する効果を体得する。
講義風景	

受講生の感想

視覚情報の多い私たち人間でも、見えていないものがたくさんあるということ、グループで見える目の練習をすることによって、様々な見方ができることを学びました。OJT先でトレーニングしてきたつもりでしたが、よく見るという行為が、自分の興味の範囲に収まっていたことに気付かされました。もしかしたら、視覚以外の感覚も使っていない部分が多いのではないでしょうか。それらの感覚を意識して使うことで、生活の豊かさやゆとりにつながるのかな、と感じました。

10月9日（木）10時～17時

科目	自然学校原論
講師	岡島　成行　（おかじま　しげゆき）
主な役職	学校法人青森山田学園理事長、安藤百福センター センター長
テーマ	日本型環境教育と自然学校の役割について学ぶ
概要	・人間と欧米の自然観の違いと、それぞれから学ぶべきこと ・日本固有の文化と環境教育 ・日本型環境教育とは ・21世紀における社会と環境問題 ・自然学校とは何か、なぜ自然学校なのか ・日本の自然学校の今後の展開
講義風景	

受講生の感想

現在の環境教育の成り立ちから取り組みまで、大変濃い内容で講義をいただきました。環境教育という業界は、地球規模の問題を解決する鍵となる大変重要な役割を担っているということ、自分たちが今取り組んでいることは、将来的に大変やりがいがあり、誇りを持てる業界であることを学びました。日本の環境教育の成り立ち、現状、課題、取り巻く環境、将来性についても詳しく学ぶことができ、様々な分野と連携して活動を行っていく必要性を感じました。

10月10日（金）10時～12時

科目	環境思想・環境倫理（AM）
講師	加藤　尚武　（かとう　ひさたけ）
主な役職	京都大学名誉教授、東京大学特任教授、鳥取環境大学名誉学長
テーマ	「自然とは何か――東西の思想をたずねて」
概要	１．「自然」という言葉 ２．自然物には運動・停止の原則 ３．自然（ツーラン） ４．自然（じねん）法爾（ほうに） ５．アリストテレスの自然史 ６．神と自然 ７．イスラムの古典文化 ８．十二世紀ルネサンスの本質 ９．望遠鏡（ガリレオ） １０．蜜蝋のたとえ（デカルト） １１．アリストテレスの自然学の否定 １２．文化と自然 １３．神の自然を感じ取る １４．進化論と自然保護
講義風景	

受講生の感想

自然とは何か、ということを歴史的・宗教学的背景から学んだ。古代より人間にとって自然は探求の対象であり、畏怖すべきものであったが、天動説に象徴されるように時代や宗教の都合により自然の解釈のされ方が違うことが興味深い。現代は地動説や進化論など、自然事象の仕組みはほぼ解き明かされているが、未だに宗教によってすべては受け入れられていない。「何が正しいか」ではなく「何が大事か」である。自然保護についても色々な考え方、やり方があることに気付かされた。

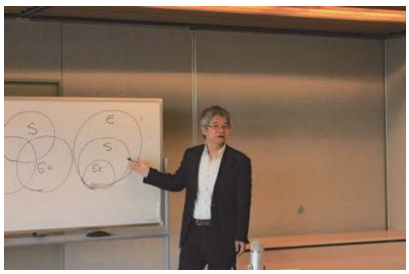
10月10日（金）13時～17時

科目	環境思想・環境倫理（PM）
講師	関　智子　（せき　ともこ）
主な役職	国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター　主任研究員
テーマ	環境思想のルーツに触れる ――江戸期思想家はどのように自然と向き合ったのか
概要	本講座では、環境思想とはどのようなものか、また自然体験活動と環境思想にはどのような関係があるのかについて学習する。さらに環境思想がこれまでに社会に及ぼした影響について、事例を通して考察する。授業の構成は次の通り。 1）講座参加者が自らの自然体験を振り返り、自然と人間の関係についての考えやイメージを語り合うグループディスカッションを行う。 2）江戸期思想家の生き方と考え方を事例とした日本型環境思想のルーツを紹介する。 3）日本の特徴をさらに明確に把握するために、アメリカにおける環境思想の発展経
講義風景	

受講生の感想

江戸時代を例にとり、自然体験になぜ環境思想が必要なのかを学んだ。環境問題がなさそうな江戸時代において、自然保護を訴えた先見の明を持った人たちがいたことを知った。循環型社会が整っていた江戸時代から学ぶことは多く、現代でも実践できそうなことがまだありそうである。自然保護運動をするということは経済派・開発派の人たちと争うことになる可能性もあるということが心に残った。

10月15日（水）10時～17時

科目	環境教育論
講師	阿部　治　（あべ　おさむ）
主な役職	立教大学社会学部教授、日本環境教育学会会長
テーマ	持続可能な社会をめざした環境教育/ESDの現状を知り、今後の課題について考える
概要	1．環境問題の歴史と環境教育の登場 2．世界と日本の環境教育の歩み 3．持続可能な開発（SD）と持続可能な開発のための教育（ESD）の登場 4．多様なステークホルダーによる環境教育/ESDの取り組み 5．自然学校による環境教育/ESDの取り組み 6．地域づくりとしての環境教育/ESD 7．これからの環境教育/ESDの視点
講義風景	

受講生の感想

持続可能な開発というものを考える時に、環境という視点からでは不十分で、経済・社会・政治という視点も含めて考えなければならないという点は勉強になりました。これらの視点の中でも政治が及ぼす影響は大きいということも知っておかないと、政治に振り回される恐れがあるということも再認識しました。また、地域活性化についてのお話も、大変興味深く聞かせていただきました。今度、実際に現地に行って勉強したいと思います。

10月16日（木）10時～17時

科目	日本の火山概論
講師	荒牧　重雄　（あらまき　しげお）
主な役職	東京大学名誉教授、火山学者
テーマ	日本の火山活動について学ぶ
概要	1．浅間山関連の噴出物、地層、構造などを野外で観察・討論 2．火山現象一般の議論 3．噴火作用の各論 4．噴出物、火山体などの各論 5．火山災害の種類と防災・減災の手段 6．火山の恩恵、社会への影響など
講義風景	

受講生の感想

日本の火山について、興味関心をもつきっかけとなる講義でした。千曲川付近まで軽石流を観察しに行き、地図を見ながら立体的に火山の活動と歴史を考えることができました。御嶽山の噴火があったこともあり、火山活動を災害の印象でとらえていましたが、一般的には災害規模の順位は低いことを知り、意外に感じました。現時点では噴火の予知には限界もありますが、自然体験活動の仕事を志すものとして、今できる予防対策を十分に身に付けなければと思いました。

10月17日（金）10時～17時

科目	日本山岳風景論（日本の山はなぜ美しいか）
講師	小泉　武栄　（こいずみ　たけえい）
主な役職	東京学芸大学特任教授
テーマ	日本の山はなぜ美しい
概要	日本の山は世界的にも例がないほど美しいが、その背景には日本の山の自然がきわめて多彩で繊細であるということがあげられる。このことを説明するために、以下のような視点から、山の自然をみていくことにしたい。 1．世界的な視野からみた日本の高山 2．植生の多様性を支える基盤地質と地形 3．地生態学の考えかた 4．火山植生と火山の噴火史 5．各地の事例の紹介 6．ジオパークと世界遺産
講義風景	

受講生の感想

普段何気なく見ている景色がどのようにできたのか。そこには明確な理由があり、それは地質学的であったり植物学的であったりする。景色を見れば、そこの土地がどういう特徴を持っているのか、今後どういう変化をしていくのか分かってしまう点は非常に面白い。今後、自然の中を歩く時はその景色がどのようにできたのだろうと、視点が変わりそうである。

10月20日（月）10時～12時

科目	森林セラピー体験
講師	佐久市森林セラピー推進協議会森林ガイド
主な役職	なし
テーマ	森林セラピー体験
概要	信州の山里を体験する森林セラピー基地「春日の森」ツアー 1．森の案内人（ガイド）付き森林セラピー 2．血圧測定、ストレス度測定（森林セラピー前後各1回）
講義風景	

受講生の感想

半日森をゆっくり散歩しているだけなのですが、五感を使うことでより木の特徴や種類に興味がわきました。ゆっくり散歩をしながらなので、激しい運動にはなりませんし、四季を感じたい、少し外の空気に触れたい人にはぴったりだと思いました。森林セラピー自体は、山に足を踏み入れたことがない人でも、とっつきやすい活動だと思います。自然と親しむ間口を広げるためにも、森林セラピー業界の活発化が大きな課題ではないでしょうか。

10月21日（火）～23日（木）

科目	登山技術
講師	畠山　浩一　（はたけやま　こういち）
主な役職	公益社団法人日本山岳ガイド協会　試験・研修委員会委員長
テーマ	登山技術基礎
概要	21日　机上　登山技術　①山歩きについて　③天気と山のリスク ②計画と準備　④安全管理技術 22日　実習　高峰山登山　湯の丸高原野外泊 23日　実習　安藤百福センター周辺のガイディング
講義風景	

受講生の感想

等高線や地図記号など地図には多くの情報が記されている。それまで意識していなかった地図情報を読み取れるようになり、地図の面白さ、重要さを実感した。先生にとっても初めて歩くコースであったのにも関わらず、植物、地質、地域など、多くのことを解説していただき、その知識の広さ、深さに驚かされた。自分もどの地域へ行っても自然解説できる知識を身に付けたいという意欲がわいた。

10月26日（日）10時～11時30分

科目	人と動物の関係論
講師	松澤　淑美　（まつざわ　よしみ）
主な役職	長野県動物愛護センターふれあい課
テーマ	望ましい人と動物の関係について学ぶ
概要	10時～11時　アニマル・セラピーについてのレクチャー 11時～11時30分　施設内見学
講義風景	

受講生の感想

現代の生活において、犬や猫と生活することに抵抗を感じる人は少なくなってきていると思う。その反面、動物を飼うということに対する責任感が薄れてきているのではないかと感じることがある。人と動物が共生して生きていく社会の中で、癒しだけでなく、真剣にペットと向き合い、考える場所としてもこのような場所が必要だということを再認識することができた。

10月27日（月）10時～17時

科目	生態学概論
講師	北野　日出男　（きたの　ひでお）
主な役職	東京学芸大学名誉教授
テーマ	生態学という学問内容の理解
概要	1．私の研究の紹介（ヤドリバチの生物学） 2．生態学とはどのような学問か 3．生態学的環境観（「環境」概念の考察） 4．生態学の研究分野の概説 5．野外観察実習　など
講義風景	

受講生の感想

先生が昆虫の研究者ということもあり、寄生バチを例にとって説明していただいたが、寄生されるアオムシとの関係性が巧妙かつ絶妙であった。きっと他の生き物たちも驚くべき関係性があり、絶妙なバランスを保っているのだろう。とても奥深く、面白い世界である。しかし、仮に何かの要因で一つの種が滅びてしまうとバランスは崩れ、その種を取り巻く他の種まで危機が及んでしまうという危うさも感じた。

10月28日（火）10時～17時

科目	アウトドアフードコーディネート論
講師	蓮池　陽子　（はすいけ　ようこ）
主な役職	フード・ディレクター（コーディネーター）、料理家
テーマ	アウトドア・フード・クリエイターになる！
概要	アウトドアにおける食（料理の意味） 基本的な料理技術、アウトドアでの料理技術 美味しさの定義を考える アウトドア・フードをクリエイトする（実際に料理をつくる）
講義風景	

受講生の感想

講義テーマは「笑顔になる・記憶に残る・感動する献立を考える！」でした。美味しさを感じる要素、野外料理を美味しくさせる要素、そしてキャンプの献立を考える時に必要な要素を、ワークショップ形式でアイディアを出し合いながら整理することで、相手を幸せにする野外料理について理解を深めることができました。

10月29日（水）10時～17時

科目	野外教育論
講師	星野　敏男　（ほしの　としお）
主な役職	明治大学教授、日本野外教育学会理事長
テーマ	野外教育論
概要	全体の講義を４回に分け、討議を交え、話し合いながら進める。 １．青少年と自然体験活動について（野外教育の意義、現状と課題など） ２．自然体験活動をめぐるさまざまな用語について（野外教育の歴史と背景） ３．自然体験の効果　指導者の役割について（野外教育とその指導） ４．野外教育指導者としてのアウトドア・リスクマネジメントについて
講義風景	

受講生の感想

自然学校ではどういうことを行っていて、そこにどういう目的があるのか、ということは実習期間に学んでくることができましたが、もう一段上から俯瞰して「野外教育」というものについてその歴史や効果、概念の定義を知ることで、体で学んできたことを言語化することができました。体験を言語化して、理論立てて人に説明できるようになるということは、今後、指導者の立場になる際に必ず必要になってくる知識であり、力であると思います。

10月30日（木）10時～17時

科目	環境政策論
講師	中尾　文子　（なかお　ふみこ）
主な役職	環境省自然ふれあい推進室長
テーマ	地球環境の現状と持続可能な社会の構築に向けて
概要	日本の環境政策の概要を話した上で、特に自然環境保全に関する法制度・各種施策について、下記の分野ごとに説明。 ・生物多様性の保全 ・野生生物保護（外来生物対策含む） ・自然公園の保護と利用 ・自然とのふれあい ・自然再生
講義風景	

受講生の感想

国という立場・方向から環境問題に取り組む方法は、今までの講義とはまったく異なり新鮮だった。国際的な議決や法の整備、他の省庁との連携など、取り組み方そのものがまったく自然学校という立場とは異なっていた。国は国で（今回は環境省という立場限定だが）取り組みの方法は違えど、向かう方向は同じであり、協力関係にあると感じた。

10月31日（金）10時～17時

科目	社会構造論
講師	萩原　なつ子　（はぎわら　なつこ）
主な役職	立教大学社会学部教授、NPO法人日本NPOセンター副代表理事
テーマ	人権、環境に配慮した社会の構築に向けて、市民がどのような関わりを持つのかについて理解する
概要	1．被差別者の生活と環境 2．環境に配慮した経済システム 3．環境問題と経済、政策との関わりについて 4．基本的人権としての環境権の保護の理念 5．環境破壊がどのように社会的問題と関わっているか 6．環境問題をフェミニズム/ジェンダーの視点で分析 7．第三世界と第一世界との関係
講義風景	

受講生の感想

エコ・フェミニズム（環境問題を男性と女性の優劣から分析する理論）というものを初めて知った。男性と女性で評価のされ方が違うのは、環境の世界でも同じようである。確かにレイチェル・カーソンをはじめとして、環境問題について世の中に影響を与えた人間には女性が多いが、その当時は世の中に受け入れられなかった。環境問題に限らず、女性は男性よりも社会問題に敏感であるように思う。女性の意見が吸い上げられる環境づくりが必要だと感じた。

11月2日（日）10時～15時

科目	NPO/NGO論
講師	新田　英理子　（にった　えりこ）
主な役職	NPO法人日本NPOセンター事務局長
テーマ	継続的に自立的に活動を推進するための、NPO/NGOのマネジメントと法制度について学ぶ
概要	NPO/NGOと一言でいっても、目的や活動内容の違いによって大きく運営方法が違う。 講義では、ＮＰＯ/NGOのマネジメントやガバナンスのエッセンスを学び、受講生の自然体験活動にどう生かされるのかを議論。 NPO/NGOを取り巻く日本の法制度や税制も大きく変化している中、制度をしっかりと押さえた上で、参加者からの事前リクエストにも応えながら解説を進めた。
講義風景	

受講生の感想

NPOを立ち上げる際、まずどういうところからスタートしていけば良いのか、どういうことを軸に事業を進めていけば良いかなど、様々な不安がある。その相談窓口として日本NPOセンターがあるということを知ることができて良かった。そして、NPOの運営方法や助成金のことなど、これまでの実習期間の中で漠然と知っていたことをきちんと学ぶことができた。また、行政や企業とNPOの違いを説明いただき、今後の参考となった。

11月3日（月）10時～17時

科目	地域学概論
講師	吉兼　秀夫　（よしかね　ひでお）
主な役職	阪南大学国際観光学部国際観光学科教授
テーマ	地域観光の考え方とエコ・ミュージアムの内容を知る
概要	近年の観光動向を「観光における『図と地』論」として理解し、「地」の振興（快適で楽しい地域環境づくり）のための手法の1つとしてエコミュージアムの事例をもとに解説。
講義風景	

受講生の感想

観光が、図の観光から地の観光に移行するにあたり、「その地域特有の『環境に対する作法』がはぐくまれているはず」という先生の言葉は、時代とともに環境教育とこれからの観光が消費者を捉える共通の要素があることを意味している。観光と教育のコラボレーションの可能性を、私はとても興味深く感じた。

11月5日（水）～6日（木）

科目	自然学校の可能性
講師	辻　英之　（つじ　ひでゆき）
会場	ＮＰＯ法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事
テーマ	人口1,800人のへき地山村における自然学校の事例に学ぶ
概要	人口1,８００人の限界自治体とも言うべき小さなへき地山村、長野県泰阜村。その村に、へき地山村に根ざした山村留学や自然体験教育キャンプ等を進めることを通して、「何もない村」における「教育」を産業化させることに成功したNPOがある。 本講義では、27年にわたって展開される教育NPOの事例を基に、自然学校の本質的な役割と可能性について、さらには社会変革に必要な、小さくとも強い意志について議論を深める。
講義風景	

受講生の感想

この研修では、私達がこれからすべきことを練り直したり、方向性を定めるための有意義な時間を過ごすことができました。多くの職員の方とともに「自分が目指す社会」について考え、議論する機会を頂きました。２日間を通して、私達に不足していたアウトプットに重きを置いたワークの中で、それぞれの将来目指す社会とアクション・プランについて整理し、発表とフィードバックの機会に恵まれました。自分の目指す像が、社会の課題解決やニーズと重なる時に、社会的に意義ある活動へつながることを学びました。

11月11日（火）～14日（金）

科目	生き方暮らし方
講師	ホールアース自然学校職員
会場	ホールアース自然学校
テーマ	社会の中での自然学校の可能性を探り、自らの進路について考える
概要	1．オリエンテーション 2．ホールアースの原点「施設整備」と「命をいただく」 3．里山里地の自然学校「ホールアース農場」と「里山論」 4．エコツアー「洞窟樹海体験」 5．「ホールアース自然学校論」 6．「生き方暮らし方」を考える
講義風景	

受講生の感想

一番心に残ったのは、自分たちで鶏をしめて食べる食育体験。自分たち人間が他の生き物の命をもらって生きているということ。理解はしていたことだけど、実際に命を絶ち、食べてみると、その理解の大きさはまるで違ってくる。「いただきます」の言葉は正に「命をいただきます」なのである。ありがとう、という気持ちで食べた。命の重さを知るため、多くの人に体験してもらいたいと思う。自分も体験できて本当に良かった。

11月18日（火）～21日（金）

科目	自然学校運営の基礎
講師	国際自然大学校職員
会場	国際自然大学校日野春研修所
テーマ	自然学校のプロ指導者として組織運営の基礎を学ぶ
概要	自然学校を取り巻く状況、自然学校の役割、予算管理、リスク管理、報告書作成等の自然学校組織運営に関する基礎を学び、プロ指導者としての自分の方向性、仕事、組織についてのイメージとその実現のための具体的な指導を考える。またPA（プロジェクト・アドベンチャー）を行い、体験学習法に基づく人間関係トレーニングについて理解する。
講義風景	

受講生の感想

自然学校業界全体という視点での講義は大変参考になりました。自然学校業界の課題として世代交代の必要性に迫られているということ、次世代を担うリーダーに必要なことが何か、そして私たち若手が果たしていくべき役割について考える良い機会となりました。自然学校運営についての講義では、事務局の方から運営上の基本から注意点、コツまで教えていただくことができ、今後、私たちが自然学校で働く際の運営側の視点を学ぶこともできました。

12月1日（月）10時～2日（火）17時

科目	メディック・ファースト・エイド（2日間）
講師	長谷部　雅一　（はせべ　まさかず）
主な役職	Be-Nature School スタッフ、ネイチャーインタープリター
テーマ	小児、乳児、成人のためのCPR（心肺蘇生法）、AED（自動体外式除細動）とその他の応急手当て（ファースト・エイド）を体得する
講義風景	

受講生の感想

緊急を要するときほど、落ち着くことがいかに大変であるかを率直に感じた。今回の実習で、ファースト・エイドキットに備えておくと良いものも分かり、参考になった。ただ、実際には現場にあるもので対処しないといけない状況になる可能性が高い。そのために、下見の時点でも、装備を考慮する際でも、どんな危険の芽があるか、どうしたらそれを摘むことが出来るかを常に意識することが大切だ、と思った。冷静な判断がどんな状態でもできるように、的確な対処ができるように、経験を積んでいきたい。

12月3日（水）10時～17時

科目	インタープリテーション①概論
講師	鳥屋尾　健　（とやお　たけし）
主な役職	（公財）キープ協会環境教育事業部課長
テーマ	インタープリテーション
概要	講義と実習を通して「インタープリテーション」（自然のある場所や史跡等において、単なる情報の提供でなく、直接体験や教材を通して、事物や事象の背後にある意味や関係を明らかにすることを目的とした教育活動）について学ぶ。
講義風景	

受講生の感想

概論では、インタープリテーションが見えるものを通して見えない意味や価値を伝える方法であることを学びました。午後は実践の場もありました。自分たちで10分のプログラムを考え、伝え、お互いのフィードバックを通して刺激し合うことができました。

12月4日（木）10時～17時

科目	インタープリテーション②実技
講師	安西　英明　（あんざい　ひであき）
主な役職	（公財）日本野鳥の会 主席研究員、（公社）日本環境教育フォーラム理事
テーマ	自然の楽しみ方と伝え方、その意義
概要	哲学と知識の基礎を講義するとともに、野外体験後にインタープリテーションの企画を作成して発表、評価しあう。
講義風景	

受講生の感想

実技では、インタープリテーションの根源である、自然界の営みの目線から見た命やその暮らしについて考えを深めることができました。何のためにインタープリテーションを行うのか、私達が伝えたいことは何かといった、初心に立ち戻るきっかけをいただいた講義でした。

12月5日（金）10時～17時

科目	プログラムデザイン①講義
講師	山田　俊行　（やまだ　としゆき）
主な役職	トヨタ白川郷自然學校 校長補佐・事務局長、NPO法人白川郷自然共生フォーラム理事
テーマ	プログラムの構造を学ぶ
概要	1. プログラムとは何か 2. プログラムの構造を考える 3. 良いプログラムと悪いプログラムを分けるものは何か 4. 教育プログラムとレジャー・プログラムの違い 5. プログラム実施までのステップ 6. プログラムの評価① 7. プログラムの料金設定
講義風景	

受講生の感想

プログラムの狙いに合わせて内容が意図的にお客様に伝わるかが読めず、プログラム一つ作ることがとても難しい作業であると思いました。ただ、エンターテインメント性を伴わなければ楽しくない。狙いがぼやけてしまうと内容が参加者に伝わらず、やりたいことが出来ない、お客様満足につながらない。磨かなければならない要素がたくさんあると感じました。

12月6日（土）10時～17時

科目	プログラムデザイン②実技
講師	山田　俊行　（やまだ　としゆき）
主な役職	トヨタ白川郷自然學校 校長補佐・事務局長、NPO法人白川郷自然共生フォーラム理事
テーマ	プログラムの作り方を学ぶ
概要	1．１５分プログラムを作る 2．１５分プログラムの体験とフィードバック 3．プログラムの評価② 4．ネタの探し方 5．小道具について 6．プログラムの質を高めるものは何か 7．まとめ
講義風景	

受講生の感想

プログラム・プレゼンテーションを行う相手に、いかに簡潔かつ魅力的にアピールするかを常に考えておくことも、欠かせないスキルであると思いました。自己満足にならないよう、自分の狙いどおりに、協力してくれるスタッフとの共通意識の下でプログラムを実施する難しさを学びました。

12月10日（水）10時～17時

科目	アウトドア・マーケティング論
講師	中村　達　（なかむら　とおる）
主な役職	日本ロングトレイル協議会代表委員、安藤百福センター 副センター長
テーマ	アウトドア・マーケティングについて理解する
概要	1．アウトドア・マーケティング概論 2．アウトドア・ライフデザイン論 （1）アウトドアズとCSR （2）ロングトレイルと地域観光活性化 3．アウトドア産業論 4．アウトドア史 5．アウトドア・マーケットの課題
講義風景	

受講生の感想

この業界がいまだ発展途上である現在、今後の展望として、観光分野から健康・癒し・環境といったライフスタイル提案型の自然体験を提供することについての話を聞いて、将来活躍するための方向が具体的にイメージできたように思います。日本のロングトレイルについては、社会のニーズや流行にもマッチした「アウトドア業界活性の源づくり」であることがわかり、トレイルの活性化がなぜ今盛んに話題にされるのかを理解することができました。

12月20日（土）10時～17時

科目	修了講習
講師	山田　俊行　（やまだ　としゆき）
主な役職	トヨタ白川郷自然學校 校長補佐・事務局長、NPO法人白川郷自然共生フォーラム理事
テーマ	プロ養成講座全体のまとめと振り返り、今後の進路についての考察を深める
概要	ＯＪＴ（半年）、座学（41日）での体験と学習について、テキストやノートを基に振り返り、自らが何を学び、体得したのかを洗い出す。今後プロ指導者になるために必要な課題やスキルについて考察する。今後のアクション・プランを作成する。
講義風景	

受講生の感想

これまで学んできたことを整理しながら、自分が目指す仕事の実現に向けてアクション・プランを考えました。正直なところ、アクション・プランや行動計画は納得いく形まで詰めきれませんでしたが、これからどういう計画で仕事をしていくかを、今後も引き続き考えながら改善していきます。

自然学校新入職員研修会

2015 年 1 月 13 日ー15 日/2015 年 3 月 3 日ー5 日

全国の自然学校に所属する新入職員を対象とした合同研修会を、東京と京都で開催した。社会人として必要とされるコミュニケーション・スキル（特に、伝える技術）の習得、および自然体験教育に携わる者としての基礎教養を身に付けることに重点を置いた内容を用意した。

■研修内容概要

番号	科目	内容
1	自然学校原論	日本における自然学校が、どのような経緯で今に至り、現状はどうなっているのか、その歩みと特徴を理解する
2	環境教育論	持続可能な社会を目指した環境教育／ESD の現状を知り、今後の課題について考える
3	野外教育などの各種概論【事前学習】	自然学校職員として知っておくべき各種概論を学び、基礎的な教養を身に付ける
4	伝える技術（1）文章の書き方	書類作成が好きになるコツを学び、業務力向上につなげる
5	伝える技術（2）インタープリテーション	インタープリテーションの基本的な考え方を学び、実習ではフィードバックを参考に、自己の伝える技術向上につなげる
6	伝える技術（3）KP 法	KP（紙芝居プレゼンテーション）法の基本的な考え方を学び、思いや考えを整理したプレゼンテーション実習を行う

対象：自然学校（または類する団体）の 1 ～ 2 年目職員（実習生を含む）で、おおむね 20 ～ 30 代の方。また、半年以上の現場経験を積んでいること。

【東京会場】

日程：2015 年 1 月 13 日（火）～15 日（木）

参加者数：23 名（男性 13 名、女性 10 名）

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

【京都会場】

日程：2015 年 3 月 3 日（火）～5 日（木）

参加者数：17 名（男性 10 名、女性 7 名）

会場：青少年野外活動総合センター「友愛の丘」（京都府城陽市）

【講師】

伝える技術（1）　伝わる文章の書き方：

赤羽 博之　（耕文舎代表）

伝える技術（2）　インタープリテーション：

山田 俊行　（トヨタ白川郷自然學校校長補佐・事務局長）

辻　　英之　（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事）

田中 啓介　（ホールアース自然学校執行役員）

砂山 真一　（一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール代表理事）

※山田氏、辻氏は東京会場、田中氏、砂山氏は京都会場の講師

伝える技術（3）　KP 法：

川嶋　　直　（公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長）

講義（1）環境教育論：

阿部　　治　（立教大学教授、日本環境教育学会会長）

講義（2）自然学校原論：

岡島 成行　（安藤百福センターセンター長、青森山田学園理事長）

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

■研修会スケジュール

時間	１日目	時間	２日目	時間	３日目
			朝食		朝食・チェックアウト
		9:00	**伝える技術（2）** インタープリテーション　理論	9:00	**伝える技術（3）** KP 法　理論
12:30	受付	12:00	昼食	12:20	昼食兼作業タイム
13:00	開講 参加者活動紹介	13:00	**伝える技術（2）**　インタープリテーション　実践	13:00	**伝える技術（3）** KP 法　実践
14:00	**伝える技術（1）** 文章の書き方 理論			15:15 15:45 16:30	認定試験 終了、清掃 解散
17:00	夕食	18:00	**講義（2）** 自然学校原論		
18:00	**伝える技術（1）** 文章の書き方 実践	19:15 19:30	移動 情報交換会		
20:00	**講義（1）** 環境教育論				
21:00	終了・チェックイン				

■活動レポート【東京会場】

1 日目の様子

研修会開始

全体進行は NPO 法人自然体験教育センター代表理事の辻英之氏。
素性の知れない者同士の固い雰囲気をほぐしながら、3 日間の研修会がスタートした。

自己紹介プレゼンテーション

1 分間で自分の行っている活動を参加者に紹介した。各地から様々なバックグラウンドを持つ参加者が集まっていることを実感した。

文章の書き方

書きものナビゲーターの赤羽博之氏に、伝わる文章の書き方について講演いただいた。事前課題の作文を一つひとつ解説し、ポイントを共有した。

後半は、参加者の文章を書画カメラで投影。臨場感あふれる“添削ライブ”が行われた。

環境教育論

日本環境教育学会会長の阿部治氏に、環境教育のルーツから、現在の ESD の概念に至るまでの経緯や、これからの日本が抱える課題について講演いただいた。なぜ環境教育が必要なのか、再確認する機会となった。

■2 日目の様子

インタープリテーション

トヨタ白川郷自然學校校長補佐の山田俊行氏から、インタープリテーションの基礎的な理論と手法を学んだ。身近な物を使って、素材にまつわる物語を創作した。

途中、猟師に扮して登場した特別ゲスト。素材（ゲスト自身）の物語を創作するために、参加者からゲストの仕事や生活について、質問が飛び交った。

インタープリテーションに挑戦

グループごとにテーマが与えられ、伝えるための物語を作り、発表を行った。小手先のインタープリテーションで終わらないためには何が重要なのか、根本の部分を学んだ。

自然学校原論

安藤百福センターセンター長の岡島成行氏から、人と自然との関係や、自然学校に期待されていることについての講演があった。これからの生き方を考える機会となった。

■3 日目の様子

KP 法

日本環境教育フォーラム理事長の川嶋直氏に、まずは KP（紙芝居プレゼンテーション）とはどのようなものかを実演していただいた。

KP を作る

各自でテーマを設定し、伝えたいことを KP でまとめて、プレゼンテーションする練習を行った。

最後はグループ発表。言葉の選び方、マーカーの使い方、イラスト、KP の順番など、それぞれ伝えるための工夫が見られ、共有することができた。

筆記試験

研修会で学んだことを再確認した。合格者は、安藤百福センターが自然学校指導者（インストラクター）として認定する。

研修会終了

普段の現場ではなかなか体系的に学ぶことができない、伝える技術と基礎教養をしっかりと学ぶことができた 3 日間だった。事務局としては、これからの自然学校を引っ張る有望な若手職員が、この研修会で学んだことを現場で発揮してくれることに期待したい。

以上

■活動レポート【京都会場】

1 日目の様子

研修会開始

京都での研修会がスタートした。全体進行は地元京都で活躍する、一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール（PENS）代表理事の砂山真一氏。

自己紹介

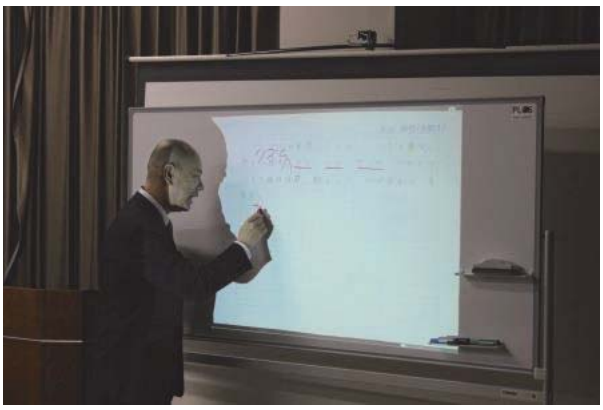
普段の活動内容や地域のイチオシなどを紹介し合った。東北から山陰まで、幅広い地域の参加者が集まった。

環境教育論

日本環境教育学会会長の阿部治氏に、環境教育とは何かという本質的な部分についてお話しいただいた。課題は山積みだが、アクションを起こすことの大切さを確認する時間となった。

文章の書き方

書きものナビゲーターの赤羽博之氏に、伝わる文章の書き方についてお話しいただいた。宿題の作文を題材に、テクニックだけではなく、とことん相手を思いやることの重要性を学んだ。



後半は、白熱の“添削ライブ”。
書き上げた全員の文章に赤入れしながら、ポイントを共有した。参加者にとって、言葉一つ、並び一つ変えるだけで、文章全体の印象がガラリと変わることが驚きだったようだ。

■2 日目の様子

インタープリテーション

講師はホールアース自然学校執行役員の田中啓介氏。インタープリテーションとは何かということを日常の話題でお話しいただいた。プロならば「伝える」から「伝わる」が求められることも力説された。

感覚のアンテナ・テスト。相手にとって感じ方が異なることを実験した。インタープリテーションを行う際は、このことを意識する必要がある。

実践・インタープリテーション

5 つの素材から発表テーマを決め、1 人ずつ 3 分間で発表した。自分以外のインタープリテーションに参加者として関わることが大きな学びにつながった。

自然学校原論

安藤百福センターセンター長の岡島成行氏が、自然学校の若手職員に期待することや、人と自然との共生について講演を行った。この地球には、人間だけがいるわけではないことを再確認する話だった。

■3 日目の様子

KP 法

最終日、日本環境教育フォーラム理事長の川嶋直氏が、KP（紙芝居プレゼンテーション）の実演を行った。KP は初めての参加者が多かった。

KP を作る

各自でテーマを設定し、KP を作成。
グループごとにプレゼンテーションを行った。伝えるために整理することを繰り返し練習した。

最後はグループごとに KP で発表。
良かった点、今一つだった点を全員で共有した。新しいアイデアも生まれた。
最後にプレゼンテーション上達への道についてお話しいただいた。

研修会終了

書く・話す・まとめるといった、伝える技術をとことん学んだ 3 日間。新たなネットワークが生まれた機会でもあった。
現場業務の際に、今回の学びを意識しつつ、さらに活躍してくれることを期待したい。

以上

自然学校運営者合同研修会

2015 年 2 月 23 日ー24 日

自然学校指導者養成講座を修了し、自然学校運営者《インストラクター、ディレクター、マネジャー》に認定された人たちを集めた合同研修会を開催した。世代を超えての議論を行い、自然学校業界を引っ張るための考え方や手法を共有することが主な目的だ。

■概要

日程：2015 年 2 月 23 日（月）～24 日（火）
対象：自然学校指導者養成講座の修了生（1 期～15 期）
参加者数：25 名（修了生 16 名、講師 7 名、事務局 2 名）
会場：安藤百福センター

講師：岡島 成行　（安藤百福センターセンター長、青森山田学園理事長）
若林 千賀子（若林環境教育事務所代表）
砂山 真一　（一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール代表理事）
田中 啓介　（ホールアース自然学校執行役員）
辻　英之　（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事）
山田 俊行　（トヨタ白川郷自然學校校長補佐・事務局長）

特別講師：荻原 健司（北野建設株式会社スキー部ゼネラルマネージャー）

■スケジュール

2 月 23 日（月）

14:00　主催者挨拶、参加者自己紹介
14:30　講話《岡島 成行》
15:30　卒業生からの活動報告
18:00　夕食
18:45　パネル・ディスカッション「これからの自然体験活動のために」
20:00　情報交換会

2 月 24 日（火）

7:30　朝食
9:00　特別講演《荻原 健司》
11:00　終了、解散

■活動レポート

1 日目の様子

講話

安藤百福センターセンター長の岡島成行氏から、「日本における自然学校の意義」と題した講話があった。自然と人との関係を見つめ直し、新しい時代の自然学校に期待することを述べた。

卒業生からの活動報告

現在、どんなポジションでどんな活動を行っているか、養成講座で学んだことがどう活かされているのか、これからどんな活動をしていく予定か、今の悩みなど、1 期生から順番に報告を行った。

卒業後は、独立して自然学校の代表になった者や、海外に拠点を移して活動する者もいた。

パネル・ディスカッション

それぞれの地域で活躍している 4 名のゲストが「これからの自然体験活動のために」というテーマでディスカッションを行った。指導者の役割や、自然体験活動が持続可能な地域づくりにどのように貢献していけるかについて意見交換を行った。

■2 日目の様子

特別講演

スキー・ノルディック複合五輪金メダリストで、「キング・オブ・スキー」の賞賛を受けた荻原健司氏に講演いただいた。社会に貢献できる指導者として活躍を期待していますと、卒業生にエールを送っていただいた。

研修会終了

同期のつながりが深まるだけでなく、縦のつながりも新たにできた集まりとなった。この合同研修会が自然学校業界を引っ張る指導者の原動力となり、より良い社会を創っていただきたいと願う。

CONEトレーナー養成会・認定会

2014年6月17日ー18日 / 2015年2月7日ー8日

平成26年度は、CONEトレーナー養成会を6月に1回、CONEトレーナー認定会を2月に1回開催した。

■トレーナー養成会

平成26年度トレーナー養成会（6月17日～18日）は、5名の参加者を得て、トレーナー認定会までに必要な資質とスキルを理解するための研修を行った。講師は森美文氏（森環境教育事務所代表）、若林千賀子氏（若林環境教育事務所代表）、大浦秀樹氏（埼玉県キャンプ協会理事）に依頼した。

トレーナー養成会では、定められたカリキュラムに従って「ガイダンス」「自然体験活動の特質」「自然体験活動の安全管理」「対象者理解」「自然体験活動の指導」「トレーナー特論」を1泊2日で実施。トレーナー養成会の趣旨を説明した上で、自然と文化や安全管理（保険・法令や危機管理）、企画づくりやアクション・プランづくり、CONEの動向など、CONEトレーナーとして必要な知識およびスキルを修得できるよう、グループ・ワークやプレゼンテーションを交えて行われた。最後に認定会までに修得すべきこと（事前課題を含む）などを説明し、トレーナー養成会を締めくくった。

今回の参加者は、少人数ながら第一線で活躍されている方ばかりであり、充実した研修会となった。今年度はトレーナー養成会の開催が1回のみであったため（例年は2回開催）、次年度は2回開催できるよう広報や日程などの検討をしていきたい。

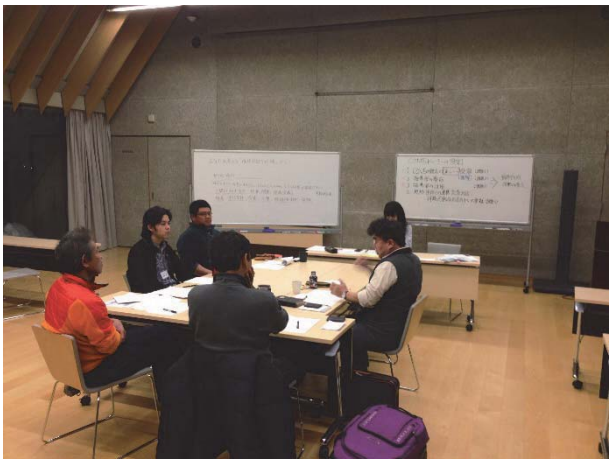
■トレーナー認定会

平成 26 年度トレーナー認定会（2 月 7 日～8 日）は、5 名の参加者を得て実施された。講師はトレーナー養成会に引き続き、森美文氏（森環境教育事務所代表）、若林千賀子氏（若林環境教育事務所代表）、大浦秀樹氏（埼玉県キャンプ協会理事）に依頼した。

トレーナー認定会では、申込時にいくつか課題（養成団体からの推薦状、トレーナーとして習得すべき 126 時間の OJT を記した履修表の提出など）を設けており、条件に達しなければ受講することができない仕組みである。また、審査にあたっては、前回同様に事前課題およびグループ・ワークで 40 点、筆記試験で 30 点、面接で 30 点とし、100 点満点中 70 点以上で合格として、それぞれ評価項目を設けて臨んだ。

事前課題は全部で 4 問設けており、その習熟度をグループ・ワークで確認した（グループにはチューターが入り、その理解度を採点した）。事前課題では、CONE が定めた「自然体験活動憲章」の 5 項目に関することや、指導者養成カリキュラムなどについて、実体験を基に自身の考えや課題、成果などを記入してもらい、それらを踏まえて、認定会では参加者同士で質疑応答や問題点・対策などの議論を行った。

2 日目は、これまでの内容を踏まえた 30 分の筆記試験を実施し、最後に各 15 分程度の個人面接を行って、CONE トレーナーとしてふさわしい能力や経験を身に付けているかを確認した。そして、終了後に講師とともに、基準に従って厳正に採点を行い、合否を判定した（最終的には平成 27 年 3 月に行われた CONE 理事会にて承認）。



参加者数は 5 名と少人数であったものの、結果としてトレーナーの質を担保しつつも合格者は 5 名中 5 名となった（昨年度は 15 名中 8 名合格）。昨年度より認定会申込時に課題提出を条件付けたことにより、参加者の質も上がったものと思われる。

引き続き、質を落とさずに意欲ある参加者が増えていくよう、指導者制度の魅力を高めていきたい。

自然ガイドのための安全管理技術研修会(6 月、12 月)

2014 年 6 月 24 日ー27 日 / 2014 年 12 月 16 日ー19 日

＜公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業＞

6 月 24～27 日

1.実施報告と結果

開催場所　安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
志賀高原・奥志賀高原周辺

参加者　5 名（自然ガイドⅠ：2 名、登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：3 名）

担当講師　長内 覚、平木 順

結果　自然ガイドⅠ：2 名とも合格
登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：3 名中 1 名合格。2 名は平成 27 年 3 月 10～12 日の積雪期スキー研修を受験し、一定以上の水準で修了した者に公益社団法人日本山岳ガイド協会の認定する登山ガイドステージⅡ＋スキーガイド・ステージⅠ資格を付与する。

2.講義および実技内容・研修プログラム

	内容	研修時間
第 1 日目	①　開講式　オリエンテーション ②　フィールドにおける安全管理 ③　安全管理の基本認識 ④　自然界における危険の認識と評価 ⑤　リスクアセスメントの方法と実習	8 時間
第 2 日目	①　危急時対応技術講習会 ②　危険を回避する基本的な方法（実技） ③　ロープを使って、参加者の安全を守る方法 ④　簡単な結び方、危険箇所にロープを固定するアイデア ⑤　山の気象と地形講義	3 時間 4 時間 2 時間
第 3 日目	フィールド実習	8 時間
第 4 日目	①　ロープの使い方　（実技） ～自然歩道、登山道におけるロープ利用の利点～ ～大雨で道が荒れている時などに役立つ技術～ ～具合の悪くなった参加者を安全に導く方法～ ②　事例検証とデータ分析 登山を例にした、山岳事故の分析 ③　まとめ・研修確認試験	4 時間 2 時間 1 時間
4 日間の研修時間	机上講習 実技講習 試験 **合計研修時間**	12 時間 19 時間 1 時間 32 時間

3.講師報告

報告１　長内　覚

講習内容（講義）　安全管理術、リスクアセスメント、山岳事故の分析ほか

（実技）　基本ロープワーク、ツエルトの設営、フィックスロープ・ロアリング、ロアダウン、搬送、ショートロープ

感想　スキー指導者およびCONE系で自然体験指導者の実務者が主な対象者であり、モチベーションも高く、講習態度は真面目だった。さらに5名という少人数なので、効果的な講習ができた。

理解度・習得度　仕事の内容が違うため、特に安全管理の意識に差が出た。実技講義で指導し、危機意識を持たせることを伝えた。

課題　いかに安全管理意識の必要性を理解できるかが課題である。

報告２　平木　順

講習内容（講義）　危急時対応技術、リスクアセスメント、リスクマネジメント、応急手当の基礎

（実技）　ルートガイディング技術、自然解説技術、フィックスロープ・ロアリング、ロアダウン、危急時対応シミュレーション

感想　少人数で、しかも真面目な方ばかりで、夕食後など講習の合間も熱心にテキストを見て勉強される姿が印象的だった。ガイドとしての経験は少ないが、これから研鑽を積むことによって、良いガイドになる方ばかりだという印象を得た。

理解度・習得度　危機管理意識について、JMGAの現役ガイドに比べるとまだまだと言わざるを得ないが、学習意欲が高く、講習した内容を急速に吸収していった。４日間では伝えきれないものもあり、各自で事後学習が必要なことを伝えた。

課題　ルート・ガイディング実習のさらなる必要性を感じた。特に登山ガイド分野をこの研修で取得する者については、山地、登山道での研修をもっと行うべきだと感じた。

また、事故対応シミュレーションを行って感じたことだが、応急手当の知識・スキルが低いと感じた。

12 月 16～19 日

1.実施報告と結果

開催場所　安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

参加者　23 名（自然ガイドⅠ：21 名、登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：2 名）

担当講師　畠山 浩一、長内 覚、平木 順

結果　自然ガイドⅠ：23 名とも合格

登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：2 名合格。2 名は平成 27 年 3 月 10～12 日の積雪期スキー研修を受験し、一定以上の水準で修了した者に公益社団法人日本山岳ガイド協会の認定する登山ガイドステージⅡ＋スキーガイド・ステージⅠ資格を付与する。

2.講義および実技内容・研修プログラム

○12 月 16 日（火）

9 時 30 分　開講式　オリエンテーション　畠山

公益社団法人日本山岳ガイド協会の資格制度について

本研修会の位置付け

10 時 00 分～12 時 00 分

講義　安全管理の基本認識　長内

13 時 00 分～16 時 00 分

実習　危険を回避する基本的な方法　長内　平木　畠山

ロープを使って参加者の安全を守る方法

簡単な結び方、危険箇所にロープを固定するアイデア

ツエルト設営（デモンストレーションと解説）とザック搬送

19 時 00 分～20 時 30 分

講義　自然解説技術　長内

○12 月 17 日（水）

8 時 30 分～12 時 00 分

講義　危急時対応技術　平木

13 時 00 分～16 時 30 分

実技　危急時対応技術　グループ別シミュレーション

19 時 00 分～20 時 50 分

講義　山の気象と地形　畠山

○12 月 18 日（木）

8 時 45 分～16 時 30 分

実習　ルート・ガイディングの実践

3 班に分かれ、参加者がガイド役となって自然解説を行いながら

ガイドする。（安藤百福センター・トレイルを使って）

16 時 30 分～20 時 50 分

情報交換会

○12 月 19 日（金）

8 時 30 分～12 時 00 分

実習　応急手当　　平木

13 時 30 分～14 時 30 分

講義　事例検証データ分析　　長内

15 時 00 分～15 時 40 分

研修確認試験

16 時 00 分　閉講式　解散

スタッフは試験を採点、備品を事務局に発送後撤収（17 時）

3.講師報告

報告 1　長内　覚

感想	各地域での自然学校勤務者や自然体験指導者の経験がある方の参加が多く、若手のモチベーションも高い活発な研修会だった。
理解度・習得度	仕事の内容が違うため、特に安全管理の意識が低い方が多かったが、実技や講義で指導し、危機意識を持たせることを伝えた。結果、参加者が危機意識を持つことができたのではないか。
課題	自然解説の方法にバラツキがあり、その標準化および安全管理意識の必要性を理解できるかが課題である。そのほか、いかに能力的に「判断力と決断力」を向上させるか。
改善策	経験とケース・スタディを指導・伝達する。
今後の要望	時期的にもう 1 週間早くすることで降雪を防げ、参加者が多くなるのでは？（現況だとスキー場オープン日に近すぎる）

報告 2　平木　順

感想	若い方で、しかも自身で自然学校や野外指導の起業を目指す方が目立ち、積極的な姿勢での受講が好ましかった。やる気があるので、将来の伸び代を強く感じた。
理解度・習得度	今回初めてロープを触る方が何人もいて、ロープワークについてはまだまだ練習が求められる。 安全管理の部分においては、ビジター・センターのインタープリターのレベルで十分とは言えなかったが、学習意欲が高く、講習した内容

を急速に吸収していった。

課題　今回予想外の積雪があった。ルート・ガイディング実習の時間自体は、いつもどおり１日間確保することができたが、スパッツなど用意していない者もいて、外での行動を躊躇した。集合案内の際に、どんな天候でも外で実習を行うことを明記する必要性を感じた。
また、集合案内の実習で必要な装備で、以前入っていたはずのツエルト、150～180cm のスリング１本が抜けている。さらに安全環付カラビナが１枚以上となっているので、これを２本以上にして欲しい。

改善策　集合案内に載せた基本装備類、実技研修で必要な装備類は、改訂版を作ったはずなので、古いファイルを破棄していただきたい。

今後の要望　野外活動指導を行っている若者が、今後自然ガイド業界において台頭してくるものと思われる。彼らを育てていくことが、JMGA にとっても業界にとっても必要なことだと感じた。

報告３　畠山　浩一

感想　3 泊 4 日の合宿型の研修会は、決して容易なものではなく、運営する側も、受講する側も物心両面で大変だと思うが、安藤百福センターはフィールドにも恵まれ、講義施設、宿泊施設などで利点を持った施設だと言える。周辺環境も、山岳や登山Ⅱのような内容には不足だが、自然ガイドの研修には充分に対応し、素晴らしい施設と考える。

理解度・習得度　23 名の参加者は、野外体験、登山体験、自然に対する知識、ガイドの実務経験など、かなりの個人差があり、一様な評価は難しいが、意欲的に前向きに取り組んでいる方が多かったので、今回の研修内容を理解されれば、自然ガイドとしての標準レベルには達している。

課題　「自然ガイド」としての解説知識や技術、顧客への対応や気配り目配り、声掛けなどは今後実践を重ねる中で、研鑽を積んでいただきたい。

自然体験活動指導者制度の枠組みを検討する研究会

2014 年 10 月ー2015 年 3 月

■開催趣旨

わが国の自然体験活動の指導者制度は、いまだに全体像がつかめないままになっている。これは自然体験活動そのものの範囲が非常に広いことや、実践団体の歴史的背景の違いなどの理由があるためである。現状、個々の活動・指導者制度は視野に入るが、周辺の実践活動や指導者制度については理解されにくく、実践団体間において共通理解がなされていない。

また昨年度、(独) 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターで実施した「自然体験・野外教育における指導者育成のコーチングに関する基礎的研究」では、「上級指導者が成立するためには幅広い普及活動がなければならない」と指摘されており、指導者制度の確立のためには、自然体験活動が盛んになる必要がある。

このため、自然体験活動の普及活動と、それを行う指導者制度が社会的に理解を得るためにも、まずは各制度が持つ特徴を明確にし、全体像を把握する作業が不可欠になっている。本研究会では表題のとおり、全体の枠組みをどうすべきかについての議論、研究を行う。

■開催スケジュール

(1) 2014 年 10 月　(2) 2015 年 1 月　(3) 2015 年 3 月

■委員（敬称略、五十音順）

座長	岡島　成行	(安藤百福センターセンター長)
委員	磯野　剛太	(公益社団法人日本山岳ガイド協会理事長)
	佐藤　初雄	(NPO 法人自然体験活動推進協議会代表理事)
	重　　政子	(NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議《ESD-J》代表理事)
	関　　智子	(独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター主任研究員)
	高野　孝子	(NPO 法人 ECOPLUS 代表理事)
	田部井淳子	(登山家)
	羽澄ゆり子	(多摩市立連光寺小学校教育連携コーディネーター)
	平川　仁彦	(八海山スキースクール校長)
	平野　吉直	(信州大学教育学部学部長)
	降旗　信一	(東京農工大学准教授)
	山岸　　仁	(独立行政法人国立青少年教育振興機構教育事業部長)

■第１回（2014 年 10 月 30 日）

出席　磯野剛太、佐藤初雄、重政子、高野孝子、羽澄ゆり子、平川仁彦、降旗信一、山岸仁（敬称略、五十音順）

座長：岡島センター長、事務局：安藤財団 荒金次長、小島

(1) 岡島センター長より研究会の趣旨と、現行の指導者制度の説明を行った。

・JEEF、NEAL（CONE）、大学と連携しながら、上級指導者を養成するためのカリキュラム整備を行ってきた。

・自然体験活動のマーケットが小さい、展望が見えない、などの理由から伸び悩みがある。

・指導者制度および上級指導者の必要性、概念を再考する必要がある。

・指導者制度の全体像をはっきりさせたい。

(2) 現在、各委員が感じていることを中心にご意見をいただいた。

・自然体験活動という言葉が分かりにくい。

・何のための自然体験制度や指導者なのか見えづらい。

・社会の状況やマーケットや教育ニーズを意識した制度になっていない。

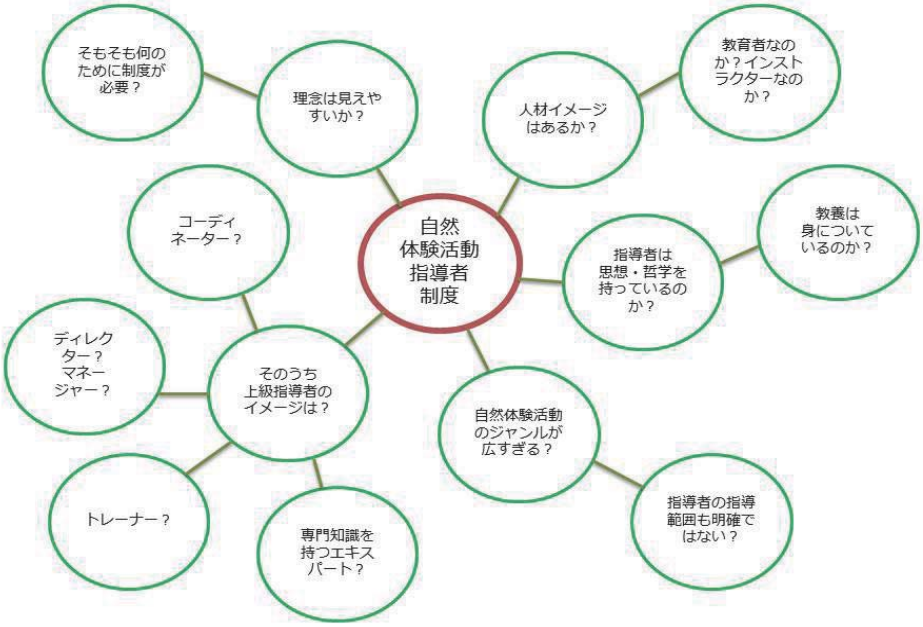
・指導者に上級・下級という概念が必要か？職能で分けるのはどうか？

・制度のどこにポイントを置くか（新しい視点が必要）。

・教養が大切。日本人と自然についての考察が必要。

・コーディネーター、マネジャー教育の必要性は高い。

自然体験活動指導者制度の主な課題《第1回枠組み研究会より》



■第２回（2015 年１月 29 日）

出席　磯野剛太、佐藤初雄、重政子、関智子、高野孝子、羽澄ゆり子、降旗信一
（敬称略、五十音順）　座長：岡島センター長　事務局：安藤、小島

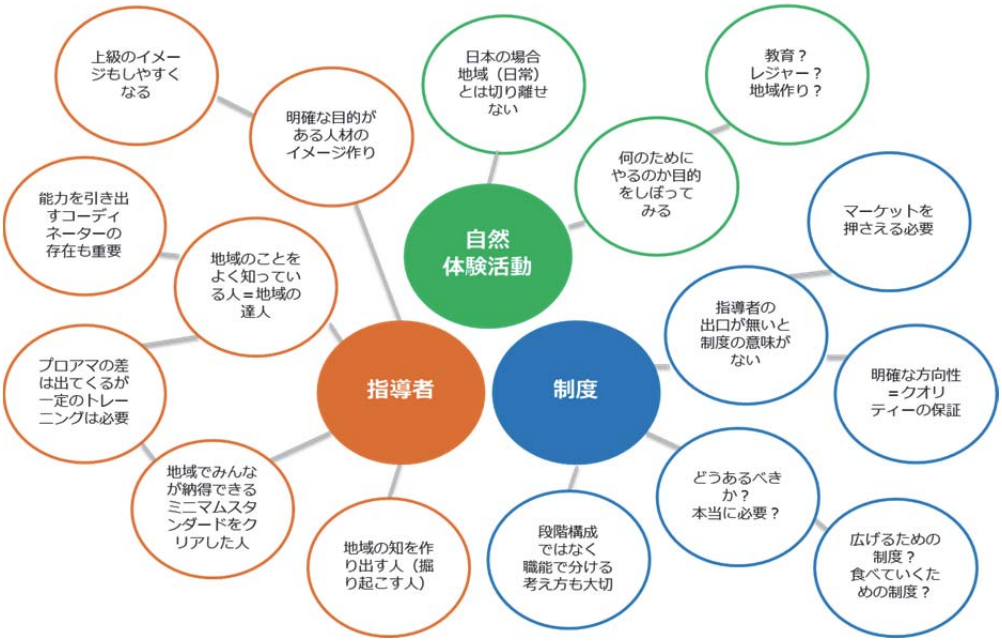
(1) 関智子氏より、アメリカ国立公園局のＮＰＳ（ナショナル・パーク・サービス）における指導者研修システムについてお話しいただいた。

・国立公園局はアラスカ含む全米で 405 公園を管理（大規模）。
・人々が楽しむ、教育のために使う、感動を受ける、次世代に引き継ぐというミッションの下に、職員研修制度が成立（公務員のための研修制度）。
・集合研修だけでなく、遠隔学習プログラム（ビデオ、電話など）が盛ん。
・7 部門のうち、インタープリテーション・教育部門が有名。
・スタートラインを揃えるために、新入職員研修を重視している。
・制度の根底に、入職から退職までカバーするという考え方がある。
・制度の上級に位置するのは、「指導者」ではなく「官僚」となる。

(2) 自然体験活動および指導者の概念をどう捉えていくか、議論を行った。

・何のための自然体験活動か、目的を絞ってみたらどうか。
・明確な目的がある指導者像があれば、上級指導者もイメージしやすい。
・地域の知を掘り起こす人も指導者にするという考え方もある。
・指導者の出口（仕事）がないと、制度の意味がない。
・マーケットを押さえるという発想を持つ。

自然体験活動・指導者・制度をどう捉えるか？《第2回枠組み研究会より》



■第3回（2015年3月17日）

出席　佐藤初雄、重政子、関智子、羽澄ゆり子、平野吉直、山岸仁

（敬称略、五十音順）

ゲスト・スピーカー：中村達（アウトドアジャーナリスト、安藤百福センター副センター長）　座長：岡島センター長　事務局：安藤、小島

(1) 中村達氏より、アウトドア・マーケティングについてお話しいただいた。

・アウトドア・サイドから見ると、自然体験は分かりにくい。
・新しいアウトドア・マーケットとしてロングトレイルがある。
・国内の観光がアウトドア型になってきている。
・青少年教育活動はアウトドアの統計ではカウントされない（アウトドア・メーカーのウェア、装備が売れず、マーケットにならない）。
・市場規模としては、アウトドア・ウェアは5年連続で伸びている。マーケットは成長している。
・アウトドアは産業として見直されてきている。
・アメリカではアウトドア分野の雇用が600万人以上（全産業で最大）。
・スイスやフランスでは大自然の中にまでロープウェイを通したり、マウンテンバイクで山を走らせたり、アウトドア観光を徹底的に行って遊ばせている（だからマーケットが大きくなる）。
・マーケットからすると、自然体験業界はアウトドアのトレンドに乗る、またはトレンドを作ることも必要。

(2) 自然体験活動および指導者の概念をどう捉えていくか、議論を行った。

・自然体験は必要だが、ニーズがない＝マーケットがない。
・教育だから、ビジネスやマーケットという言葉は馴染まない。
・教育がいずれ跳ね返って、マーケットに貢献するかもしれない。
・低年齢層の子どもたちに対する自然体験教育を求める声は増えている（財政的な問題はある）。中学・高校になると欠けてくる。
・ただし、大学入試改革があるから、中学・高校の教育の中身が変わる。
・自然の中に行く若い人は増えている。
・各制度でリーダー、コーディネーター・レベルの横串ではなく、その上のクラスの横串が必要とされているのではないか（スキーの人が山のことを知っている、山の人が海のことを知っている、など）。それぞれの団体の専門性を出し合って、興味関心に基づいて受講できるような枠組みが必要ではないか＝それぞれの個別の団体が、それぞれ持っているプロフェッショナリズムを他のところと共有して、それぞれが高まっていけるような方向性にいけたらいいのでは。

・指導者養成（教育）＋マーケットを創っていく（ビジネス）努力が必要。
・学校教育の自然体験は日常、アウトドア（非日常）とは距離感がある。
・ただ、発展のために学校教育の中に非日常的部分を入れていくのは重要。
・指導者養成のある段階で、教育とビジネスというように違った指向性の養成も検討する必要があるのではないか。
・誰を対象にしてどんな指導者を養成したいのか整理をしないと、出口問題（養成した後はどうなるか）で引っ掛かる恐れがある。
・自然体験のことも、指導者のことも、もっと外へ発信する必要がある。

研究会の様子

■まとめ

今年度実施した３回の会合では、自然体験活動や指導者制度の枠組みを明確にするまでには至らなかった。逆に言えば、それだけ自然体験活動の範囲が広く、複雑だと言える。これまで様々な方が関係し、積み上げてきた自然体験活動。今後さらに普及させるためには、子どもの教育に必要というだけでなく、マーケットを意識することも重要である。そのための土台作りとして、まずは自然体験活動や指導者の概念を整理し、社会に認められる枠組みを構築していく必要があるだろう。

第 2 回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

2014 年 6 月 21 日―22 日

運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではないトレッキングの深い魅力を伝える体験講座として「第 2 回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座」を開催した。今回も、幅広い世代の登山者に人気のある橋谷晃氏を招いて、湯ノ丸山トレッキングと、安藤百福センターで講習会を行った。主に首都圏在住の方々にご参加いただいた。

内　　容：6 月 21 日（土）　湯ノ丸山（2101m）トレッキング、交流会
　　6 月 22 日（日）　講習会「トレッキング用具とウェアの賢い選び方」、
　　「山でのアクシデント対処法」、橋谷晃氏出演番組上映
参加者数：受講生 12 名（男性 4 名、女性 8 名）、講師 1 名、事務局 3 名、
　　サポートスタッフ 2 名（木風舎）
参 加 費：21,000 円（食費、宿泊費、プログラム体験費含む）
講　　師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1 日目）

国の天然記念物に指定されている湯の丸高原のレンゲツツジ群落へ。植物の名前の由来や、一帯の植生について解説を聞きながらゆっくりと歩いた。

見頃を迎えたレンゲツツジの間を抜け、湯ノ丸山の山頂を目指す。途中にはイワカガミ、マイヅルソウなども可憐な花を咲かせていた。

比較的平坦な高原地帯を抜けるとしばらく登りが続く。途中で振り返ると、翌日登る予定だった 360 度のパノラマが魅力の篭ノ登山を望むことができた。

到着後、しばらくして雲の中に入ってしまったが、山頂では熱くなった身体を冷ますように心地良い風が吹いていた。センターに戻ってからは、夕食と交流会を楽しみながら、自身のライフスタイルの中に山歩きをどのように取り入れているかについての情報をお互いに交換した。

■活動の様子（2 日目）

橋谷氏の講習会「トレッキング用具とウェアの賢い選び方」。山歩きに欠かせない基本道具である登山靴・ザック・雨具の 3 点について、自分の山歩きスタイルに合った道具の選び方や、正しい調整方法などについてレクチャーを行った。

次の講習は「山でのアクシデント対処法」。気象に関する知識や備え、危険生物への対処法などについてレクチャーを行った。講習会後には橋谷晃氏出演の「大人の山歩き」が上映され、登る予定だった篭ノ登山と池の平湿原の素晴らしい景色が紹介された。

今回、橋谷氏のガイドウォークで高山植物の美しさや自然のストーリーを楽しむことができた。また、レクチャーではトレッキングの楽しみ方を深めるノウハウを学ぶことができた。

第 3 回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

2015 年 1 月 17 日―18 日

運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではないトレッキングの深い魅力を伝える体験講座を開催した。今回も、幅広い世代に人気のある橋谷晃氏を招いて、篭ノ登山と湯ノ丸山のスノートレッキング、および安藤百福センターでの講習会を行った。

期　　日：2015 年 1 月 17 日（土）11 時 ～ 18 日（日）15 時

内　　容：1 月 17 日（土）　篭ノ登山原生林スノートレッキング
講習会「スノートレッキングのウェア・道具の選び方」
交流会
1 月 18 日（日）　湯ノ丸山（2101m）スノートレッキング

参加者数：受講生 17 名（男性 7 名、女性 10 名）、講師 1 名、事務局 3 名、
サポートスタッフ 1 名（木風舎）
参 加 費：21,000 円（食費、宿泊費、プログラム体験費含む）
講　　師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1 日目）

山の上では雪が舞い、強風吹き荒れる天候のため、コースを変更。スノーシューを履いて篭ノ登山の原生林の中を歩いた。林の中では風がいくらか和らぎ、時折吹き抜けていく風の音と、スノーシューが雪を踏みしめる音が心地良い。木々の大きさに圧倒されながら、誰もいない雪原へ足を踏み入れた。

原生林トレッキング終了後、安藤百福センターにて橋谷氏より「スノートレッキングのウェア・道具の選び方」の講習会を行った。テレマークスキーなどの実物に触れる機会があり、参加者の中にはぜひチャレンジしたいという方もいて、興味深く質問していた。

■活動の様子（2 日目）

2 日目は地蔵峠を出発し、湯ノ丸山の頂上を目指す。快晴の中、雪を踏みしめながら高度を稼いでいく。途中で振り返ると、遠くに富士山が見え、参加者から歓声が上がった。

出発から 2 時間ほどで湯ノ丸山（2101m）の頂上に到着した。強風で吹き飛ばされそうになりながらも、遠くに見える山々をバックに記念撮影。前日の悪天候から一転、この日は北アルプスや八ヶ岳など、360 度の展望を眺めることができた。

冬山の魅力の 1 つに深雪がある。
下山時にはその深雪を滑って降りて行った。
冬にしかできないトレッキングの魅力を堪能した 2 日間となった。

安藤財団の自然体験活動の取り組みについて

安藤財団は、子どもたちの心身の健全な育成を願い、スポーツ振興事業において陸上競技支援の他、以下のとおり自然体験活動の支援を行いました。

1. 「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の実施

自然体験活動の企画案を公募し、選考の上、ユニークで創造性に富んだ企画を立案した50団体に各10万円の実施支援金を贈呈。また、支援した団体から提出された活動報告を審査し、1月に文部科学大臣奨励賞をはじめ優秀団体を表彰しました。

2014年度は194団体から応募があり、支援50団体で延べ24,526人の子どもたちが活動しました。2002年に始まり、以来13年間で支援団体は570団体を超え、16万人以上の子どもたちが活動に参加しました。

文部科学大臣奨励賞の
上越市立大手町小学校（新潟県）

2. 自然体験活動指導者養成事業

2010年5月、長野県小諸市に設立した安藤百福センターを拠点に、子どもたちが行う自然体験活動の指導者を育てる「上級指導者」養成と、指導カリキュラムの研究・開発を行い、自然体験活動の底辺の拡大を図っています。2014年度は69団体、延べ5,210人が利用し、570名の上級指導者を養成しました。

3. ロングトレイルの普及、振興

子どもたちの自然体験の主な活動場所は、山、川、海や身近な森林やキャンプ場が中心であり、どのフィールドでも基本は「歩く」ことです。現在、利用団体の研修プログラムに対応できるように、付帯研修場所として4コース（全長約23km）のトレイルを運営・管理しています。休日になると、多くの地元の人たちが歩いています。

4. 小諸ツリーハウス プロジェクトの推進

安藤百福センターの森では、自然体験に興味がない人でも、「アート」をフックにして、豊かな自然に触れ合ってもらうために、著名なデザイナーや建築家のデザインした既存の枠にとらわれない自由な発想のツリーハウス（6 棟）を展示し、自然体験の底辺拡大を図っています。また、春と秋の年２回、「自然・アート・食」をキーワードとしてツリーハウスイベントを開催し、約 1,000 人の方々が自然に親しみました。

5. ホームページ「自然体験.com」の運営

ホームページを通じて、自然体験活動に関する情報や専門家によるノウハウを保護者や指導者の皆さんに提供しています。また、「トム･ソーヤースクール企画コンテスト」の支援団体からの実施レポートをデータベース化しています。

http://www.shizen-taiken.com/

小諸ツリーハウスプロジェクト「信州の収穫祭」（11 月）

（安藤財団　荒金善一）

巻　末　資　料

安藤百福センター　運営組織

顧問

荒牧　重雄	東京大学名誉教授、火山学者
林　　貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山　庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤　宏基	公益財団法人安藤スポーツ･食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤　徳隆	公益財団法人安藤スポーツ･食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役専務・CSO
委員	岡島　成行	学校法人青森山田学園 理事長 安藤百福センター センター長
	飯田　　稔	びわこ成蹊スポーツ大学 特別顧問 日本野外教育学会 会長
	水野　正人	公益財団法人日本オリンピック委員会 名誉委員
	柳田　剛彦	小諸市長

専門委員会

委員長	節田　重節	公益社団法人日本山岳会 副会長 NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構 会長
委員	磯野　剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長
	河原塚達樹	公益財団法人日本レクリエーション協会 スポーツ振興政策関連事業チーム マネージャー
	小林孝之助	公益財団法人ボーイスカウト日本連盟 リーダートレーナー
	佐藤　初雄	NPO 法人自然体験活動推進協議会 代表理事
	佐藤　博康	松本大学総合経営学部 教授
	中村　　達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 安藤百福センター 副センター長
	橋谷　　晃	木風舎 代表
	平川　仁彦	公益財団法人新潟県スキー連盟 常務理事
	平野　吉直	信州大学教育学部 学部長
	山田　俊行	トヨタ白川郷自然學校 校長補佐 NPO 法人白川郷自然共生フォーラム 事務局長

（2015 年 3 月現在）

2014 年度　事業

■主催事業	
5/17～19	第 5 回　浅間大学院生セミナー
6/21～22	第 2 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
10/6～12/21	第 15 期「自然学校指導者養成講座」
11/26～27	第 5 回　環境思想シンポジウム
1/13～15	自然学校新入職員研修会（東京）
1/17～18	第 3 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
2/23～24	自然学校運営者合同研修会
3/3～5	自然学校新入職員研修会　（京都）
■共催事業	
2/21～22	日本ロングトレイル協議会 「第 2 回　ロングトレイルシンポジウム」
■後援事業	
6/24～27	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」
12/16～19	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」

2014 年度　上級指導者研修会利用状況

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
4/19～20	有限会社ビーネイチャー「自然を伝えるために～身体感覚講座～」	5	1	1	
4/21～22	NPO 法人浅間山麓国際自然学校「インタープリターミーティング」	15	2	3	
5/17～19	安藤百福センター「第 4 回 浅間大学院生セミナー」	21	6	3	
6/17～18	NPO 法人自然体験活動推進協議会「第1回CONE トレーナー養成会」	5	3	2	
6/24～27	公益社団法人日本山岳ガイド協会「自然ガイドのための安全管理技術研修会」	5	2	0	
6/28～29	長野県レクリエーション協会「東北信合同レク・フォローアップ研修」	45	5	6	
6/30～7/1	NPO 法人自然体験活動推進協議会「自然体験指導者のためのコーチング研修会」	6	0	0	
9/5～7	一般社団法人日本ポールウォーキング協会「マスターコーチ CAMP」	34	2	5	
9/8～9	公益社団法人日本山岳ガイド協会「危急時対応技術義務講習会」	21	5	1	
9/13～16	公益社団法人日本山岳ガイド協会「ファーストエイド講習会」	26	9	1	
9/27～28	公益社団法人日本山岳会「支部登山指導者講習会」	13	2	1	
10/6～12/21	安藤百福センター「第 15 期自然学校指導者養成講座」	4	28	1	
10/20～22	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部「フォローアップ講座」	5	3	0	
10/28	NPO 森林ウォーカーズ YuToRi ゆ＆り「自然体験ワーク指導者研修」	22	3	0	

11/4～5	公益社団法人日本山岳ガイド協会「危急時対応技術講習会」	29	6	0	
11/11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会「自然ガイドのためのロープアクティビティ」	6	1	0	
12/2	静岡山岳自然ガイド協会「危急時対応技術研修」	11	1	0	
12/2～4	有限会社ビーネイチャー「職員研修」	8	2	0	
12/5～6	NPO 法人蓼科・八ヶ岳国際自然学校「自然体験活動指導者研修会」	9	2	1	
12/9～10	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部「インタープリター研修」	12	3	0	
12/15～16	NPO 法人白川郷自然共生フォーラム「新入職員研修」	6	0	0	
12/16～19	公益社団法人日本山岳ガイド協会「自然ガイドのための安全管理技術研修会」	23	3	0	
12/18	長野県レクリエーション協会「全国レクリエーション大会研究フォーラム部会会議」	2	0	0	
12/20～21	NPO 法人やまぼうし自然学校「2014 年評価会」	25	1	7	
1/13～15	安藤百福センター「自然学校新入職員研修会」（東京）	23	11	0	
2/7～8	NPO 法人自然体験活動推進協議会「CONE トレーナー認定会」	5	3	2	
2/21～22	日本ロングトレイル協議会「第 2 回ロングトレイルシンポジウム」	96	29	0	
2/23～24	安藤百福センター「自然学校運営者合同研修会」	16	7	3	
3/2～3	北軽井沢スウィートグラス「スタッフ研修」	43	1	1	

3/3～5	安藤百福センター 「自然学校新入職員研修会」 （京都）	17	7	0	
3/17～18	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部「インタープリター研修」	7	3	1	

565 名

2014 年度　利用状況

月	日	団 体 名	事 業 名
4	13	山岸よしあき事務所	森林ウォークと健康についての勉強会
	15～17	一般財団法人休暇村協会	ふれあいプログラム研修
	19～20	有限会社ビーネイチャー	自然を伝えるために ～身体感覚講座～
	21～22	NPO 法人浅間山麓国際自然学校	インタープリターミーティング
5	12～13	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部	職員総会
	16	社会福祉法人小諸市社会福祉協議会	シニア世代の専門講座 ～健康と自然～
	17～19	安藤百福センター	第 4 回浅間大学院生セミナー
	23～24	安藤百福センター	ツリーハウスお披露目イベント
	24～25	植村冒険館	アドベンチャー講座
	27～30	日清食品ホールディングス（株）	新入社員研修会
	30	社会福祉法人小諸市社会福祉協議会	シニア世代の専門講座～健康と自然～
6	6	社会福祉法人小諸市社会福祉協議会	シニア世代の専門講座～健康と自然～
	17～18	NPO 法人自然体験活動推進協議会	CONE トレーナー養成会
	21～22	安藤百福センター	第 2 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	24～27	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
	28～29	長野県レクリエーション協会	東北信合同レク･フォローアップ研修
	6/30 ～ 7/1	NPO 法人自然体験活動推進協議会	自然体験指導者のためのコーチング研修会
7	5～6	小諸青年会議所	小諸青年会議所 50 周年記念事業
	13	上田市教育委員会生涯学習課	野外活動リーダー養成講座
	19～20	日清食品ホールディングス（株）	研修会
	23～24	公益社団法人日本環境教育フォーラム	東京シニア自然大学
8	3～5	東京造形大学	小諸の食と自然体験する研修会
8	6～8	小諸市立野岸小学校	全特連発達障害教育夏期セミナー

月	日	団 体 名	事 業 名
	23～24	長野県教育委員会	教員研修会
	29～30	日清食品ホールディングス（株）	自然体験活動指導者養成研修会
9	1～3	立教大学大学院	異文化コミュニケーション研究科合宿
	5～7	一般社団法人日本ポールウォーキング協会	マスターコーチ CAMP
	6	小諸市役所	トレイル活用検討会
	8～9	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術義務講習会
	13～16	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	17～19	アジアのわ	幼児対象体験学習支援研修
	18～21	清泉女学院短期大学	自然体験指導者養成講座
	20～21	大妻女子大学大学院	環境教育講義
	21～23	清泉女学院短期大学	自然体験指導者養成講座
	27～28	公益社団法人日本山岳会	支部登山指導者講習会（第 2 回）
	29～30	小諸市役所総務課	小諸市新規採用職員基礎研修会
10	1～2	NPO 法人千葉自然学校	千葉シニア自然大学後期研修
	3～4	日本ロングトレイル協議会	第 8 回ロングトレイルフォーラム事前会議
	10/6 ～ 12/21	安藤百福センター	第 15 期自然学校指導者養成講座
	8	信州外あそびネットワーク	人材創出部会会議
	20～22	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部	フォローアップ講座
	28	NPO 森林ウォーカーズ YuToRi ゆ＆り	自然体験ワーク指導者研修
	27～29	NPO 法人新現役ネット	次世代に伝えよう「残すべき自然環境」
11	4～5	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	8	信州大学アルティメットチーム LOOSE	ASE 研修
	11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのためのロープアクティビティ
	13～16	安藤百福センター	ツリーハウスイベント「信州の収穫祭」
	26～27	安藤百福センター	第 5 回環境思想シンポジウム
12	2	静岡山岳自然ガイド協会	危急時対応技術研修
	2～4	有限会社ビーネイチャー	ビーネイチャー合宿

月	日	団 体 名	事 業 名
12	5～6	NPO 法人蓼科・八ヶ岳国際自然学校	自然体験指導者研修会
	9～10	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部	インタープリター会議･ウオーキングイベント･ICT よろず相談会
	11～15	NPO 法人国際自然大学校	スキートレーニング研修会
	15～16	NPO 法人白川郷自然共生フォーラム	新入職員研修
	16～19	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
	18	長野県レクリエーション協会	全国レクリエーション大会研究フォーラム部会会議
	20～21	NPO 法人やまぼうし自然学校	2014 年評価会
	22	霧ヶ峰植物研究会	霧ヶ峰植物研究会植生調査研修
1	17～18	安藤百福センター	第 3 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	31 ～ 2/1	小諸市役所	小諸市の地域資源の利活用について考える
2	7～8	NPO 法人自然体験活動推進協議会	平成 26 年度 CONE トレーナー認定会
	14～16	日清食品ホールディングス(株)	インターンシップ研修
	20～22	日本ロングトレイル協議会	第 2 回 ロングトレイルシンポジウム
	23～24	安藤百福センター	自然学校運営者合同研修会
3	2～3	北軽井沢スウィートグラス	スタッフ研修
	4～6	NPO 法人自然体験活動推進協議会	NEAL リーダー養成講座
	17～18	一般社団法人嬬恋軽井沢自然倶楽部	インタープリター会議･ICT よろず相談会・理事会

『人と自然　第6号』への投稿論文を募集します

投稿論文規程

1. 投稿の内容

(1) 「人と自然（以下、本誌)」に掲載される内容は、人と自然に関わる原著論文、研究報告、総説、評論、実践報告、資料として完結していること。なお、投稿論文に対しては審査を行う。

(2) 本誌へ筆頭として投稿できる論文数は、原著論文その他すべてを含み 1 人 2 編以内に限る。

(3) 本誌の発行回数は原則として年 1 回とする。投稿は年間を通じて随時受け付け、指定の締切日に投稿されたものを編集、審査、製本、発送する。

2. 編集委員会

(1) 本誌の編集その他の責任は、「人と自然　編集委員会」が行う。当委員会は事務局員を含む編集委員若干名によって構成される。

(2) 当委員会は次の活動を行う。

a 本誌の編集、製本、発送などに関すること。b 投稿論文の審査員の選考、依頼などに関すること。c 投稿規程などに関すること。d その他、本誌に関すること。

3. 論文の形式

(1) 原著論文は、タイトル、執筆者名とその所属、キーワード、欧文要約、本文のすべてが揃っていることとし、原著論文以外のものは欧文要約を省略することができる。

(2) 製本は A4 判、1 ページ 1 段とし、各段は 42 字×36 行とし、1 論文に付き刷り上がり 8 頁（図表、写真その他すべてを含む）以内を原則とする。ただし、1 頁目はタイトルおよび執筆者名、所属、キーワードで 5 行ほどのスペースをとるものとする。

4. 投稿の方法

(1) 投稿は、「である」調でのワープロ原稿とする。提出部数は 3 部（2 部は複写可)、その他 2 部（1 部は複写可）とし、Microsoft Word またはその他のワープロソフトで上記製本のフォーマットに則って作成し、電子メールにて『人と自然』編集委員会、info@momofukucenter.jp まで送付すること。**締切日は 2016 年 4 月末日。**

(2) 図表、写真などはそれぞれに必ず通し番号とタイトルを付けること。

(3) 引用箇所の右肩に(1)、(2)のように該当する文献番号を付け、その順に引用および参考文献リストを原稿の最後に掲載すること。記載の順序は、単行本の場合、著者、書名、頁、発行所、西暦発行年月日の順とし、雑誌および研究誌の場合、著書、題目、雑誌名、巻号、頁、西暦発行年月日とする。

5. その他

(1) 本誌に投稿した論文の別刷りを希望する場合、各執筆者が行うこととする。

あとがき

安藤百福センターは、安藤百福氏の意向で「将来を担う子どもたちの健全育成を願って自然体験活動を普及し、そのための指導者を育成する」ことを目的に設立された。当初、日本環境教育フォーラムの自然学校プロ指導者（職業として従事する指導者）と青少年団体など幅広い団体が参加する自然体験活動推進協議会（CONE）の指導者（トレーナー）が対象であった。

しかし、ここ数年、自然学校の指導者体制が微妙に変化し、また、CONE と国立青少年教育振興機構との提携でできた NEAL 制度がなかなか進展しない。発足当初の 2 つの柱、自然学校指導者養成講座と CONE 指導者制度の 2 つがともに揺らいでいるのである。

自然学校指導者養成講座は、日本環境教育フォーラムが長年実施していたものを安藤百福センターが引き継いだのだが、講座を受けずに自然学校で研修生となる者が増えており、1 年を通じて受講するこの養成講座の課題になっている。15 年前、徒弟制度的な指導者養成の弊害を克服するために、様々な自然学校が共同で指導者養成をしようとした原点が失われ、指導者の知識や技能が学校によって差が出てくる結果を招きつつある。さらに、中堅職員の研修機会も減少傾向にあり、早急な改善が必要となっている。

一方、安藤百福センターでは、山岳ガイド協会やロングトレイル協議会といった新たな団体との連携が深まってきている。その結果、自然学校と CONE の指導者養成以外に、山岳ガイドやロングトレイル、スキーなどの指導者の養成に力が入るようになってきている。

登山もロングトレイルも自然体験活動であり、その指導者養成の範囲が広がることは大変喜ばしいことである。だが、当初から力を入れてきた自然学校と CONE の指導者養成が勢いを失っている。時代の流れに適応できない団体や活動は自然消滅するのが宿命なのだが、自然学校や CONE にもまだ役目が残っているのではないかと思い、今回は自然学校の存在意義について一文を寄せた。これを機に議論が沸くことを願っている。

安藤百福センターでは、2014 年も例年どおり様々な活動が行われ、活動報告もバラエティに富む内容となった。2015 年の運営委員会で、今後は上級指導者に限らず、一般指導者の養成や自然体験活動全般の普及活動にも取り組んでいく方針が決まり、安藤百福センターは新たな段階に足を踏み入れることになった。百福氏の願いを達成すべく、鋭意努力を重ねていきたいと思う。

岡島　成行（安藤百福センター センター長）

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要
第 5 号
発行日：2015 年 10 月 1 日
発行人：安藤　宏基
編集人：岡島　成行

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071　長野県小諸市大久保 1100
Tel ：0267-24-0825
Fax：0267-24-0918
URL：http://momofukucenter.jp/
E-Mail：info@momofukucenter.jp